御津町埋蔵文化財発掘調査報告10

備前原遺跡

２００２年3月

岡山県御津町教育委員会

例　　言

1　本書は、岡山市消防局北消防署御津出張所建設に伴い、御津町教育委員会が主任　長谷川一英を担当者として実施した、「備前原遺跡（びぜんはらいせき）」の発掘調査報告書である。

2　調査地は岡山県御津郡御津町大字宇垣（うがき）字山條（やまじょう）140番地の2に所在する。

3　現地での発掘調査は1990年４月２日から５月23日まで、出土遺物の洗浄、注記は５月31日まで実施し、2001年度に本書の作成を行った。

4　調査及び本書の作成にあたっては、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、御津町役場、地元宇垣地区の方々、御津町文化財保護委員会等から、ご指導、ご支援を賜った。深く感謝の意を表します。

　また、別記作業員の方々のご協力も得た。

5　出土遺物、図面、写真は御津町教育委員会で保管している。広く活用されることを望む。

6　本書の執筆、編集は長谷川があたった。

凡　　例

1　土層断面図等の高度はすべて海抜高度である。

　方位は図１~３が真北、他が磁北である。備前原遺跡附近の磁針方向は西偏約６°30′である。

2　遺物実測図の縮尺率は土器1/4、打製石器2/3、磨製石器1/2を基本とする。石器の網点は磨滅部分を示す。

3　遺跡名の略号は『ＢＨＲ90』とした。ＢＨＲは備前原（BiZeN-HaRa）90は調査年度を表す。

　遺物には、取り上げ単位ごとに、取り上げ年月日順に01から登録番号を付与した。遺物への注記は『BHR90-登録番号』のみとし、出土層位・遺構・年月日は別途作成した遺物台帳に記録している。

4　遺物の取り上げ、本書の記述に際して、遺構名に以下の略号を使用した。

　ＳＤ…溝・流路

　ＳＫ…土壙

　ＳＰ…ピット

　また、各遺構種別ごとに、検出順に01から遺構番号を付与し、遺構略号の後に示した。

目　　次

例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ　調査の経緯と経過 …… 4
　1　調査に至る経緯 …… 4
　2　調査日誌（抄） …… 4
Ⅲ　調査成果 …… 7
　1　はじめに …… 7
　2　第１層 …… 7
　3　第１遺構面 …… 8
　4　第２層 …… 13
　5　第２遺構面 …… 16
　6　第３層 …… 18
　7　第３遺構面 …… 19
　8　第４層 …… 22
　9　第４遺構面 …… 27
　10　第５層 …… 27
　11　第５遺構面 …… 35
　12　第６層 …… 36
　13　第６遺構面 …… 37
　14　第７層 …… 38
　15　第７遺構面 …… 41
　16　第８層 …… 41
　17　第８遺構面 …… 43
　18　第９層 …… 43
　19　第９（最終）遺構面 …… 47
Ⅳ　まとめ …… 49
　土器観察表 …… 51

石器観察表 …… 57
報告書抄録 …… 73

図　目　次

図１　御津町位置図 …… 1
図２　調査地周辺遺跡分布図 …… 3
図３　調査地位置図 …… 5
図４　調査地周辺平面図 …… 6
図５　第１層出土遺物実測図 …… 8
図６　調査地東壁土層断面図 …… 9~10
図７　調査地南壁土層断面図 …… 11~12
図８　第１遺構面平面図 …… 13
図９　第２層出土遺物実測図（１） …… 14
図 10　第２層出土遺物実測図（２） …… 15
図 11　第２遺構面平面図 …… 16
図 12　畦畔１土層断面図 …… 17
図 13　畦畔１出土遺物実測図 …… 17
図 14　畦畔２土層断面図 …… 18
図 15　畦畔２出土遺物実測図 …… 18
図 16　第３層出土遺物実測図 …… 18
図 17　第３遺構面平面図 …… 19
図 18　SD01 土層断面図 …… 20
図 19　SD01 出土遺物実測図 …… 21
図 20　SD02 出土遺物実測図 …… 21
図 21　第４層出土遺物実測図（１） …… 23
図 22　第４層出土遺物実測図（２） …… 24
図 23　第４層出土遺物実測図（３） …… 25
図 24　第４層出土遺物実測図（４） …… 26
図 25　第４層出土遺物実測図（５） …… 27
図 26　第４遺構面平面図 …… 28
図 27　第５層出土遺物実測図（１） …… 29
図 28　第５層出土遺物実測図（２） …… 30
図 29　第５層出土遺物実測図（３） …… 31
図 30　第５層出土遺物実測図（４） …… 32
図 31　第５層出土遺物実測図（５） …… 33
図 32　第５層出土遺物実測図（６） …… 34
図 33　第５層出土遺物実測図（７） …… 35
図 34　第５遺構面平面図 …… 36
図 35　第６層出土遺物実測図 …… 37
図 36　第６遺構面平面図 …… 37
図 37　第７層出土遺物実測図（１） …… 39
図 38　第７層出土遺物実測図（２） …… 40
図 39　第７遺構面平面図 …… 41
図 40　第８層出土遺物実測図 …… 42
図 41　第８遺構面平面図 …… 43
図 42　第９層出土遺物実測図（１） …… 45
図 43　第９層出土遺物実測図（２） …… 46
図 44　第９層出土遺物実測図（３） …… 47
図 45　第９（最終）遺構面平面図 …… 48
図 46　層序模式図 …… 49

写真目次

写真１　調査地周辺航空写真 …… 61
写真２　調査地遠景（西から） …… 62
写真３　第１遺構面（東から） …… 62
写真４　第２遺構面（東から） …… 63
写真５　第３遺構面（東から） …… 63
写真６　第４遺構面（東から） …… 64
写真７　第９(最終)遺構面（東から） … 64
写真８　第２層上層出土土器 …… 65
写真９　第３層出土土器 …… 65
写真 10　ＳＤ０１出土土器 …… 66
写真 11　ＳＤ０２出土土器 …… 66
写真 12　第４層上層出土土器 …… 67
写真 13　第４層下層出土土器 …… 67
写真 14　第５層上層出土土器 …… 68
写真 15　第５層下層出土土器 …… 68
写真 16　第７層出土土器 …… 69
写真 17　第９層上層出土土器 …… 69
写真 18　出土打製石器 …… 70
写真 19　出土磨製石器 …… 70
写真 20　第９層下層出土土器 …… 71
写真 21　出土遺物（１） …… 71
写真 22　出土遺物（２） …… 72

調査参加者

北山君恵　北山謙吾　古家悦子　高角光恵　田口静子　寺門和寿　寺門順子　寺門秀夫
吉村弘　吉村芳子　吉行久枝

Ⅰ　地理的・歴史的環境

岡山県御津郡御津町は、県北の蒜山山麓に源を発し、県域の中央を瀬戸内海へ注ぐ旭川のほぼ中流域に位置し、1955年の町村合併により誕生した町である。『御津』の名は、1900年、御野(みの)郡と津高(つだか)郡の合併により御津郡が設置されたことに由来している。近年、工業団地造成による企業の進出、近隣に空港、高速道路のインターチェンジの開設、岡山市に隣接することから宅地開発等によって、従来の水田の広がる農村から姿を変えつつある。

町域の約８割は山林で、西部には吉備高原に続く標高400m級の山地も見られる。それらの山地の間を流れる旭川とその支流沿いに平地が形成されている。遺跡の多くはそこに立地している。

備前原遺跡は、旭川と南西から東流する三谷川によって旭川右岸に形成された平地上に存在している。平地内には富谷(とみたに)、山條、鳴(なる)から三谷川へ至る低位部がみられることから、今回の調査でも検出したような旧河道が何本か存在し、これらによって分断された微高地上に遺跡は立地している。

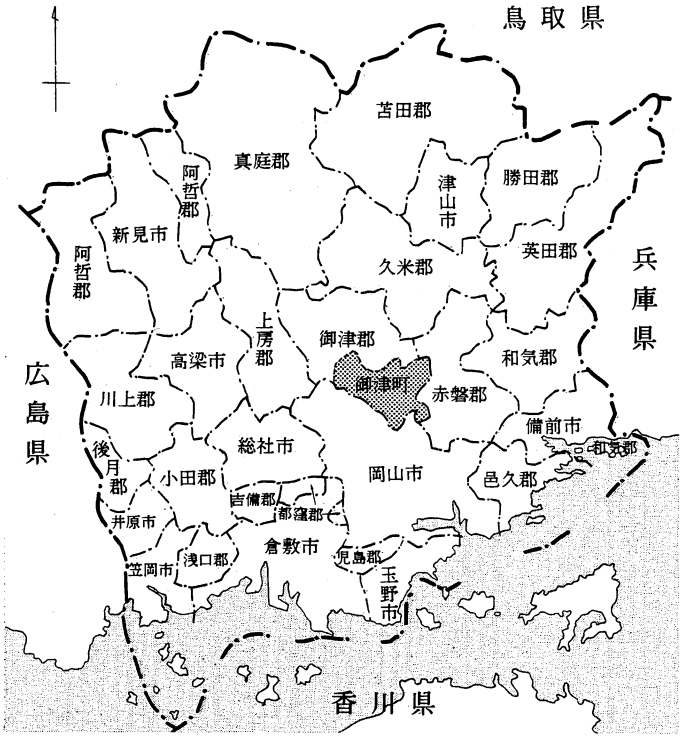


図１　御津町位置図

御津町内では圃場整備が進められ、それに伴う発掘調査が実施されたこともあって、原始・古代の姿が明らかになってきている。町内で最も古い遺物は平岡西遺跡で出土した縄文時代早期末の土器片である。前期の土器片も出土している。後期のものは寺部遺跡、鍛冶屋谷遺跡、伊田沖遺跡、備前原遺跡等から出土している。晩期のものは前述の遺跡に加えて、鹿瀬遺跡、野々口遺跡等で出土している。野々口遺跡ではドングリが出土し、現在でもトチが出土していることから、貯蔵穴の存在が想定できる。

弥生時代の遺跡は縄文時代から続いて営まれたものの他に、矢知遺跡、新庄尾上遺跡、上伊田遺跡等、五城地区に多く見られる。これは、発掘調査が行われたのが宇垣地区と五城地区を中心とするためであり、1998年度から県教育委員会によって行われている県内遺跡詳細分布調査によって、従来、遺跡の希薄であった地区においても小規模ながら散布地が発見されている。おそらく、弥生時代中・後期になると町内全域で集落が形成されていたのであろう。これらの遺跡は以降も連綿と営まれ、それぞれの時期の遺物が出土している。特記されるのは、備前原遺跡の北西に存在していた西奥遺跡である。特殊壺、特殊器台を伴う土壙墓を検出している。

古墳は、新庄川水系に前方後円墳の天神鼻１号墳、八ッ塚古墳が、宇甘川水系に前方後方墳の菅２号墳が存在する。備前原遺跡周辺では、北東の丘陵上に６世紀に位置付けられる金川古墳が存在した。西側の丘陵上には７基の古墳から成る宇根山古墳群が存在する。しかし、原遺跡の規模から見て、その数は少ないと言えよう。

奈良時代になると、1988年度に町教育委員会が実施した原遺跡山條・富谷地区の調査において、同時期の瓦が多量に出土している。軒丸瓦には備中国分寺、美作国分寺等で出土したものに類似したものが含まれている。私寺・氏寺の一つが営まれていたのであろうか。

中世になると、水陸交通の要衝として、金川城、徳倉城をはじめ、多くの山城が築かれるようになる。町内の金川は、西備前の有力戦国大名である松田氏の居城である金川城の城下町として栄えた。また、津山往来、旭川の水運の中継地としても賑わった。

1　散布地
2　金川（玉松）城
3　菅１号墳
4　菅２号墳
5　備前原遺跡（☆は調査地）
6　宇根山古墳群
7　散布地
8　散布地
9　散布地
10　散布地
11　野々口遺跡
12　散布地
13　虫名１号墳
14　虫名２号墳
15　散布地
16　恋坂古墳

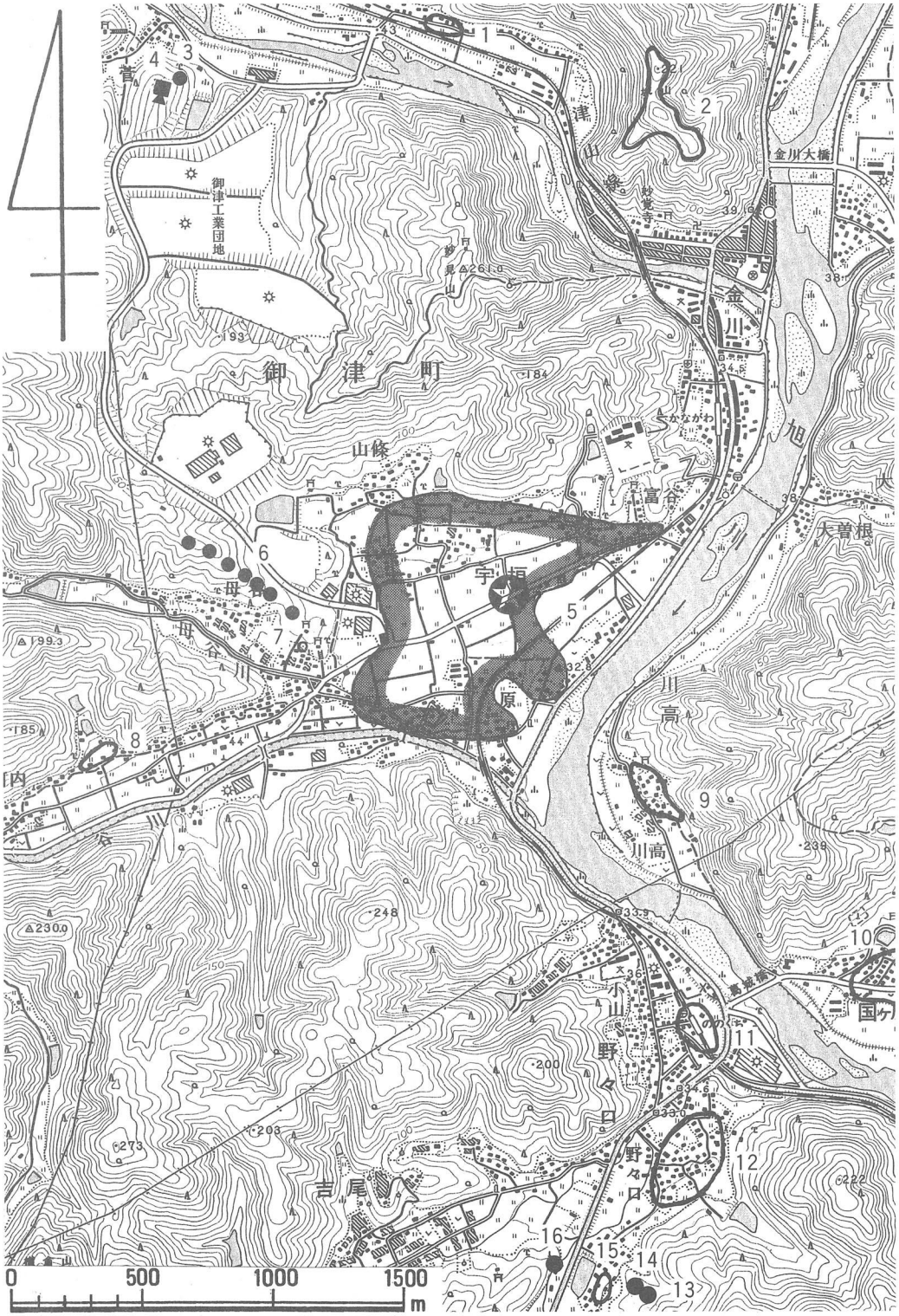


図２　調査地周辺遺跡分布図

Ⅱ　調査の経緯と経過

1　調査に至る経緯

御津町の消防体制は御津町消防団が担ってきた。しかし、工業団地の造成等企業誘致が進むにつれ、それらの有事への対応がボランティアである消防団員では難しくなってきた。また、国道53号等の通行量の増大から、事故の増加も懸念されていた。高度の装備と技術・知識をもつ常備組織消防の整備が求められるようになってきた。行政においても種々検討を重ね、岡山市へ消防、救急業務を委託することになった。

そこで、御津町での活動拠点である岡山市消防局北消防署御津出張所を建設することとなった。設置場所について、町内各所への到達時間等を勘案し、宇垣地区が候補地となった。該当地区は全面に圃場整備が実施され、農地転用は困難であったが、県道妹尾・御津線沿いに用地が確保出来た。しかし、宇垣地区はほぼ全域が周知の遺跡である備前原遺跡のため、屋舎建築に先立って発掘調査が必要になる。町役場より町教育委員会へ調査について打診があったが、町教委の調査員は五城地区で県営圃場整備事業に伴う新庄尾上遺跡の調査に従事していた。消防体制の早期整備という重要性から、圃場整備事業主体者の岡山県岡山地方振興局、地元地権者の方々にご理解を頂き、新庄尾上遺跡の調査を一時中断して備前原遺跡の調査を実施することとなった。

1990年３月８日付け、御総第1372号で御津町長より文化財保護法第57条の３に基づく発掘の通知があり、町教委は同日付け、御地教第1903号で岡山県教育委員会教育長へ進達した。３月15日付け、教文埋第6038号で県教委教育長より発掘調査を実施するむね通知があった。

３月８日付け、御地教第1901号で町教委教育長より保護法第98条の２に基づく発掘調査の通知を通知した。現地での調査は、屋舎部分約300㎡を対象に、４月２日～５月23日まで実施した。

2　調査日誌（抄）

３月 18 日　耕作土機械掘削

４月 ２日　機材搬入　第１層掘削開始

４月 ７日　第１遺構面　精査　遺構掘削　写真撮影　平板実測　第２層掘削開始

４月 ９日　北壁東半・西壁北半土層断面　写真撮影　実測

４月 10 日　北壁西半土層断面　写真撮影　実測

４月 14 日　第２遺構面　平板実測

４月 16 日　第２遺構面　精査　写真撮影　第３層掘削開始

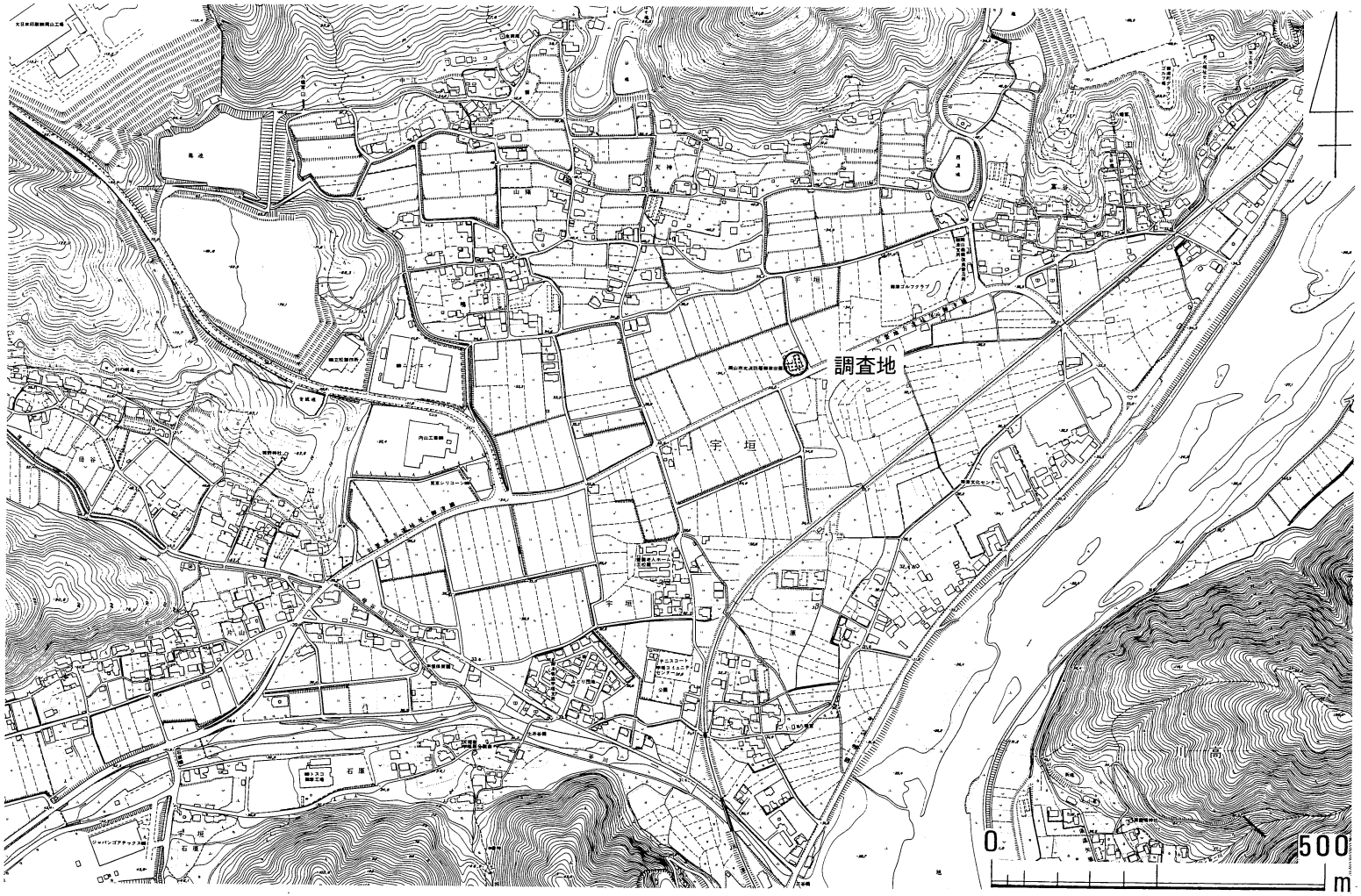


図３　調査地位置図

4月18日　SD01土層断面　写真撮影　実測

4月19日　畦畔土層断面　写真撮影　実測

4月25日　第3遺構面　精査　写真撮影　平板実測　第4層掘削開始

5月 1日　第4遺構面　精査　写真撮影　平板実測　第5層掘削開始

5月 9日　第5遺構面　精査　写真撮影　平板実測　第6層掘削開始

5月10日　第6遺構面　精査　写真撮影　南壁西半土層断面　写真撮影　実測

5月11日　第6遺構面　平板実測　第7･8層掘削開始　南壁東半土層断面　写真撮影　実測

5月12日　第7･8遺構面　平板実測　第9層掘削開始

5月17日　第9遺構面　平板実測

5月21日　第9遺構面　写真撮影　東壁土層断面　実測

5月22日　東壁土層断面　写真撮影　実測　機材撤収　新庄尾上遺跡の調査現場へ

5月23日　東壁土層断面　実測　調査地周辺　平板実測

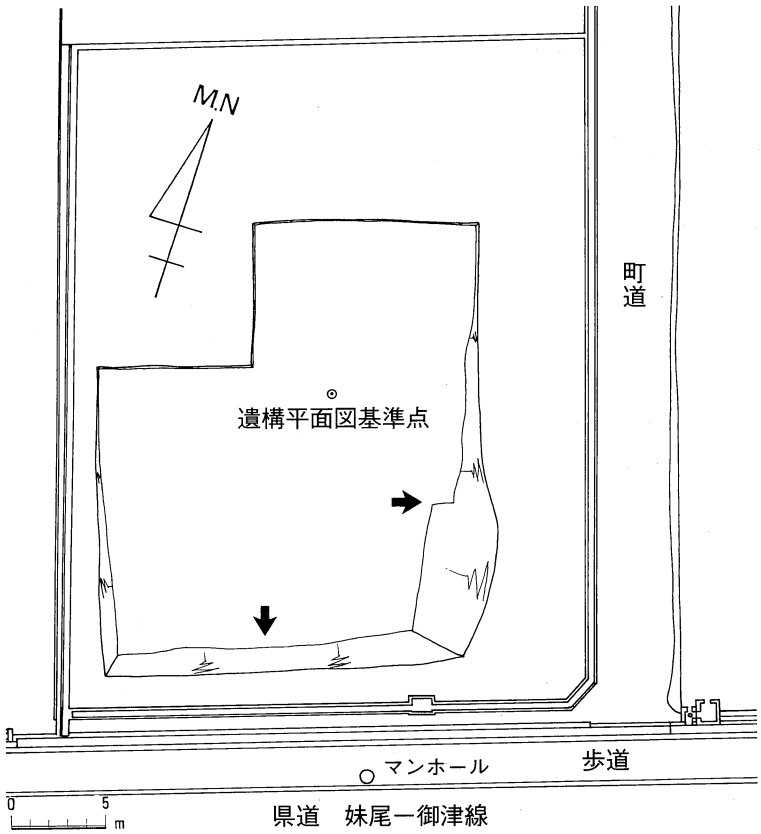


図4　調査地周辺平面図（矢印は土層断面観察方向）

Ⅲ 調査成果

1 はじめに

備前原遺跡は御津町大字宇垣に位置する縄文時代からの複合遺跡で、1958年に鎌木義昌、江坂進の両氏によって紹介された。採集遺物ではあるが、縄文時代晩期中葉に位置付けられる『原下層式』土器が報告されている。

その後、本格的な調査がなされることもなく、県立金川高等学校地歴部による採集遺物が町教委に保管されている程度であった。1980年頃から、宇垣地区で県営圃場整備事業が計画され、それに伴い、82年度に県教委によって備前原遺跡の範囲確認調査が実施された。その結果に基づき、保存協議がなされたが、なお削平される部分について90～92年度に町教委によって発掘調査が実施された。種々の成果が得られたが、縄文時代晩期の遺物については顕著なものはなく、岡山市域で晩期の遺跡の調査が進んだこともあって、『原下層式』土器もいわば過去の形式となっていった。

今回の調査は建築計画の関係から、時間的に余裕の少ないものであった。調査着手時には、用地は盛土用のコンクリート擁壁に囲まれていた。掘削土の排土もままならず、やむを得ず、第１遺構面で地山面に達した調査区北半の突出部を排土置場とした。

調査は遺構面を確認するごとに上面から第１遺構面、第２遺構面…とし、第９遺構面まで確認した。また、それぞれの遺構面の覆土を第１層、第２層…とし、第９層までが遺物包含層で、以下の土層には遺物は含まれていなかった。そのため、掘削を終了し、第９層、第９遺構面を最終とした。

第１層は調査地全面に堆積していたが、第２層より下層は調査地南半にのみ堆積していた。

2 第１層

第１層からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、サヌカイト片約120g、焼土塊、鉄滓と多様な遺物が整理箱半箱分ほど出土したが、小片が多く、図示出来るものは少ない。

１～20は弥生時代後期後葉から古墳時代前期の壺、甕の口縁部である。１の端部は上方に摘み上げられている。２の外面には２条の凹線状のものを施す。下方は剝離している。５の焼成はやや軟質である。７は二重口縁の口縁部下半である。21は精良な胎土の椀である。22は土師器の小型壺である。23は土師器の広口壺である。24～27は壺、甕の底部である。26の内面は剝離している。28～35は高杯である。29～31の脚部は差込み技法である。35の器壁は比較的薄く、内外面とも成形時の圧痕が残存している。7・11・19・21・24・34の外面には赤色粘土による丹塗り

を施す。6・12の外面には煤が付着している。36は黒色土器A類の椀底部である。高台は断面三角形でしっかりしている。S1はサヌカイト製の打製石鏃未成品である。自然面が残存している。S2はサヌカイトの剝片である。

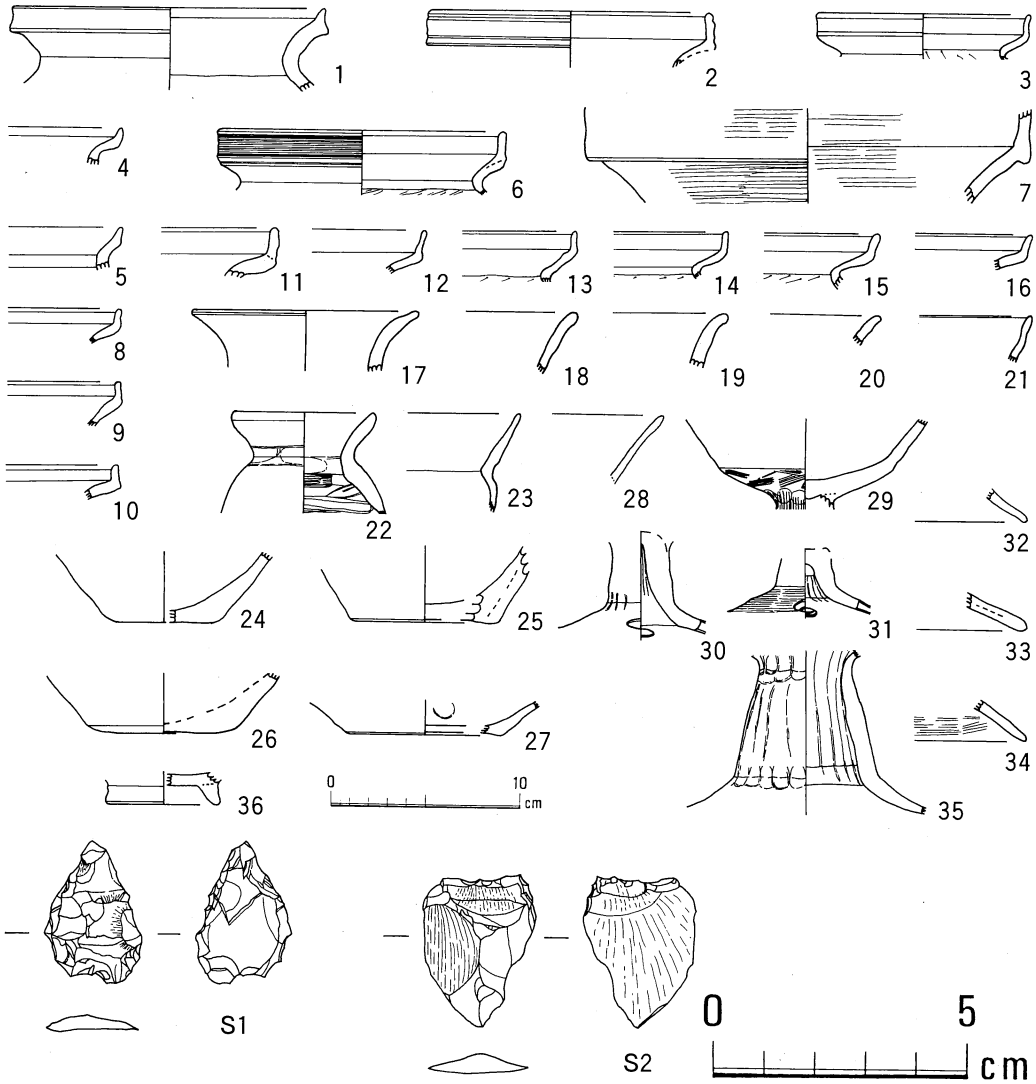
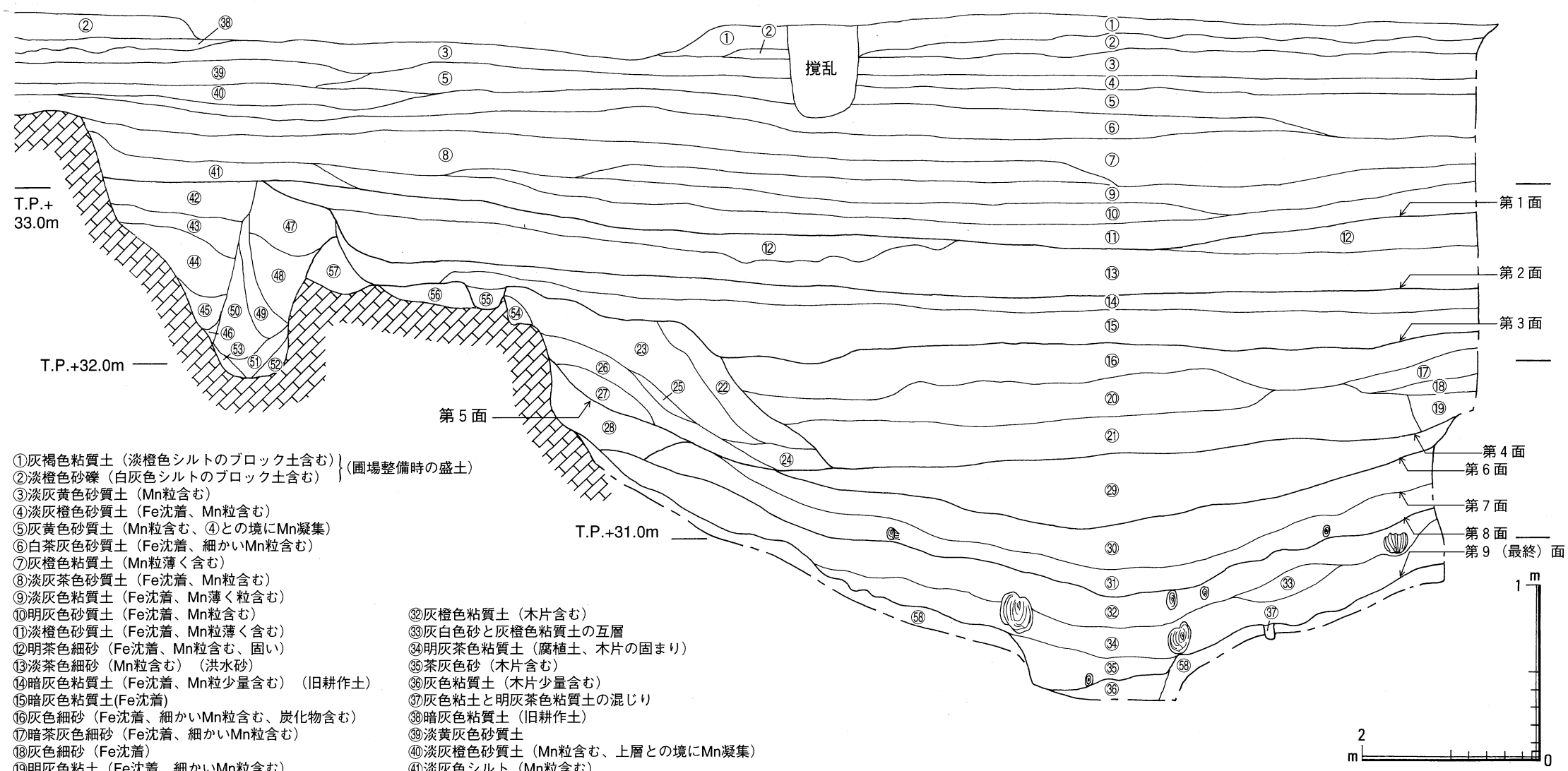


図5　第1層出土遺物実測図

3　第1遺構面

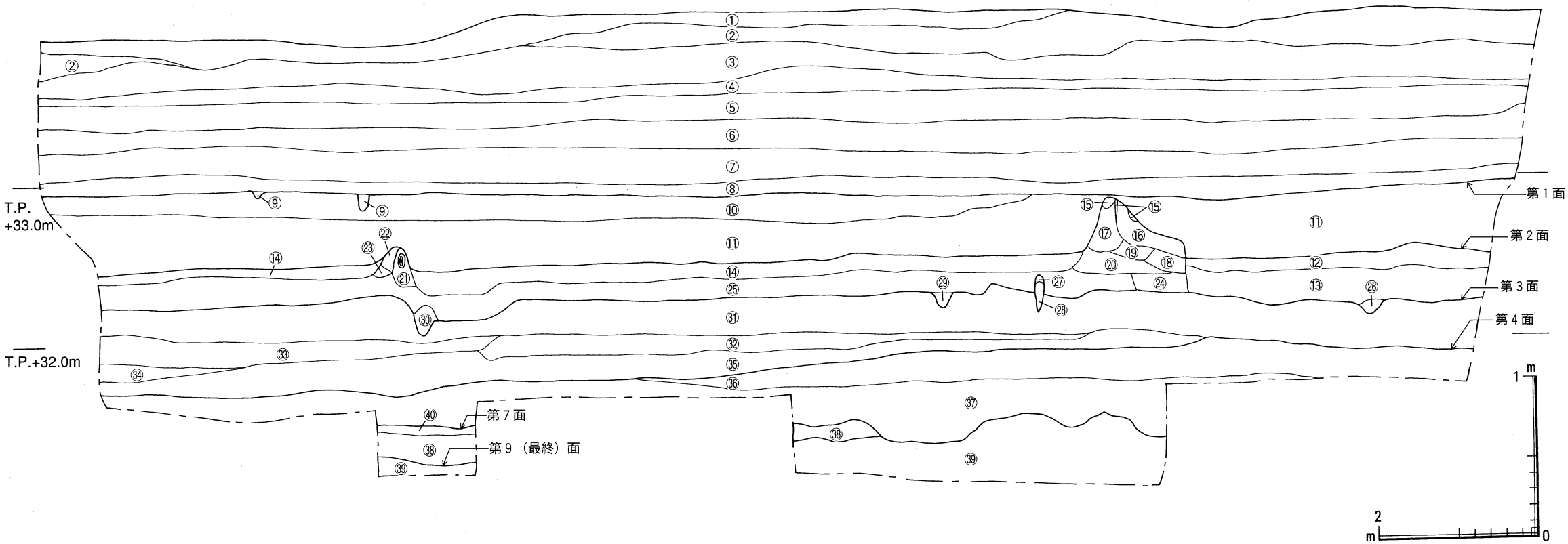
第1遺構面は調査地全面で検出した。北側の突出部は地山面で南へ傾斜が著しく、南側はほぼ平坦である。検出面のレベルは32.9～33.6mである。

遺構は全面で土壙を検出した。遺物の出土したものは少なく、出土遺物も細片で図示出来るものは無い。



①灰褐色粘質土（淡橙色シルトのブロック土含む）
②淡橙色砂礫（白灰色シルトのブロック土含む）
（圃場整備時の盛土）
③淡灰黄色砂質土（Mn粒含む）
④淡灰橙色砂質土（Fe沈着、Mn粒含む）
⑤灰黄色砂質土（Mn粒含む、④との境にMn凝集）
⑥白茶灰色砂質土（Fe沈着、細かいMn粒含む）
⑦灰橙色粘質土（Mn粒薄く含む）
⑧淡灰茶色砂質土（Fe沈着、Mn粒含む）
⑨淡灰色粘質土（Fe沈着、Mn薄く粒含む）
⑩明灰色砂質土（Fe沈着、Mn粒含む）
⑪淡橙色砂質土（Fe沈着、Mn粒薄く含む）
⑫明茶色細砂（Fe沈着、Mn粒含む、固い）
⑬淡茶色細砂（Mn粒含む）（洪水砂）
⑭暗灰色粘質土（Fe沈着、Mn粒少量含む）（旧耕作土）
⑮暗灰色粘質土(Fe沈着)
⑯灰色細砂（Fe沈着、細かいMn粒含む、炭化物含む）
⑰暗茶灰色細砂（Fe沈着、細かいMn粒含む）
⑱灰色細砂（Fe沈着）
⑲明灰色粘土（Fe沈着、細かいMn粒含む）
⑳淡茶灰色粘土（Fe沈着）
㉑暗青灰色粘土
㉒淡黄橙色砂質土（Fe沈着）
㉓灰茶色細砂（Fe沈着）
㉔暗青灰色シルト
㉕明灰色細砂（Fe沈着）
㉖暗青灰色粘質土（Fe沈着、炭化物含む）
㉗明灰色シルト（Fe沈着）
㉘淡白青灰色粘土（Fe沈着）
㉙暗緑灰色細砂
㉚明茶褐色粘質土（木片少量含む）
㉛淡白灰緑色粘質土（木片少量含む）
㉜灰橙色粘質土（木片含む）
㉝灰白色砂と灰橙色粘質土の互層
㉞明灰茶色粘質土（腐植土、木片の固まり）
㉟茶灰色砂（木片含む）
㊱灰色粘質土（木片少量含む）
㊲灰色粘土と明灰茶色粘質土の混じり
㊳暗灰色粘質土（旧耕作土）
㊴淡黄灰色砂質土
㊵淡灰橙色砂質土（Mn粒含む、上層との境にMn凝集）
㊶淡灰色シルト（Mn粒含む）
㊷灰色粘質土（Fe沈着）
㊸淡灰色粘質土（Fe沈着）
㊹暗灰色シルト（Fe沈着）
㊺暗灰色粘質土
㊻黄白色シルト
㊼明灰茶色粘質土（Mn粒含む）
㊽淡灰茶色粘質土
㊾橙灰色粘質土（細かいMn粒少量含む）
㊿淡茶灰色粘質土（Fe沈着）
51白灰色シルト（Fe沈着）
52暗灰色粘質土（淡黄色粘質土（Fe沈着）の径２～４cmのブロック土含む）
53黄茶色細砂
（SD01の埋土）
54灰色シルト（Fe沈着、淡黄橙色砂質土（Fe沈着）の径2～5cmのブロック土含む）
55淡黄橙色砂質土（Fe沈着、Mn粒含む）と淡灰色粘質土（Fe沈着）の混じり（SD02の埋土）
56明黄色砂質土（Mn粒含む）
57明黄色砂質土（56より大きいMn粒含む）
58淡青灰色シルト（地山？）

図６　調査地東壁土層断面図



①灰褐色粘質土（淡橙色シルトのブロック土含む）
②淡橙色砂礫（白灰色シルトのブロック土含む）
}（圃場整備時の盛土）
③淡灰黄色砂質土（Mn粒含む）
④淡灰橙色砂質土（Fe沈着、Mn粒含む、下層との境にMn凝集）
⑤灰黄色砂質土（Mn粒含む）
⑥灰橙色粘質土（Mn粒薄く含む）
⑦淡灰色粘質土（Fe沈着、Mn粒薄く含む）
⑧淡橙色砂質土（Fe沈着、Mn粒薄く含む）
⑨淡灰色シルト
⑩明茶色細砂（Fe沈着、Mn粒含む、固い）
⑪淡茶色細砂（Mn粒含む）（洪水砂）
⑫茶灰色粘質土（Mn粒含む）
⑬茶灰色シルト（Fe沈着、Mn粒少量含む）
⑭暗灰色粘質土（Fe沈着、Mn粒少量含む）（旧耕作土）
⑮淡灰色細砂
⑯明茶黄色シルト（Mn粒多く含む、固い）
⑰灰茶色シルト（灰色粘質土のブロック土含む、Mn粒含む）
⑱灰色粘質土（Mn粒少量含む）
⑲灰色シルト（Fe沈着、Mn粒多く含む）
⑳灰茶色シルト（Fe沈着、Mn粒含む）
㉑暗灰色粘質土（Fe沈着）
㉒明茶黄色粘質土（Mn粒含む）
㉓明茶黄色粘質土（Mn粒含む、炭化物含む）
㉔明灰色シルト（Fe沈着）
㉕暗灰色粘質土（Fe沈着）
㉖淡灰色シルト
㉗灰色粘土
㉘暗茶色砂質土（Fe沈着、炭化物含む）
㉙暗灰色粘質土
㉚暗灰色粘土（Fe沈着）
㉛灰色細砂（Fe沈着、細かいMn粒含む、炭化物含む）
㉜淡灰色粘質土（細かいMn粒含む）
㉝暗茶灰色細砂（Fe沈着、細かいMn粒含む）
㉞灰色細砂（Fe沈着）
㉟明灰色粘土（Fe沈着、細かいMn粒含む）
㊱白灰色シルト（Fe沈着）
㊲淡白緑灰色シルト（Fe沈着）
㊳淡白緑灰色粘質土（木片含む）
㊴暗青灰色シルト
㊵淡青灰色粘土（炭化物粒含む）

図７　調査地南壁土層断面図

SK01は突出部で検出した。長径1.0m、短径0.8m、深さ7㎝、平面ほぼ円形である。弥生時代後期の土器細片２点、古墳時代前期初めの丹塗り小型壺片１点が出土した。

SK02は調査地東辺でその一部を検出した。径1.2m、深さ0.25m、平面円形になると思われる。弥生土器か土師器の細片４点が出土した。

SK03は調査地中央西寄りで検出した。長径0.8m、短径0.7m、深さ0.2m、平面台形である。弥生土器の細片４点が出土した。

SP01は調査地東辺中央で検出した。長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1m、平面楕円形である。弥生土器の細片２点が出土した。

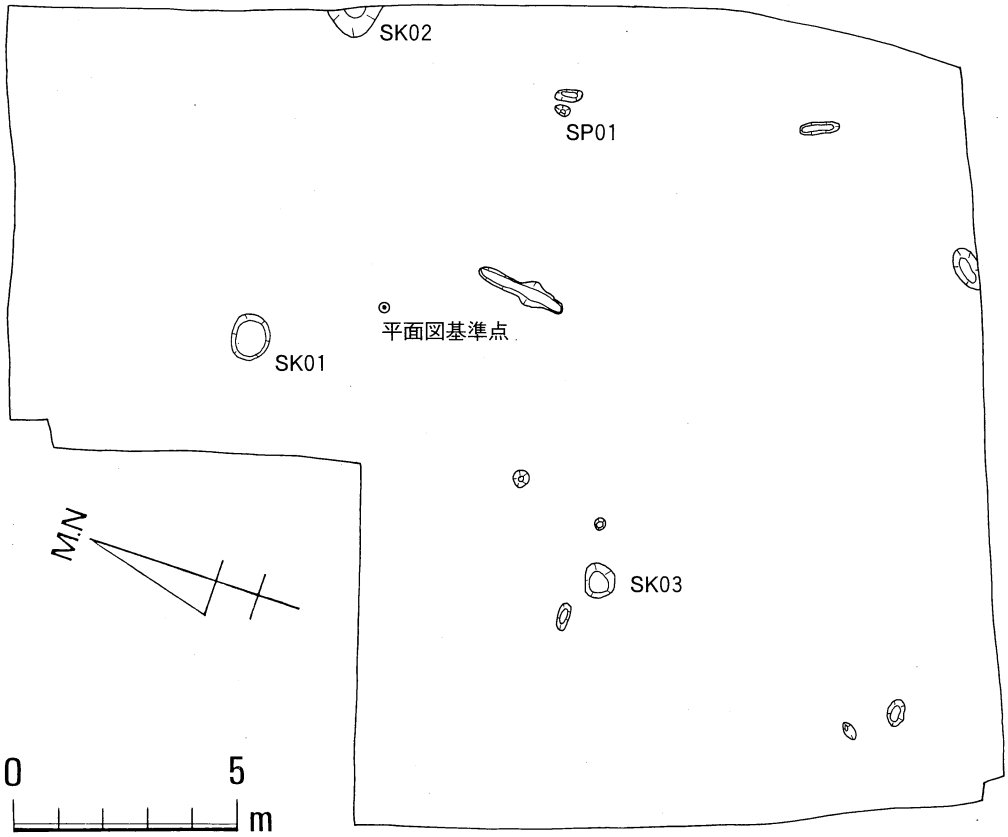


図８　第１遺構面平面図

４　第２層

第２層は調査地南半に0.2～0.4mの厚さで堆積した細砂層である。一部にその上面に厚さ0.1m程度の粘質土層が見られた。第２層を掘削したことで、調査地中央で東西方向の段差が生じた。

上層の粘質土層からは弥生土器、土師器、サヌカイト片２点が出土したが、小片が多い。図

9は同層より出土したものである。下層の細砂層からは弥生土器、土師器、サヌカイト片約50ｇが出土したが、出土量も少なく、小片で磨滅したものが多い。図10は同層より出土したものである。

37～47は弥生時代後期後葉から古墳時代前期の壺、甕の口縁部である。37は二重口縁壺である。45は二重口縁壺の頸部である。46の成形は粗く、端部は波打っている。48･49は椀である。50の外面には右上がりのたたきを施す。内面には成形時の撫で上げ痕が残存している。２次焼成を受けている。51は小さな平底をもつ底部である。52･53は高杯である。脚部は差込み技法である。

54～60は弥生時代後期の壺、甕の口縁部である。54の端面には２条の凹線を施す。56は成形が粗いため、端部が波打っている。58は直口壺である。外面に２条の凹線が見られる。61はほぼ完形の甕である。胴部最大径は上方にあり、肩が張っている。62～66は弥生土器の底部である。63の外面には黒斑が見られる。66の底外面は黒色を呈する。67は直口壺の口縁部であろう。68～71は高杯である。69の脚部は差込み技法である。72は台付椀の底部である。台部は摘み出して形成され、成形痕が残存している。37･45･52･53･57･63･70～72の外面には赤色粘土による丹塗りを施す。48･49にもわずかに伺える。38･39･46･61の外面、65の内面には炭化物が付着している。S3･4はサヌカイトの剝片である。S3は全体に風化が著しく、乳白色を呈する。S4も風化が進んでいる。S5は花崗岩製の偏平な長円形の敲石である。上下端に打撃痕が見られ、全体に磨滅している。自然石の可能性もある。S6は花崗岩製の球状の敲石である。上下端と周囲３

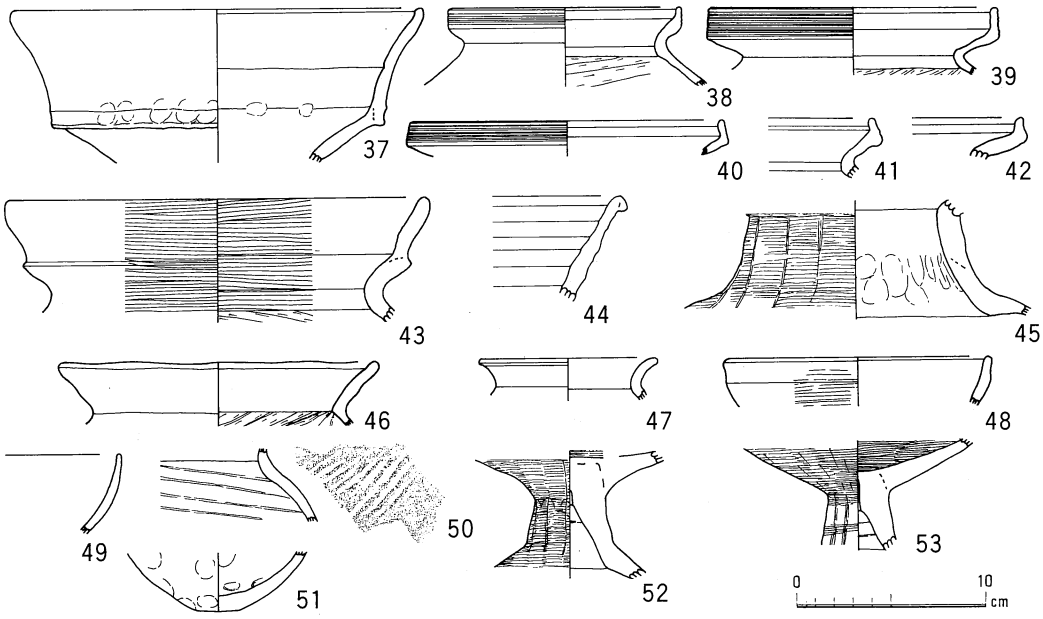


図９　第２層出土遺物実測図（１）

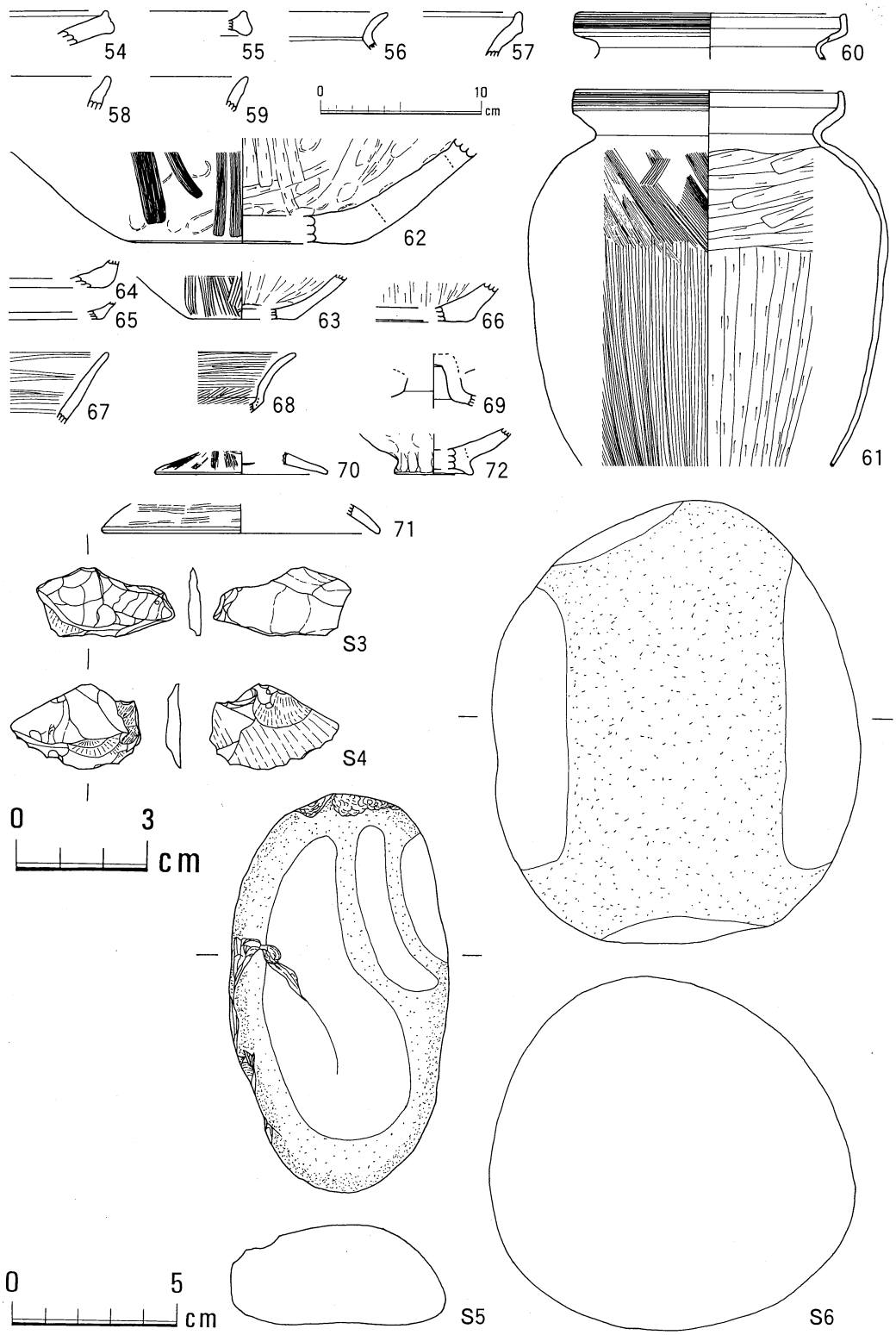


図10　第2層出土遺物実測図（2）

ヶ所が磨滅している。

第２層下層であるが、均質な細砂が0.4mもの厚さで均等に堆積している。また、出土遺物も少なく、磨滅している。これらのことから、この細砂は洪水によってもたらされたものと想定される。

5　第２遺構面

第２遺構面は第２層とした細砂層を除いた面である。

北半の高位部から派生し、ほぼ南方向へ平行して延びる２条の土堤を検出した。土堤間は平坦である。東側の区画のレベルは32.50m、中央は32.48m、西側は32.40mと西へ漸次下がっている。土堤は第２遺構面よりさらに0.1~0.3m下の面、後述する第３遺構面から粘質土、シルトを積み重ねて形成されている。土堤間に厚さ0.1~0.3mのマンガン粒を少量含み、鉄分が沈着した粘質土が均等に堆積している状況が見られた。これらより、第２遺構面は水田面であり、土堤は畦畔であると考えられる。そこで、西側の土堤を畦畔１、東側のものを畦畔２とした。

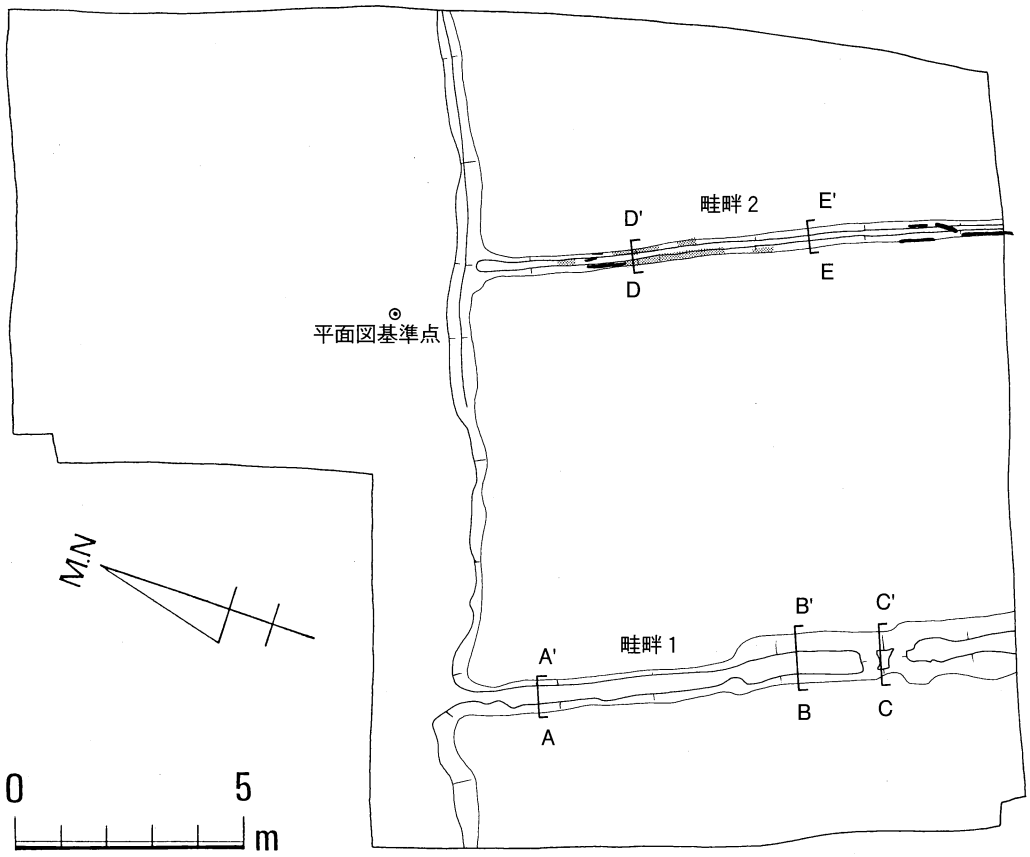


図11　第２遺構面平面図

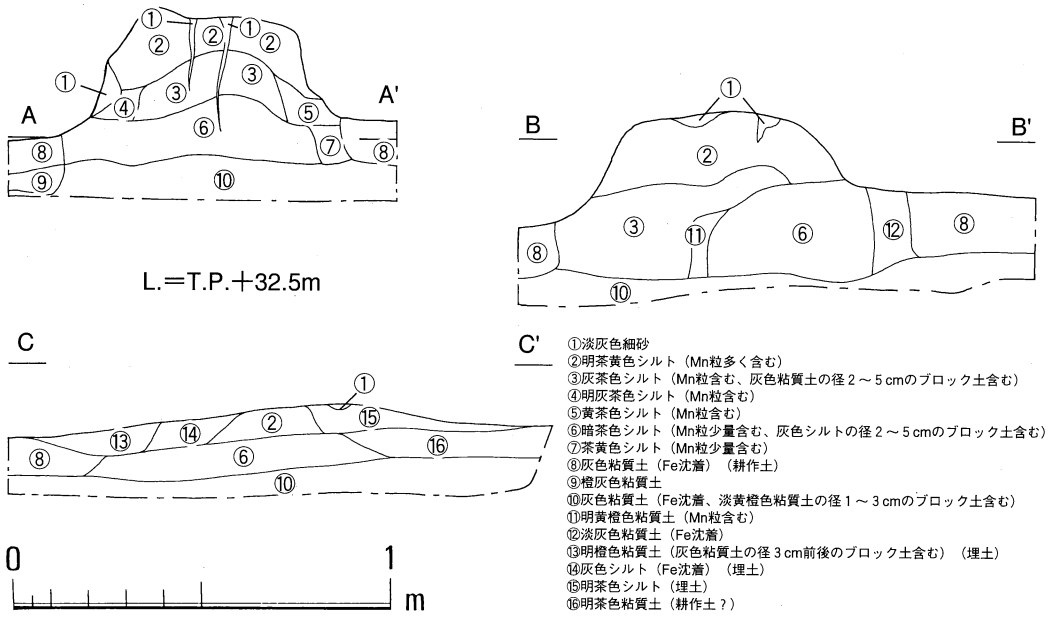


図12　畦畔１土層断面図

畦畔１は断面台形で、検出範囲北側では基底部で幅0.75m、南側では幅0.80mである。高さは中央水田面基準で、北側では0.3m、南側では0.2mである。また、調査地南壁から3m付近は長さ約1mにわたって低くなり、最低で高さ0.1mである。

畦畔１からは縄文土器、弥生土器、土師器、サヌカイト片が出土したが、小片で磨滅しているものが多く、図示出来るものは少ない。

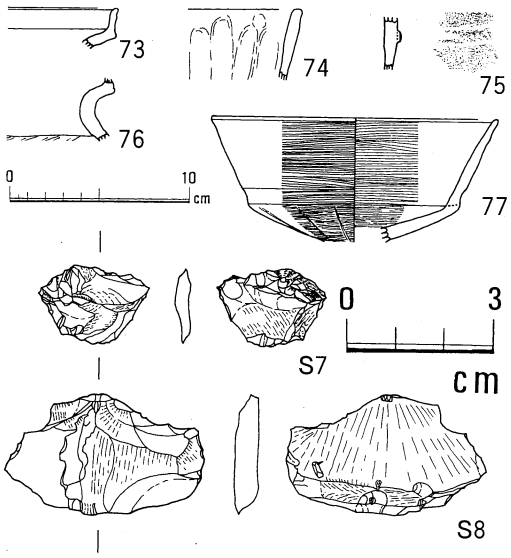


図13　畦畔１出土遺物実測図

73は甕の口縁部である。74は直口壺の口縁部である。胎土は精良である。75は断面台形の貼付け突帯をもつ胴部である。磨滅しているが、突帯には刻目を施す。縄文時代晩期の深鉢であろうか。76は頸部である。端面に１条の凹線が残存している。77は高杯の杯部である。赤色粘土による丹塗りを施す。S7はサヌカイト製の楔形石器である。S8はサヌカイトの剝片である。

畦畔２は断面半円形で、基底部で幅0.3～0.5m、高さは約0.1mである。畦畔の側面に畦畔と平行して径0.1m程度の木材を埋め込んでいる状況を検出した（図11畦畔２黒色部）。また木材が腐植したものであろう淡青灰色シルトを0.03

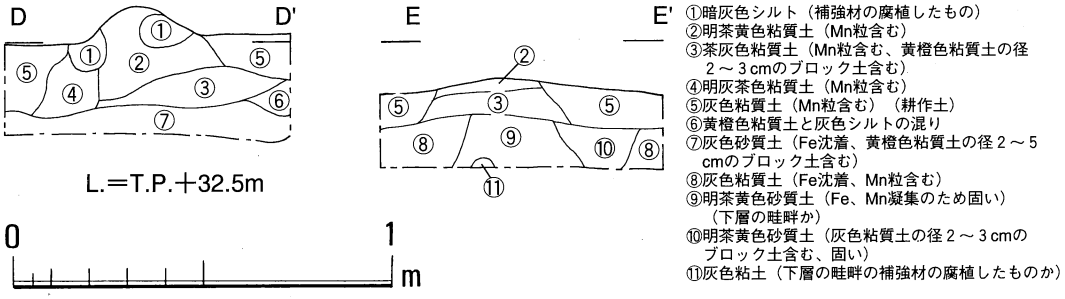


図14　畦畔2土層断面図

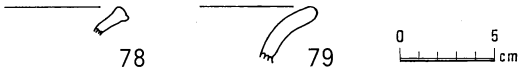


図15　畦畔2出土遺物実測図

～0.1m幅で検出した（図11畦畔2網点部）。畦畔の補強、土止めのためのものであろう。

畦畔2からは少量の弥生土器、サヌカイト片が出土した。

78は甕の、79は壺の口縁部である。

水田への導水は、東から畦畔2を越流し、畦畔1の低位部を抜けて西へ流れたと考えられる。

6　第3層

第3層は第2遺構面で検出した水田の耕作土層である。厚さ0.1～0.3mの粘質土層である。

縄文土器、弥生土器、土師器、サヌカイト片約50g等が出土したが、出土量も少なく、小片が多く、図示出来るものは少ない。

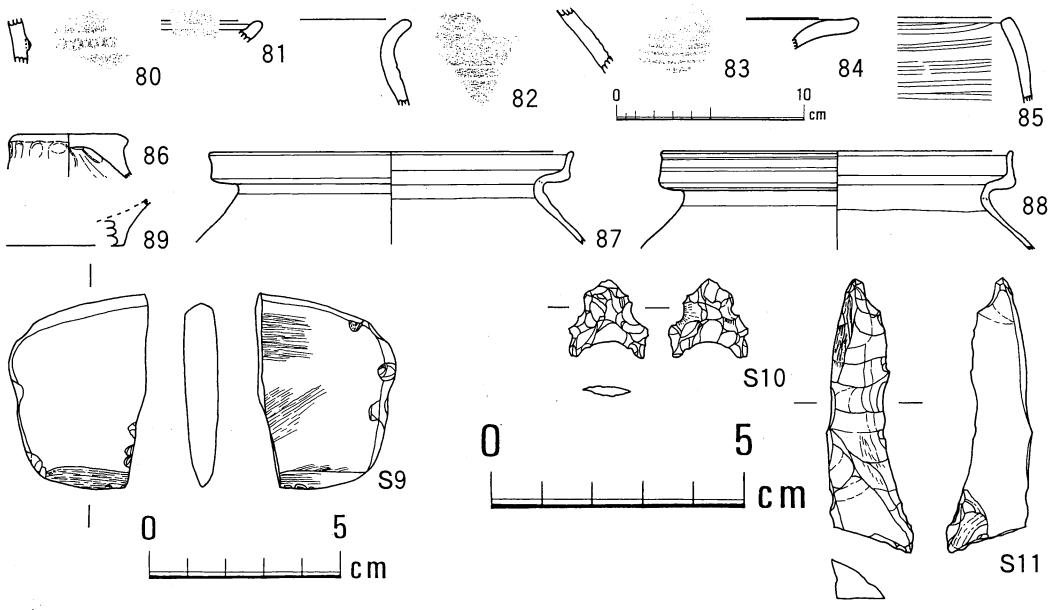


図16　第3層出土遺物実測図

80は断面三角形の貼付け突帯をもつ胴部である。突帯には刻目を施す。縄文時代晩期の深鉢であろうか。81は内面に１条の凹線をもつ口縁部である。82は口唇部に不明瞭なから刻目、胴部に２条の沈線を施す。83は４条の沈線が残存している。85は縄文時代晩期の鉢である。端部は面を成す。86は蓋である。内外面に成形時の圧痕が残存している。87･88は甕口縁部である。88の口縁部外面には２条の沈線様のものが見られる。89は底部である。内面は剝離している。S9は砂岩製の磨製石包丁である。S10はサヌカイト製の打製石鏃である。S11はサヌカイトの剝片である。これらの他に、径5㎝の球状の焼土塊も出土した。

7　第３遺構面

第３遺構面は第３層とした水田耕作土層を除いた面である。検出面のレベルは32.0～32.2mでほぼ平坦である。第１遺構面で検出した地山面から今回の検出面へ向かって、幅1m前後の段を挟んで、緩やかに傾斜している。

傾斜面で２条の溝を検出した。

SD01は調査地を東西に横断して検出した。検出範囲では幅1.4～2.0m、深さ0.8mである。底

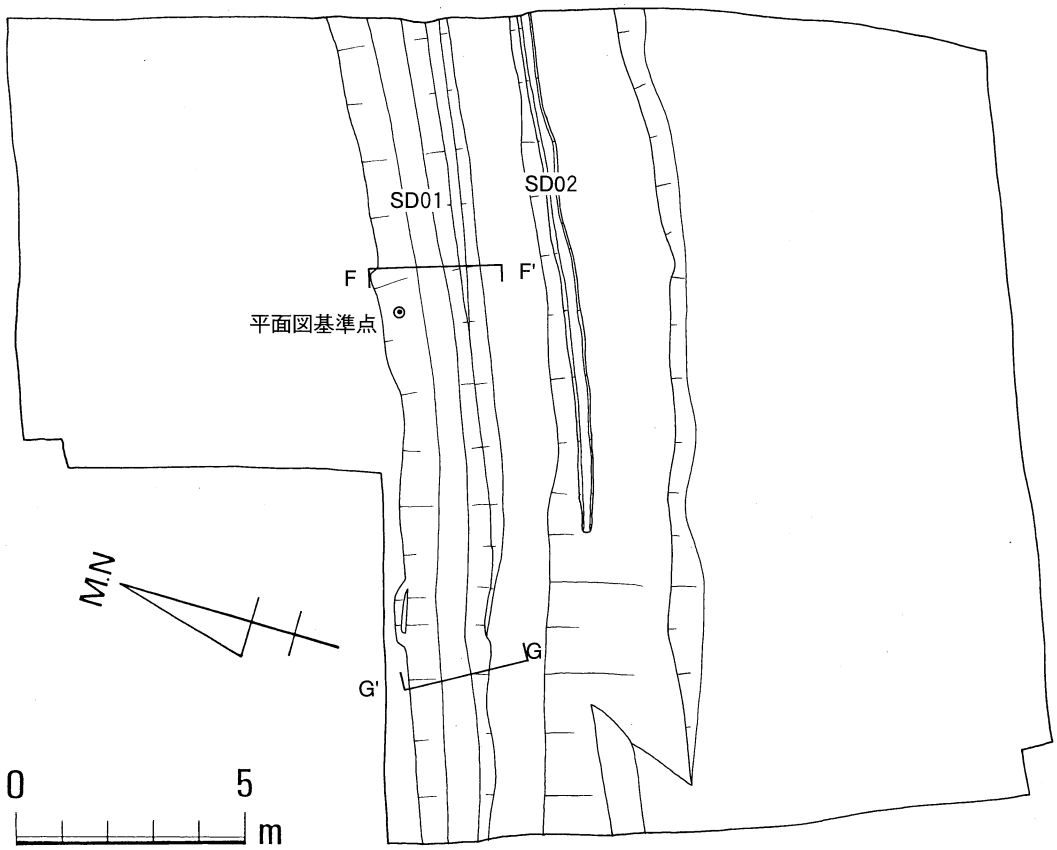
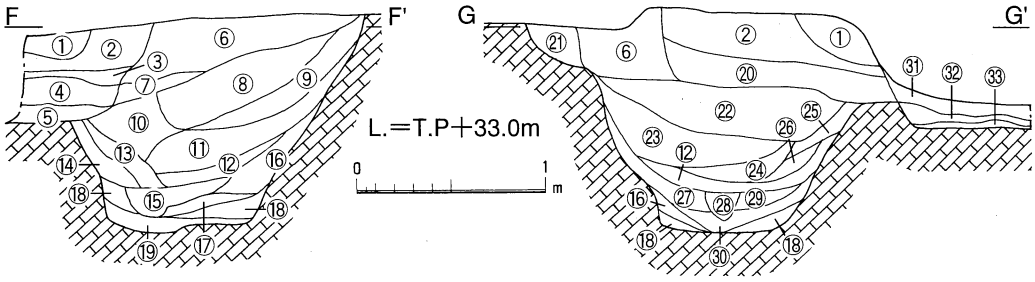


図17　第３遺構面平面図



①黄茶色シルト（Mn粒含む、黄橙色粘質土のブロック土含む）
②茶色シルト（Mn粒含む）
③灰茶色粘質土（Mn粒含む）
④茶灰色粘質土（Mn粒含む）
⑤暗灰色粘質土
⑥黄灰色シルト（Mn粒含む）
⑦黄灰色粘質土（Mn粒含む、淡黄色粘質土のブロック土含む）
⑧黄灰色シルト（Mn粒含む、淡茶黄色粘質土のブロック土含む）
⑨淡茶灰色粘質土
⑩淡茶灰色粘質土（Mn粒含む、淡茶黄色粘質土のブロック土含む）
⑪淡茶灰色粘質土（淡茶黄色粘質土のブロック土⑩より多く含む）
⑫灰色粘土（白黄色粘土のブロック土含む）
⑬茶灰色粘質土
⑭淡茶灰色粘質土
⑮白黄色粘土（Fe沈着）
⑯淡黄色粘質土（茶褐色粘土のブロック土含む）
⑰淡灰色粘土（淡茶灰色粘質土のブロック土含む）
⑱淡灰色粘質土（Fe沈着）
⑲暗灰色粘土
⑳黄茶色シルト（Mn粒含む）
㉑淡灰橙色シルト（Mn粒含む）
㉒黄茶色粘質土（Mn粒含む）
㉓淡茶灰色粘質土（淡茶黄色粘質土のブロック土含む）
㉔淡茶灰色粘質土
㉕黄茶色粘質土（黄橙色粘質土のブロック土含む）
㉖黄橙色粘質土
㉗白灰色シルト
㉘灰色粘質土（暗橙色粘質土のブロック土含む）
㉙橙色粘質土（灰色シルトのブロック土含む）
㉚淡橙色シルト
㉛灰色シルト（Fe沈着、Mn粒含む）
㉜灰色粘質土（淡橙色粘質土のブロック土含む）
㉝淡橙色粘質土

①～④・⑥に灰色シルトの草根状貫入

③～④畦畔１の盛土
⑧～⑲・㉒～㉚SD01の埋土
㉛～㉝畦畔２の盛土

図 18　SD01 土層断面図

面はわずかに東へ傾斜している。南岸の一部は提状に盛り上がっている。土層断面観察より、埋没後、掘削し直されている状況が伺える。埋土の土質はシルト～粘質土であることから、流勢は穏やかであったのであろう。

縄文土器、弥生土器、サヌカイト片等が出土したが、出土量は少なく、磨滅している。

90・91は縄文時代晩期の土器である。90は深鉢で、断面半円形の貼付け突帯をもつ。口唇部と突帯に刻目を施す。91は浅鉢である。端部は摘み出され、肥大している。92～97は弥生土器である。93は壺の胴部である。２条の沈線を施した上方に、１条の浅い凹線を施す。段を意図したのであろうか。炭化物が付着している。94は甕の頸部直下である。３条の沈線を施す。外面の一部が橙色を呈する。彩色であろうか。S12はサヌカイト製の打製石包丁である。下辺には細部調整で刃を作り出している。抉り部は磨滅している。S13はサヌカイト製の刀子状の石器である。裏面のほぼ全面が磨滅している。S14はサヌカイトの剝片である。自然面が残存している。この他に、径5㎝程度の不定形の焼土塊１点、重さ479ｇのサヌカイトの石核が出土した。

SD01の最下層からは土器片３点、打製石錐１点、サヌカイト片２点が出土した。

S15はサヌカイト製の打製石錐である。風化が進み、淡灰色を呈する。S16はサヌカイトの剝片である。自然面が残存している。もう１点のサヌカイト片もかなり風化している。

SD02はSD01の南側約2mで並行して検出した。調査地中央から始まり、東へ延びる。底面は東へ傾斜している。検出範囲で幅約0.4m、深さ約0.15mである。埋土は砂質土と粘質土の混じったものである。

縄文土器、弥生土器、サヌカイト片等が出土した。

98～100は弥生時代前期のものである。98の端部はやや肥大し、面を成す。99の口唇部には刻目を施す。外面には煤状のものが付着している。100は２条の沈線が残存している。S17はサ

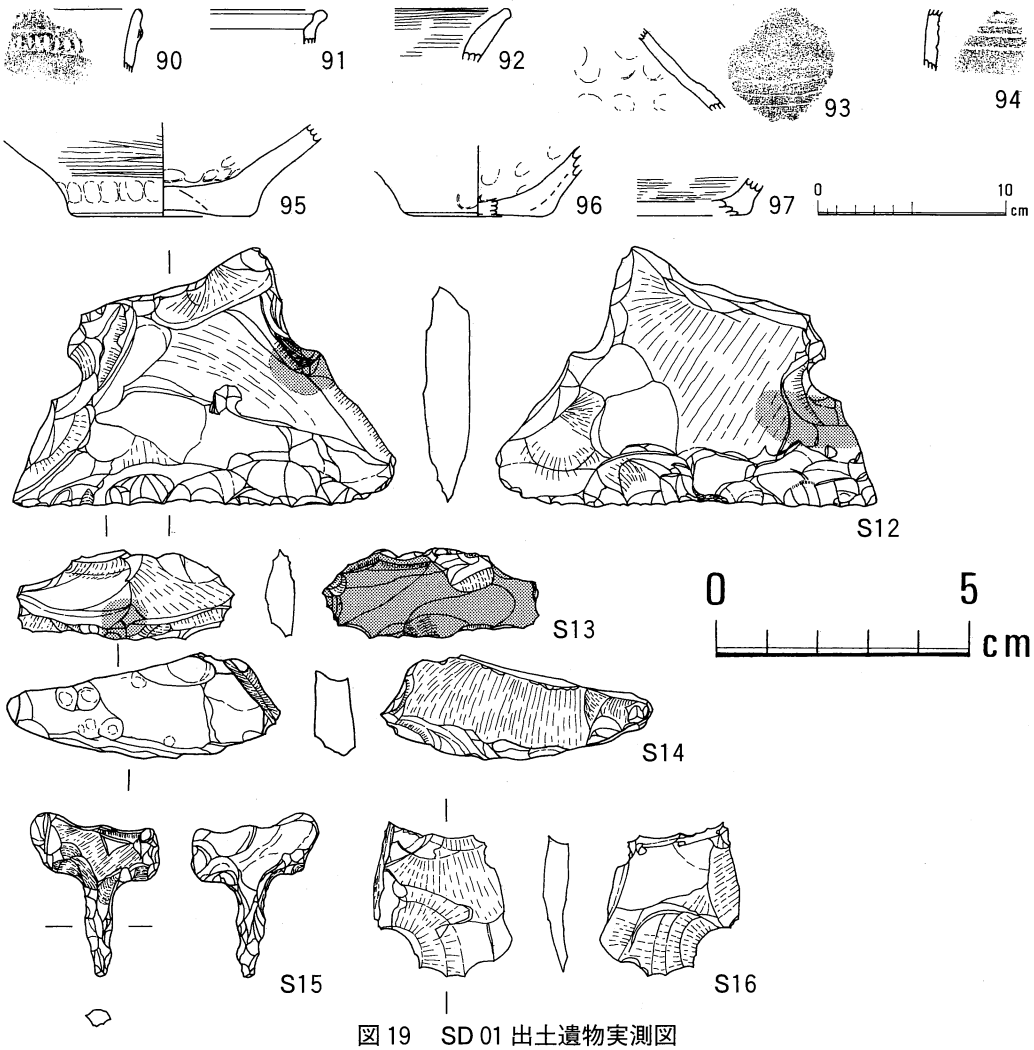


図 19　SD 01 出土遺物実測図

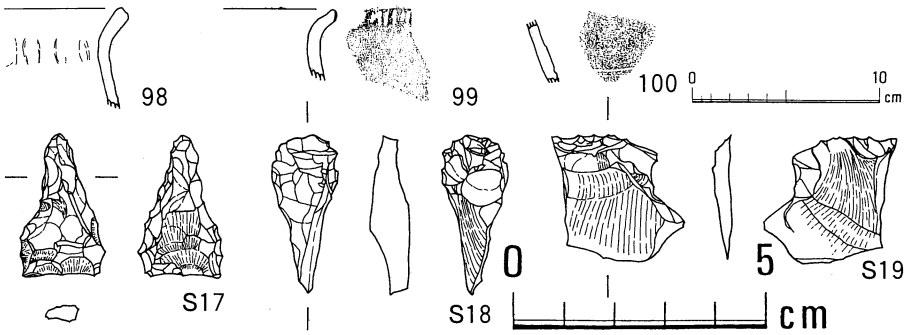


図 20　SD 02 出土遺物実測図

ヌカイト製の打製石鏃未製品である。S18・19はサヌカイトの剝片である。この他に径1㎝程度の球状の焼土塊１点が出土した。

8　第４層

第４層は第２遺構面で検出した水田の基盤層である。また、これ以降掘削することとなる旧河道の最終堆積でもある。調査地南側1/3程度で見られた。２層に分けられ、上層は厚さ0.1～0.2mの細砂層、下層は0.3～0.4mの粘土層である。

上層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約260g等が出土した。図21・22は同層より出土したものである。下層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約120g等が出土したが、小片で磨滅している。図23・24・25は同層より出土したものである。

101・102は縄文時代晩期の深鉢である。101の端部は面を成す。口唇部と断面三角形の貼付突帯に刻目を施す。102は断面台形の貼付突帯に不明瞭ながら刻目を施す。103～113は弥生土器の壺、甕の口縁部である。103は口唇部に刻目を施す。104は口唇部に刻目を、頸部に３条の沈線を施す。106は口唇部に刻目を、頸部に２条の沈線を施す。108の端部は押圧でやや肥大している。110の端部は拡張され面を成す。112の口唇部には浅い刻目を施す。114～121は施文のある胴部である。114は４条の沈線が残存している。115は頸部に不明瞭だが７条の沈線を施す。116は胴部上方に２条の沈線が残存している。117は断面台形の貼付突帯に刻目を施す。118は胴部上方に３条の沈線と２列の刺突文を施す。119は５条の沈線が残存している。120は扇状に下方へ開く７条の沈線が残存している。121は断面三角形の低い突帯を貼付ける。焼成はやや軟質である。122～124は縄文時代晩期の底部である。123の底面は上げ底である。124の底面もやや上げ底である。125～129は弥生土器の壺、甕の底部である。128の内面は剝離している。130は弥生土器の高杯脚端部である。矢羽状透かしを施すが、内側へ貫通していない。S20～22はサヌカイト製の打製石鏃である。S21は先端が欠損している。自然面が残存し、全体にやや磨滅している。S23はサヌカイト製の楔形石器である。下辺に刃の潰れが見られる。S24はサヌカイト製の刀子状の石器である。周囲に細部調整を施す。打製石槍か石鏃の未製品であろうか。S25～30はサヌカイトの剝片である。S31は花崗岩製の敲石である。ほぼ全面が磨滅し、下端に打撃痕が見られる。自然石の可能性もある。S32は砂岩製の偏平な石器である。上下面は磨滅している。砥石であろうか。この他に焼土塊115gが出土した。

131～145は弥生土器である。131～135は甕である。131は口唇部に刻目を、頸部に３条の沈線を施す。132・133は口唇部に刻目を施す。134の端部は拡張され、面を成す。外面に煤が付着している。136～141は施文のある胴部である。136～138はへらみがき調整の後、１～２条の沈線を施す。139はほぼ平行する縦方向の沈線を施す。縄文時代晩期の深鉢の頸部の可能性もあ

る。140は縦方向のへらみがき調整後、４条１単位の櫛状原体で上から波状文２段、直線文２段、波状文２段の櫛描沈線文を施す。直線文を後に施文する。外面に黒斑が見られ、内面には炭化物状のものが付着している。141はへらみがき調整後、多条沈線を施す。８条が残存している。142～145は底部である。S33はサヌカイト製の打製石鏃である。先端から1/4ほどは磨滅している。特に先端部は良く磨滅している。S34～39はサヌカイトの剝片である。S35･37･38は自然面が残存している。S40は花崗岩製の卵形の磨石である。周辺に打撃痕が見られ、上下面は磨滅している。S41は花崗岩製の敲石である。欠損しているが、先端に打撃痕が見られ、全面が磨滅している。S42は花崗岩製の敲石である。全体は長三角形で、断面は平行四辺形である。先端の欠損部は欠損後も使用されたため、良く磨滅している。S43は砂岩製の偏平な円形の石器である。石錘であろう。S44は流紋岩製の偏平な長円形の石器である。上面は磨滅している。磨石であろう。S45は砂岩製の偏平な三角形の磨石である。上下端に打撃痕が見られ、下面は特に磨滅している。S46は砂岩製の厚さ４cm程度の板状の石器である。上面は磨滅し、幅３～５mmの極浅い溝状の窪みが全面に残存している。砥石であろうか。

第４層は上層が細砂、下層が粘土で鉄分の沈着が見られることから、河道跡の湿地の様な状態で滞水していたところを、洪水砂が一気に覆った状況が伺える。

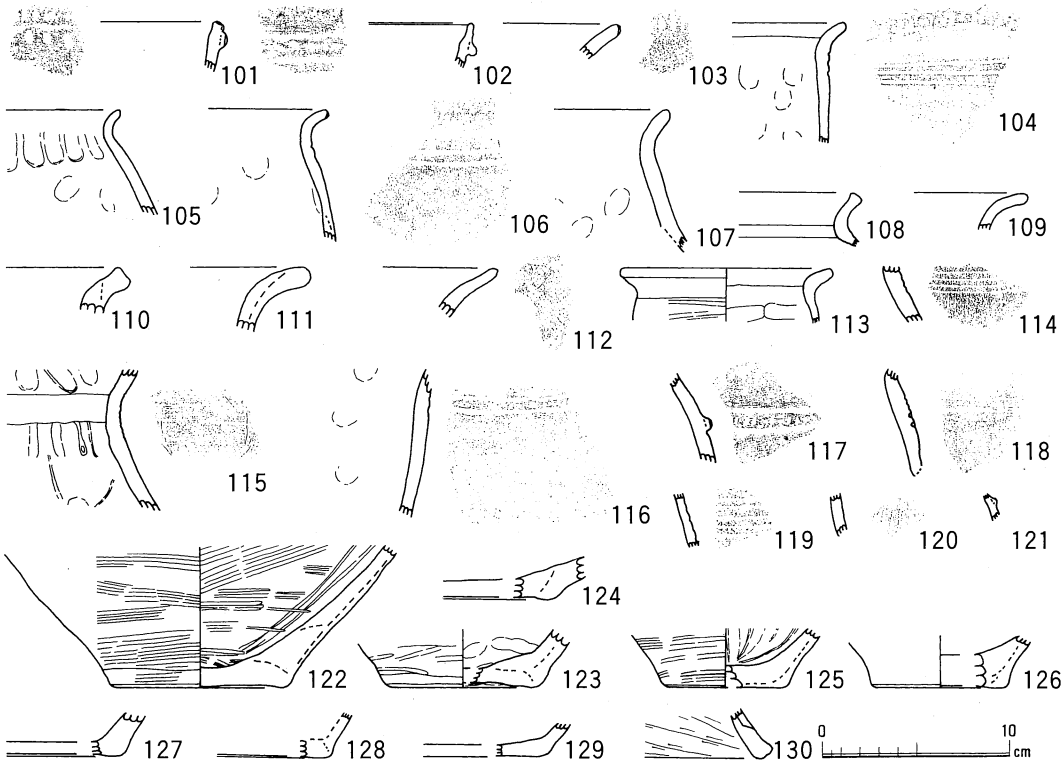


図21　第４層出土遺物実測図（１）

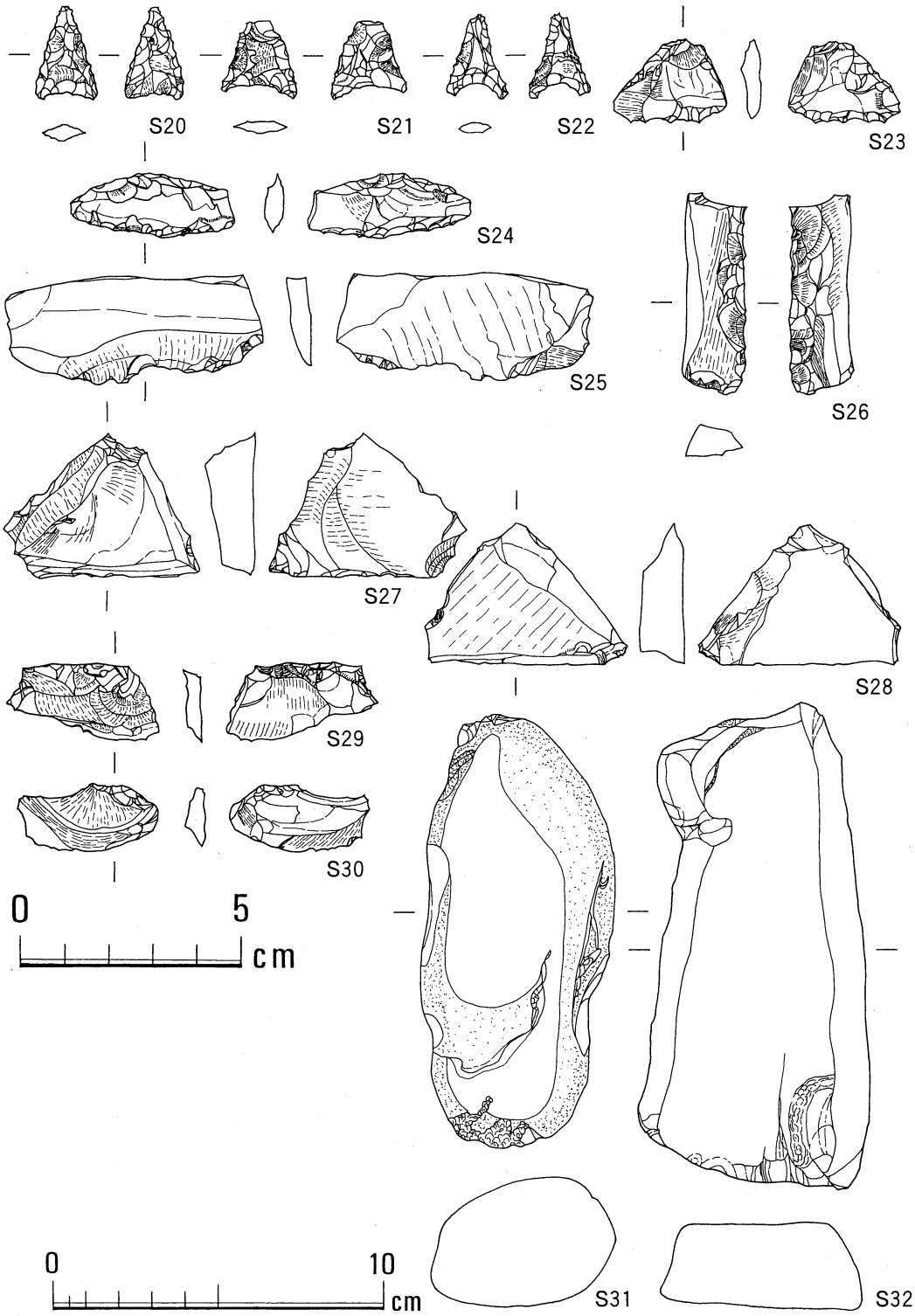


図22　第4層出土遺物実測図（2）

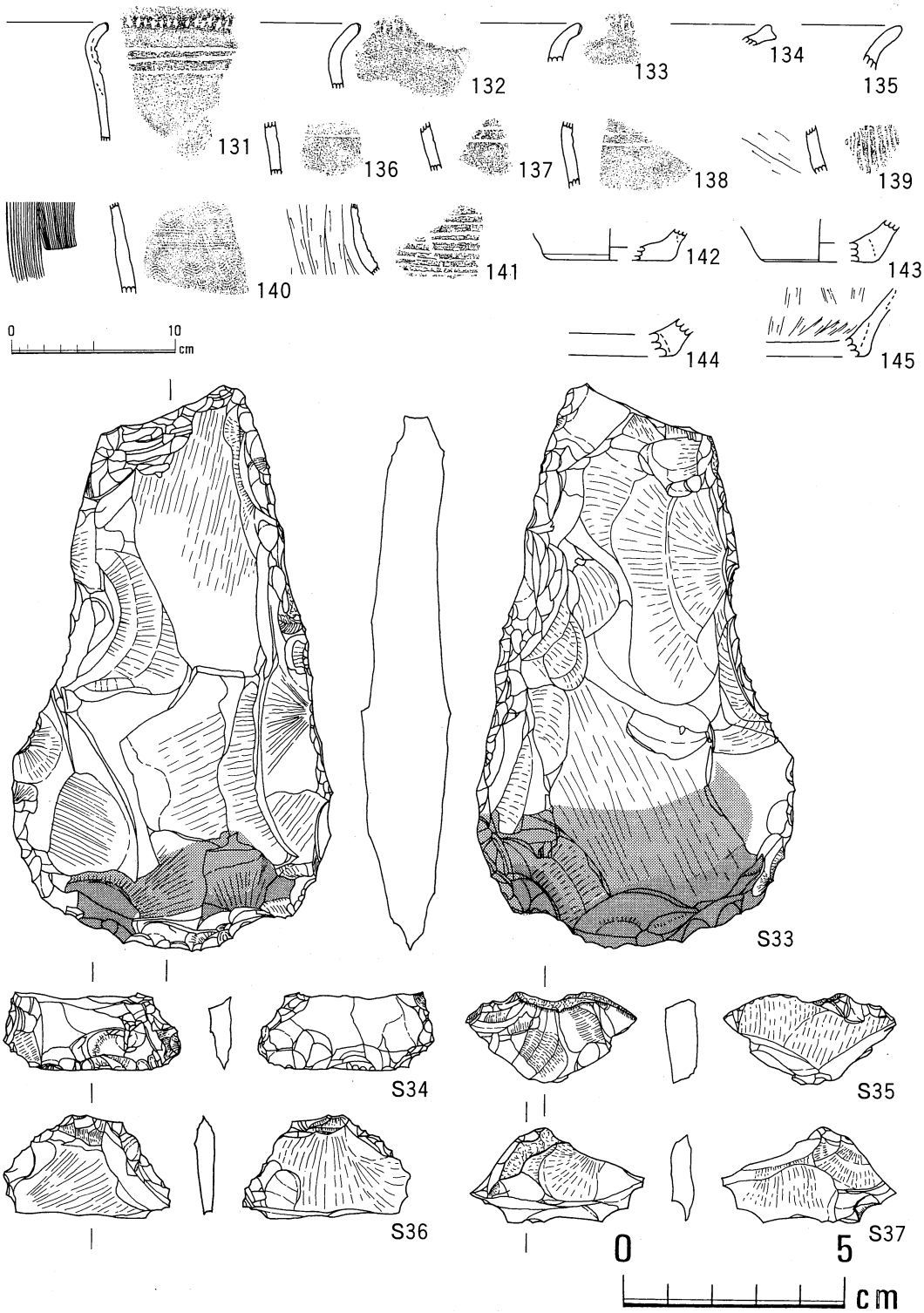


図23　第4層出土遺物実測図（3）

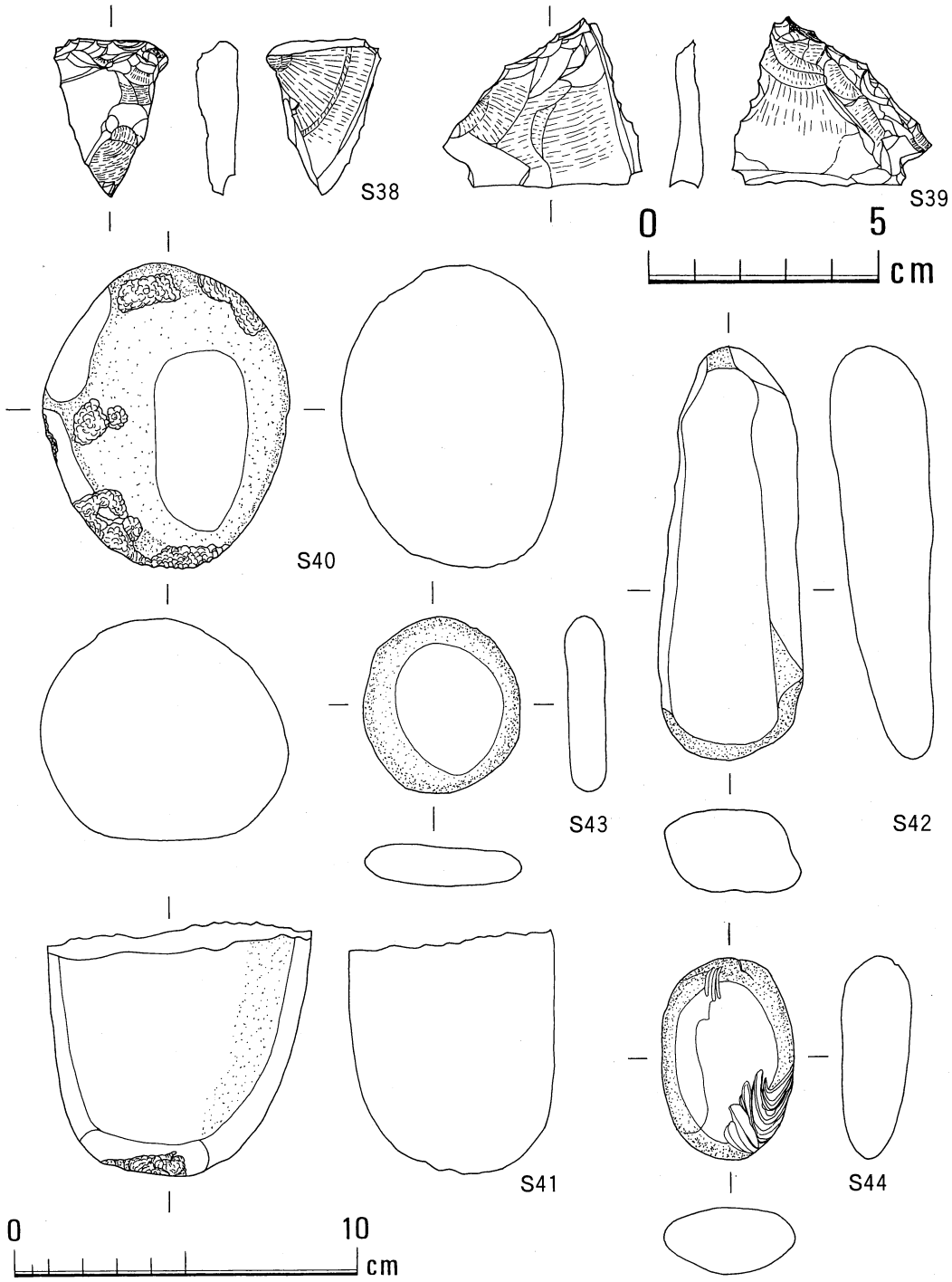


図24　第4層出土遺物実測図（4）

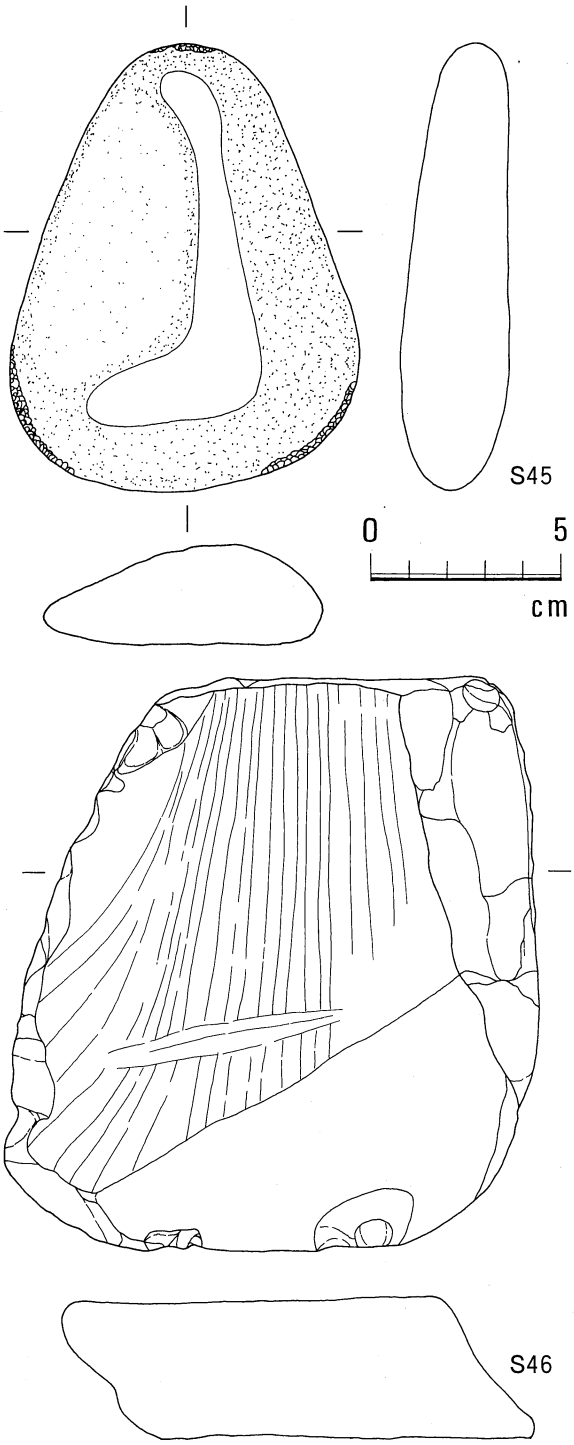


図25　第４層出土遺物実測図（５）

9　第４遺構面

第４遺構面は調査地南側1/3ほどで検出した。深さ約0.7mの旧河道とその北岸を検出した。検出面のレベルは岸上で32.1～32.2m、河底で31.4～31.9mである。河底は平坦であるが、西へわずかに傾斜している。

10　第５層

第５層は旧河道の北岸の堆積土である。河道に沿って幅1～3.5m、厚さは厚い所で約0.6mである。ほぼ中間で上層の細砂層と下層の粘質土層に分かれる。

上層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約100g等が出土した。土器の遺存状態は比較的良い。図27～29は同層から出土したものである。下層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約200g等が出土した。下層の土器も遺存状態は良い。サヌカイト片には風化の進んだものも見られた。図30～33は同層から出土したものである。遺物の遺存状態が良いことから、河道の北側に集落が存在したのであろう。

146～152は縄文時代晩期のものである。146は鉢で、内外面ともへらみがき調整を施す。147～150は深鉢で、刻目を施した突帯を貼付ける。147～149の突帯は断面三角形である。147は突帯直下から左下方へ沈線を施す。150の突帯は断面台形である。口唇部にも刻目を施す。

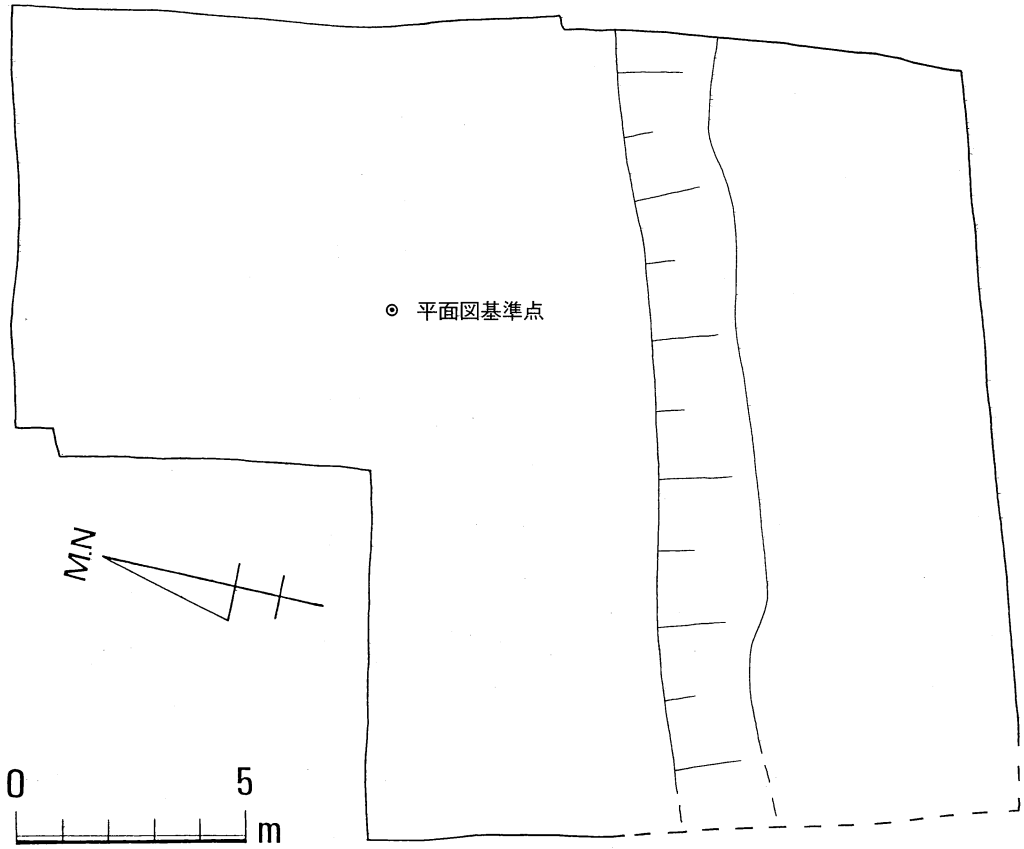


図26　第４遺構面平面図

151･152は深鉢の胴部である。151は断面三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。152は放射状に沈線を施す。147と同一個体である。153～168は弥生土器である。153～160は甕の、161～165は壺の口縁部である。153は口唇部に刻目を施す。焼成はやや軟質である。154は口唇部に刻目を、頸部に１条の沈線を施す。外面に炭化物が付着している。155は口唇部に刻目を、頸部に３条の沈線を施す。胴部外面に煤が付着している。156は頸部に２条の沈線を施す。157は口唇部に刻目を施す。162は内外面ともへらみがき調整を施す。165は内外面ともへらみがき調整の後、頸部に沈線を施す。３条が残存している。166･167は胴部である。166は２条の沈線間を細い突帯状に浮き出し、刻目を施す。167は２条の沈線が残存している。168は蓋である。169は縄文土器の鉢の底部である。底面周囲は摘み出され、上げ底である。170～185は弥生土器の底部である。170～176･181･182は壺、177･178は甕である。171の底外面には黒斑がみられる。173の内面は剥離している。177の内面には炭化物が付着している。S47はサヌカイト製の楔形石器である。上下辺に刃部を作り出している。S48はサヌカイトの剝片である。S49は凝灰岩製のやや偏平な円形の磨石である。周辺ほぼ全辺に打撃痕が見られ、上下面は磨滅している。S50は花崗岩製の偏平な磨石である。上部は欠損している。先端に打撃痕が見られる以外は全面に磨

滅している。S51は砂岩製の偏平な長円形の石器である。図示していないが、下面は全面にクモの巣状にひび割れている。石錘であろう。S52は泥岩に薄く砂岩が乗る。偏平で長円形の石器である。ほぼ全面が磨滅している。石錘であろう。S53は砂岩製の楔状の石器である。長方形で横断面は台形である。上下面は磨滅している。

186～200は縄文時代晩期のものである。186･187は浅鉢である。186は端部内面に1条の沈線

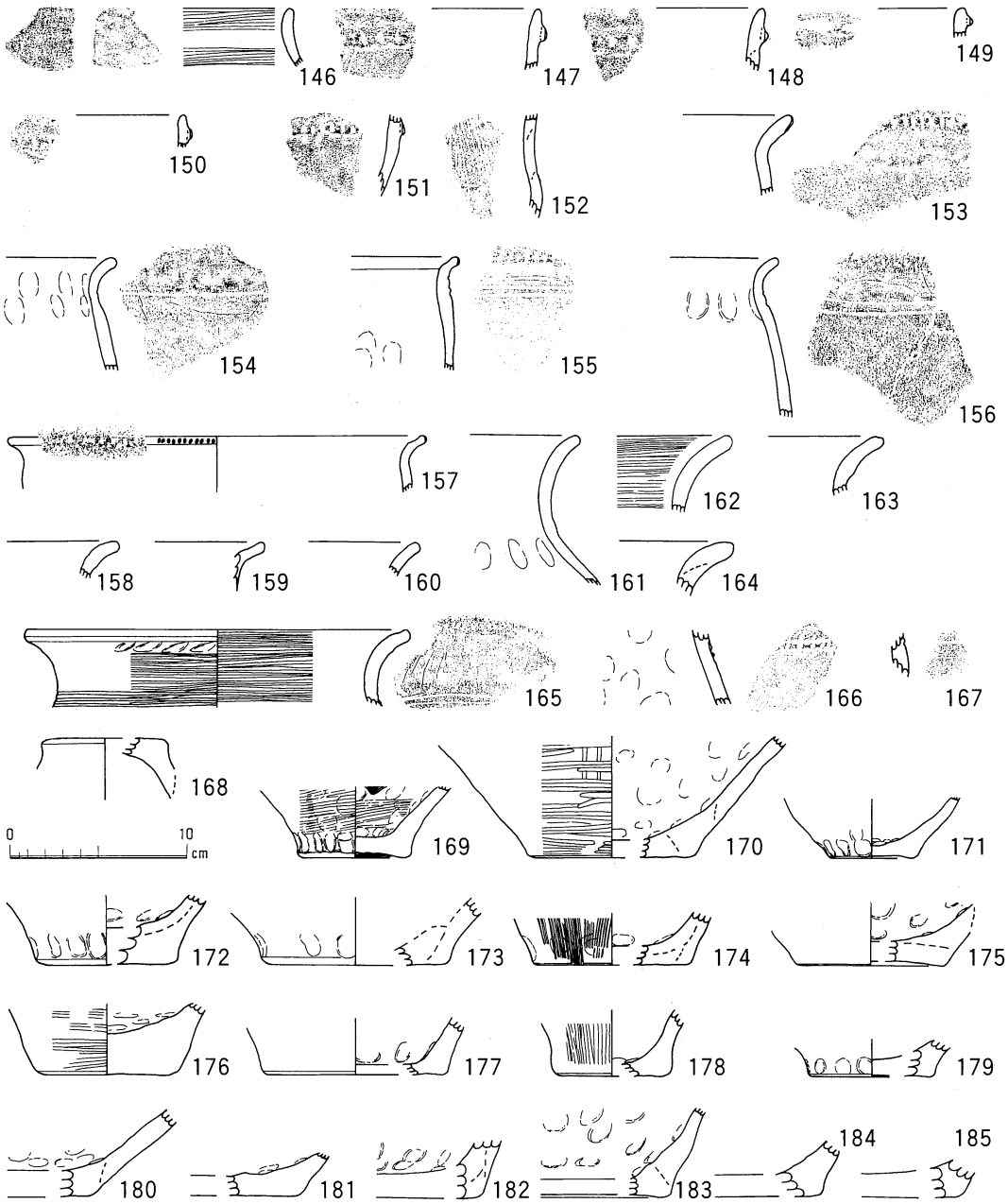


図27　第5層出土遺物実測図（1）

を施す。188～200は深鉢である。188の端部は面を成し、口唇部に刻目を施す。頸部には斜格子状の沈線文を施す。沈線は右下がりのものを後に施文する。189は断面三角形の突帯を貼付け、口唇部と突帯に刻目を施す。190は押圧によって断面三角形の低い突帯を形成し、刻目を施す。突帯直下から放射状に沈線文を施す。191は断面長方形の突帯を貼付け、刻目を施す。192～194は断面三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。193の内面には粘土帯の接合痕が段を成して残存している。195は押圧によって断面三角形の突帯を２条形成し、刻目を施す。突帯の

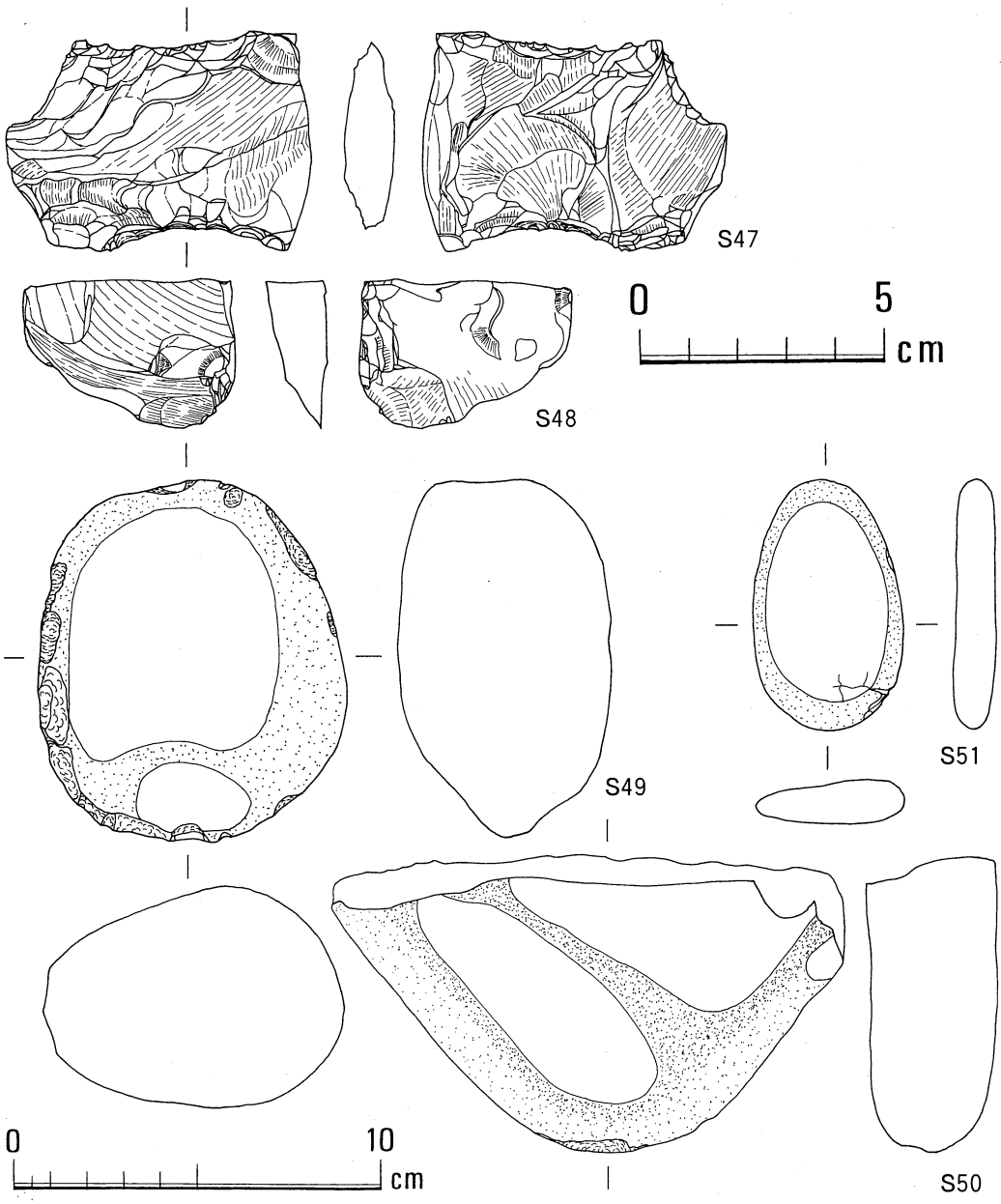


図28　第５層出土遺物実測図（２）

上下には指頭圧痕が残存している。196は縦方向に数条の細い沈線を施す。190の頸部であろうか。197～199は頸部と胴部の境に爪形文を施す。胴部には条痕が残存している。200は頸部に１条の沈線を施す。外面の所々に炭化物が付着している。201～213は弥生土器である。201はほぼ完形の小型壺である。作りは粗いが、へらみがき調整を施す。頸部に２条、胴部に３条の沈線を施す。黒斑も見られる。口径5.0㎝、底径4.2㎝、器高10.75㎝である。202は甕である。端部は面を成し、外面に刻目を施す。頸部に２条の沈線が残存している。203の外面には炭化物が付着している。205は鉢である。体部上方に１条の凹線を施し、そこより下方に炭化物、煤が付着している。焼成はやや軟質である。206・207の焼成もやや軟質である。208は甕である。頸部に２条の沈線を施す。209～211は沈線の施された胴部である。209の外面には炭化物が付着している。212・213は蓋である。212の頂面には黒斑が見られる。焼成はやや軟質である。213の頂部には剝離痕が見られることから、つまみを有していたのであろう。穿孔を施す。外面には煤が付着している。214～216は縄文土

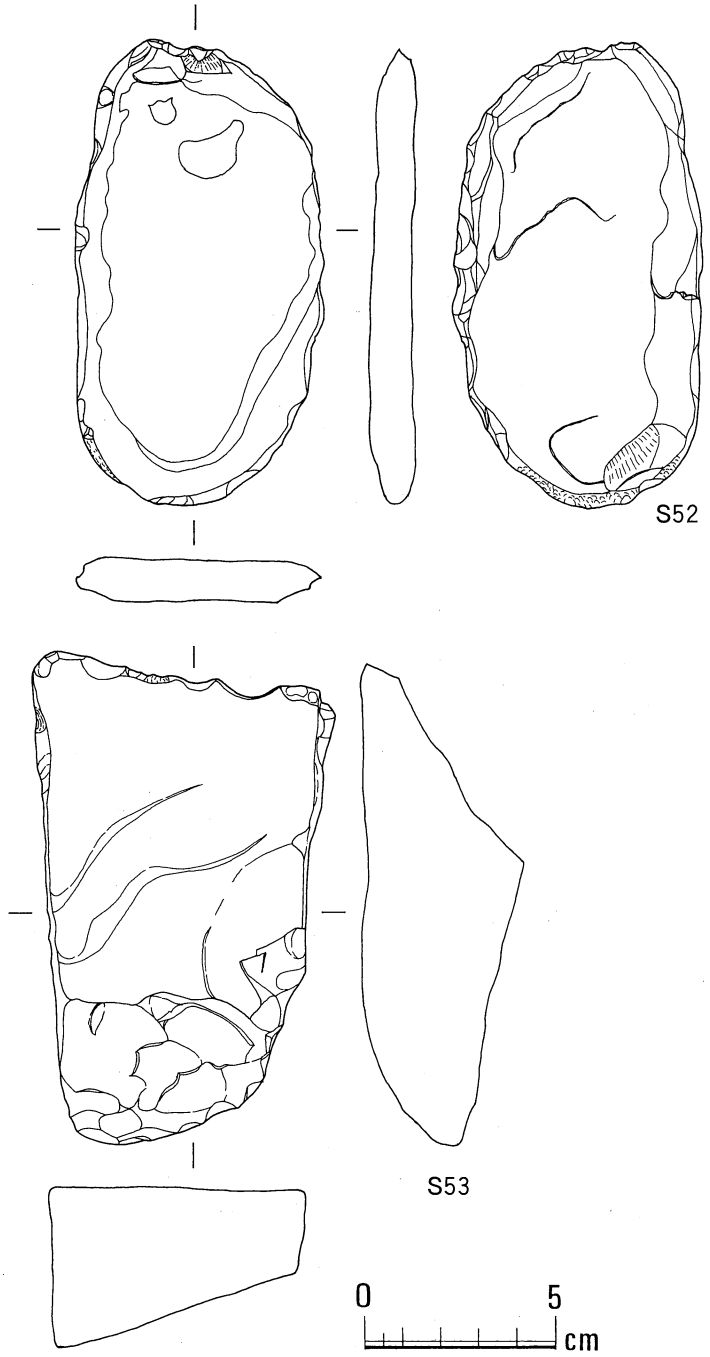


図29　第５層出土遺物実測図（３）

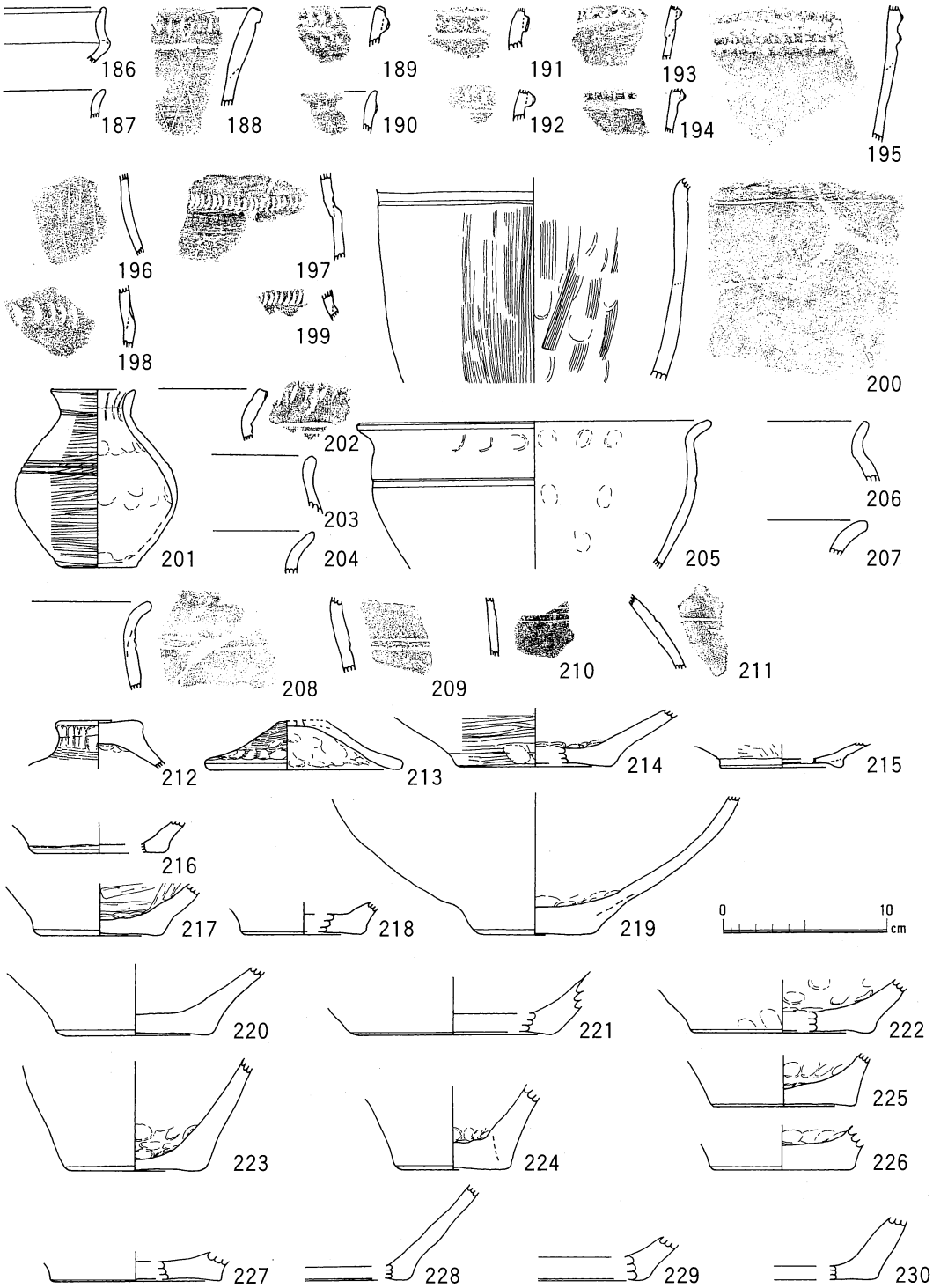


図30　第5層出土遺物実測図（4）

器の底部である。214は浅鉢である。上げ底である。215・216は鉢である。215の底面周辺は粘土を貼付け、高台状を呈する。217～230は弥生土器の底部である。217・219～222・228は壺、218・223～225は甕である。217は内面に煤が付着している。219は比較的小さな底部から胴部が球状に内弯しながら立ち上がる。220の焼成はやや軟質である。223は内面に炭化物が付着している。外面は２次焼成を受けている。225は内面に炭化物が付着している。226は底外面が暗灰色

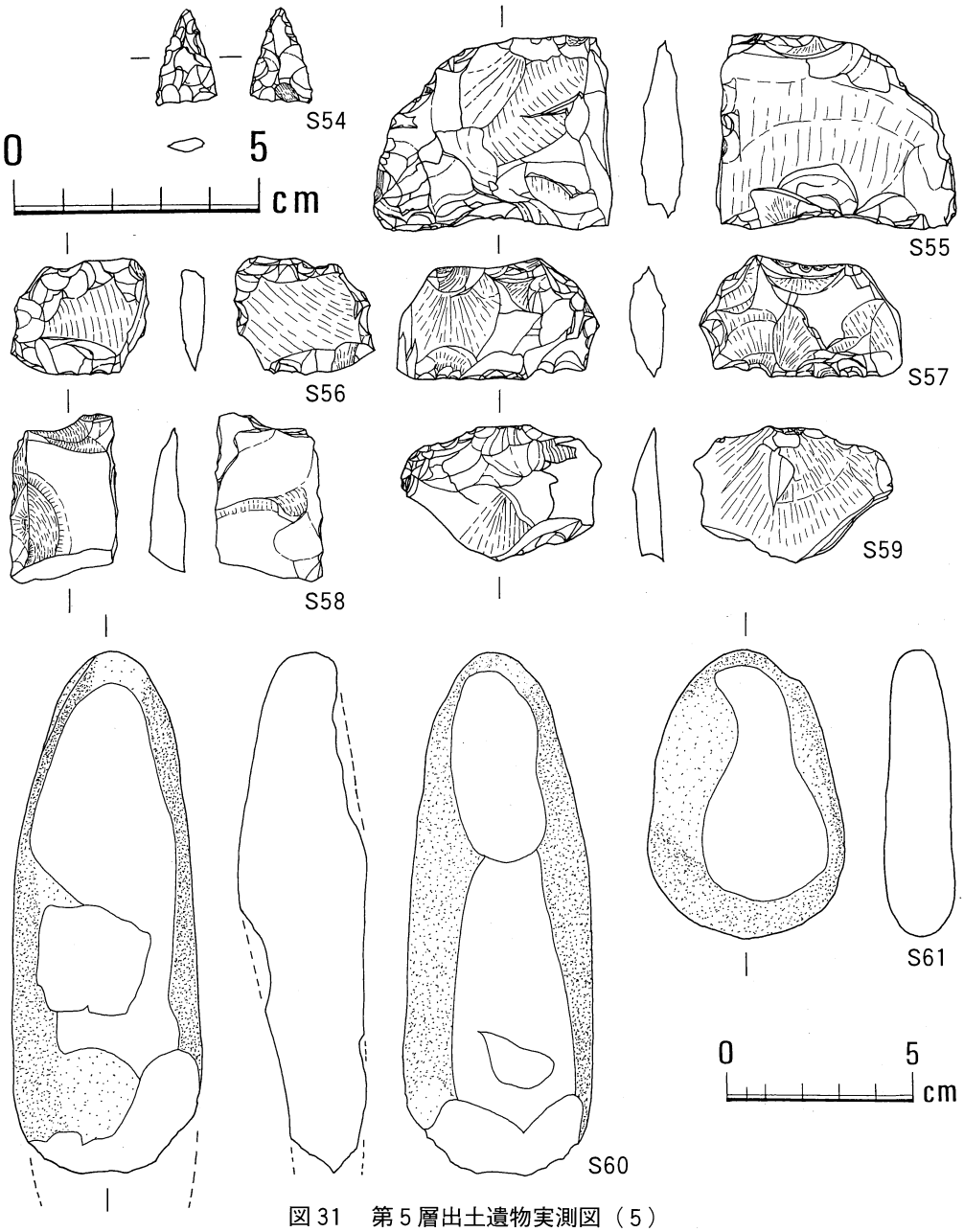


図31　第５層出土遺物実測図（５）

を呈する。煤が付着したものであろうか。228・229の焼成はやや軟質である。S54はサヌカイト製の打製石鏃である。S55はサヌカイト製のスクレイパーである。切断面以外の周辺には刃の潰れが見られる。S56・57はサヌカイト製の楔形石器である。上下辺に刃の潰れが見られる。S58・

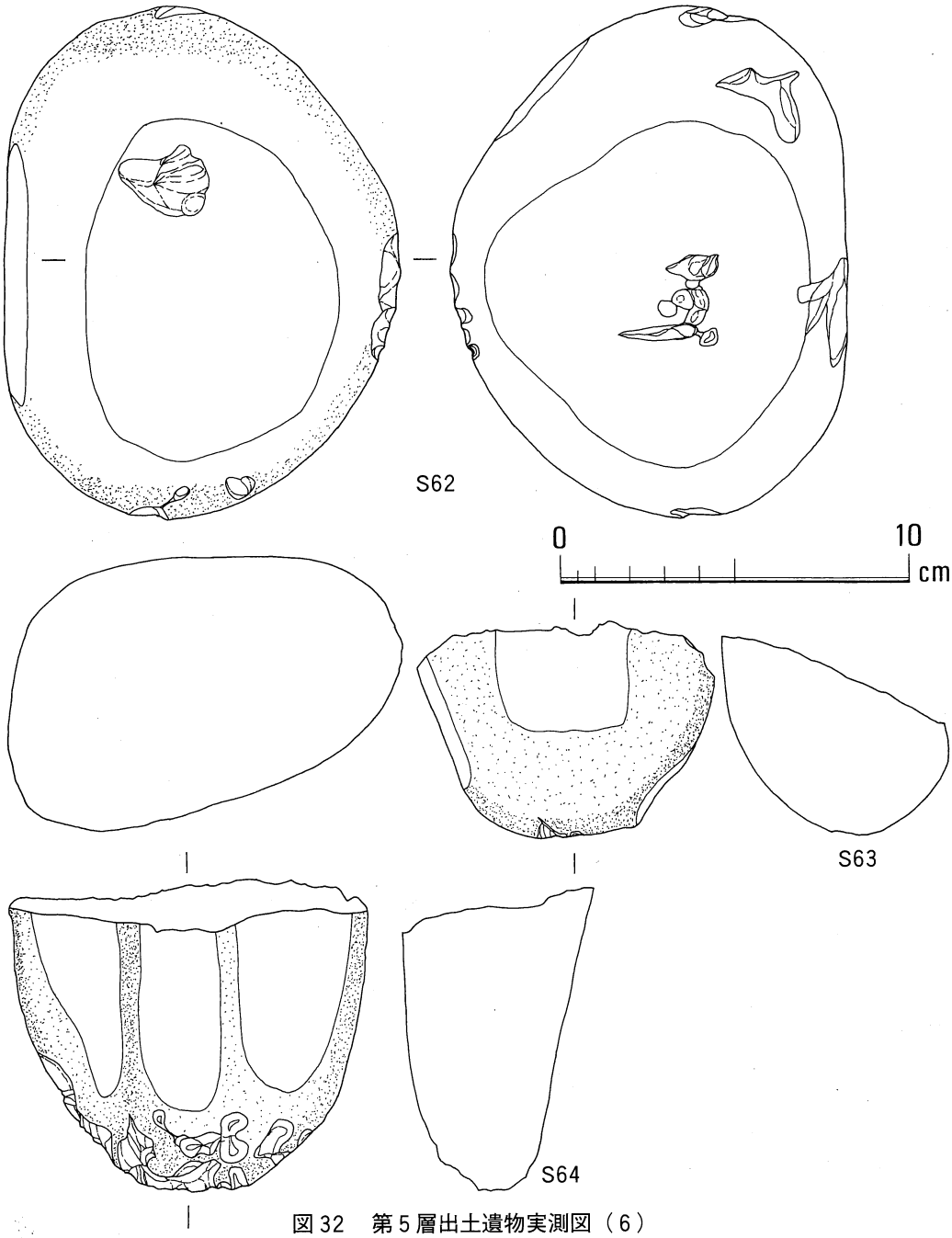


図32　第5層出土遺物実測図（6）

59はサヌカイトの剝片である。自然面が残存している。S60は砂岩製の磨製石斧である。長三角形で基部は尖る。全体に磨滅している。S61は花崗岩製の偏平な長円形の磨石である。全体に良く磨滅している。S62は花崗岩製の磨石である。四端に打撃痕が見られる。横断面は長三角形で、各面とも磨滅している。S63・64は花崗岩製の敲石である。上半は欠損している。先端に打撃痕が見られる。上下面は磨滅している。S65は花崗岩製のやや偏平な円形の磨石である。一部が欠損している。欠損部の反対側の辺に打撃痕が見られる。上下面は良く磨滅している。

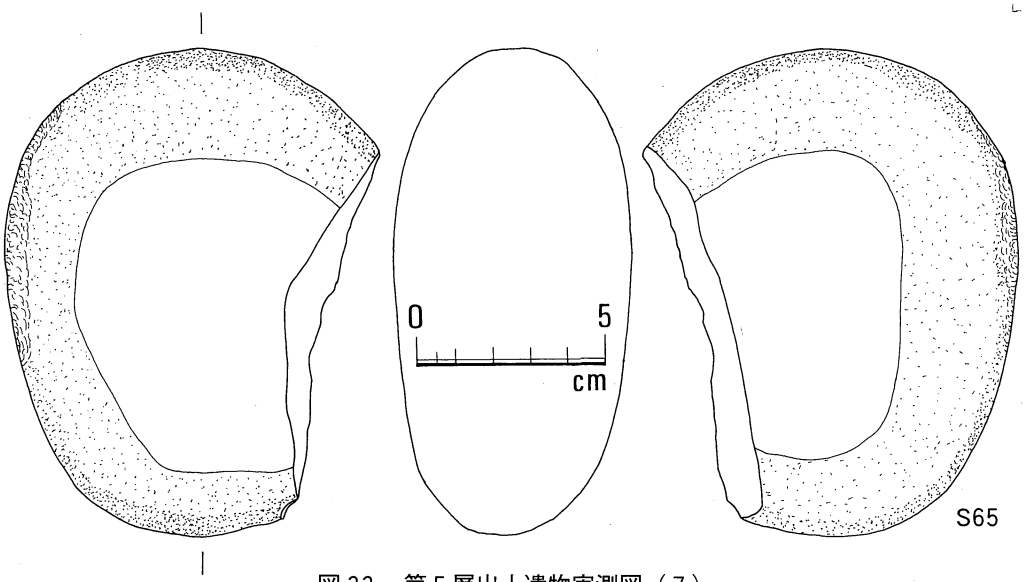


図33　第５層出土遺物実測図（７）

11　第５遺構面

第５遺構面は上面と同様の旧河道である。第５層を掘削した分だけ河幅が北へ広がったことになる。河岸は緩やかに傾斜している。検出面のレベルは岸上で32.0～32.2mである。流木と思われる木材が検出された。他の遺構は検出されなかった。なお、第５層掘削中に降雨により、調査地南西の壁面が崩壊した。土砂を撤去するとさらに崩壊する危険が有ったため、この部分を除いて調査を継続した。

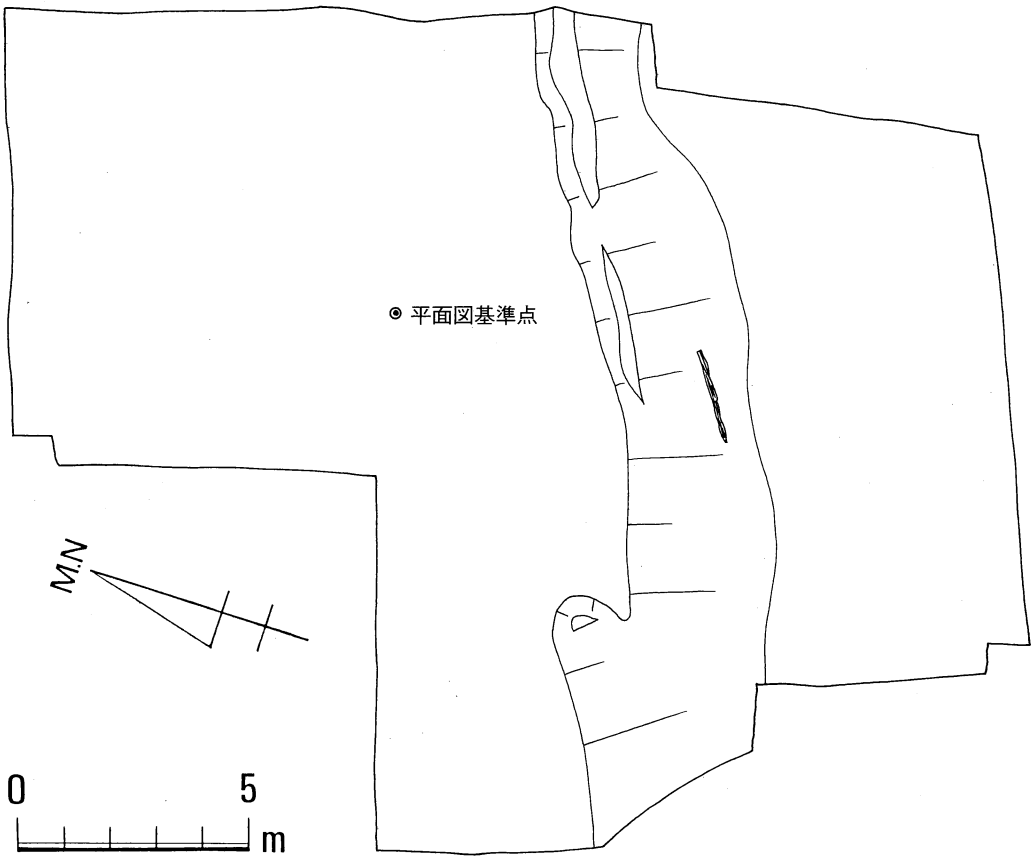


図34　第5遺構面平面図

12　第6層

第6層は旧河道の堆積土の3層目である。厚い所で0.4m程度の細砂層である。

縄文土器、弥生土器、サヌカイト片4点、焼土塊350gが出土したが、出土量は少なく、小片ばかりである。

231・232は縄文時代晩期の浅鉢である。233は断面三角形の突帯が貼付けられた口縁部である。焼成が軟質のため、磨滅が著しい。234は縄文時代晩期の深鉢である。断面三角形の突帯が貼付けられ、口唇部と突帯に刻目を施す。S66・67はサヌカイトの剝片である。S66は自然面が残存している。

第6層も、第2層下層、第4層上層と同様に洪水によって形成されたものであろう。

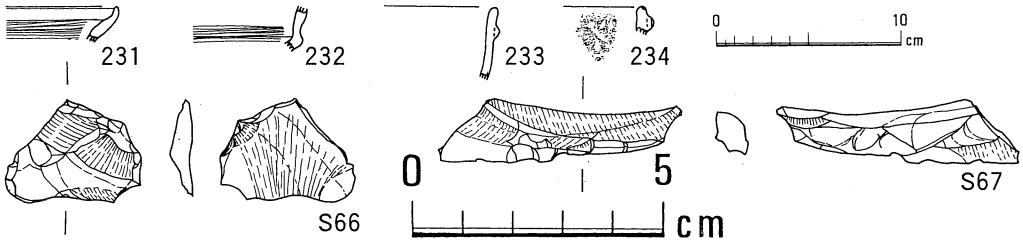


図35　第6層出土遺物実測図

13　第6遺構面

第6遺構面は第6層を掘削したことで旧河道が北へ1.5～2.5m拡幅し、河底も深くなった。河岸は1段の段を挟んで緩やかに傾斜している。これより下面では旧河道内堆積土のみを掘削するため、河道の岸肩の位置は変わらない。他の遺構は検出されなかった。

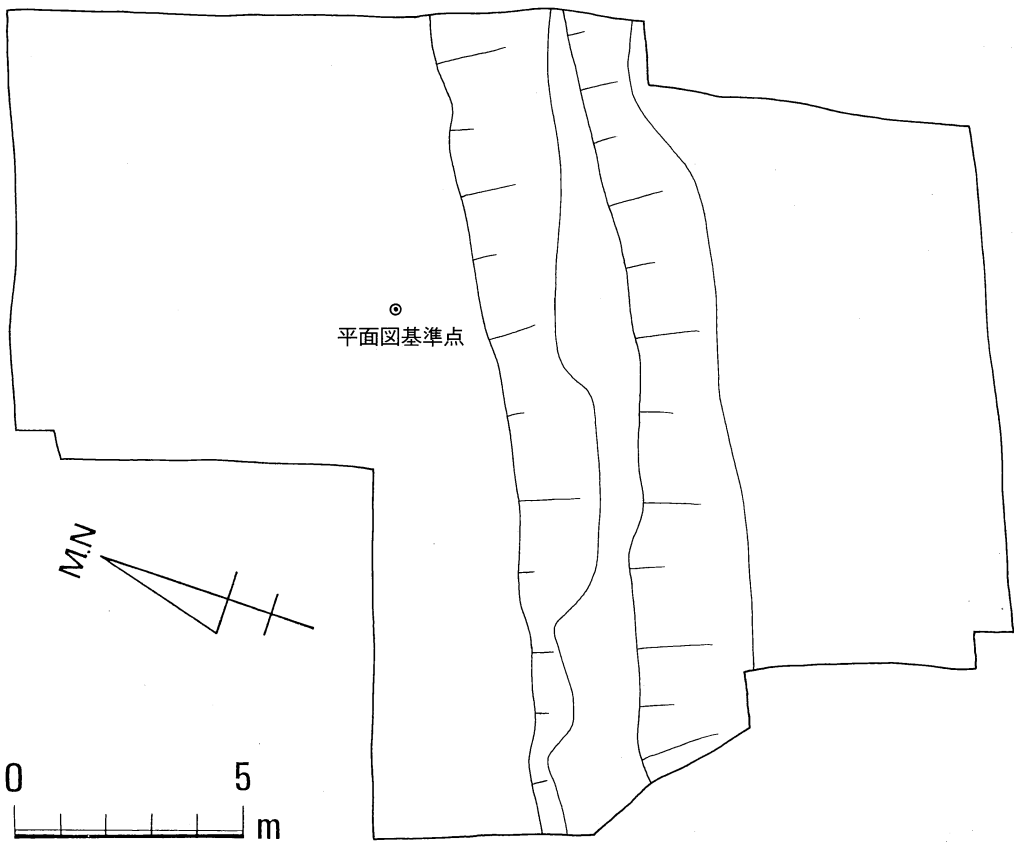


図36　第6遺構面平面図

14　第７層

第７層は旧河道内堆積の４層目である。厚い所で0.3m程度の粘質土層である。木片を少量含む。

整理箱半箱程度の縄文土器、弥生土器、サヌカイト片約180g等が出土した。状態の良いものが多い。

235･236は縄文時代晩期の壺である。235は屈曲して外反する小さな口縁部から大きく広がる胴部をもつ。肩部に緩い段がある。胴部に細い１条の沈線を施す。236はやや外反しながら直立する口縁部から球状の胴部をもつようである。口縁端部は内面に１条の沈線を施し、内側へ玉縁状に肥大する。胴部には条痕が残存している。口縁部外面には煤が、胴部外面には炭化物が付着している。237～240は弥生時代前期の甕である。口唇部に刻目を施す。237の端部は面を成す。胴部上方に１条の凹線を施す。外面に炭化物が付着している。238は頸部に１条の凹線が見られる。外面に炭化物が付着している。焼成はやや軟質である。241～243は縄文時代晩期の浅鉢である。243の端部は左右非対象の山形小突起をもつ。下部には焼成前に内側から穿孔を施す。内面には左回りに２条の凹線を施し、凹線間は突帯状を呈する。244～252は縄文時代晩期の深鉢である。244～246の端部は面を成す。凹線を施すことで端部を強調している。突帯を意識しているのであろうか。244の端部では粘土を外側に折り返して肥大させているのが観察出来る。口唇部に刻目を、頸部に斜格子状の沈線文を施す。沈線は右下がりのものを後に施文する。247の端部は面を成し、刻目を施す。外面に炭化物が付着している。248の端部は面を成し、刻目を施す。この破片内で施文方向が変わっている。押圧によって断面台形の突帯を形成し、刻目を施す。頸部には左下方向へ４条一組の沈線文を施す。焼成はやや軟質である。249の端部は肥大して面を成し、刻目を施す。断面三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。頸部下半に貝殻によって格子状の押形文を施す。250の端部は小さな面を成し、浅い刻目を施す。外面の条痕は比較的丁寧である。文様を意識しているのであろうか。外面に炭化物が付着している。251の頸部と胴部の境は段を成す。胴部の器壁はへらけずり調整によって薄く仕上げられている。頸部最下辺に爪形状工具を＞状に２段に押し付けて、より大きな爪形文状の施文を施す。下段を後に施文する。外面に炭化物が付着しているが、胴部の方が厚く付着している。252も251と同様の施文が見られるが、252の工具の方が直線的で、上段を後に施文する。

253～257は弥生土器である。253は甕である。頸部に低い突帯を削り出し、口唇部と突帯に刻目を施す。外面に炭化物が付着している。焼成はやや軟質である。254は小型の壺であろうか。端部は折り曲げて外下方に拡張している。頸部に１cm幅に７条程度の多条沈線文を施す。焼成はやや軟質である。255･256は甕である。255の端部はやや拡張し、逆三角形のスタンプ文を施

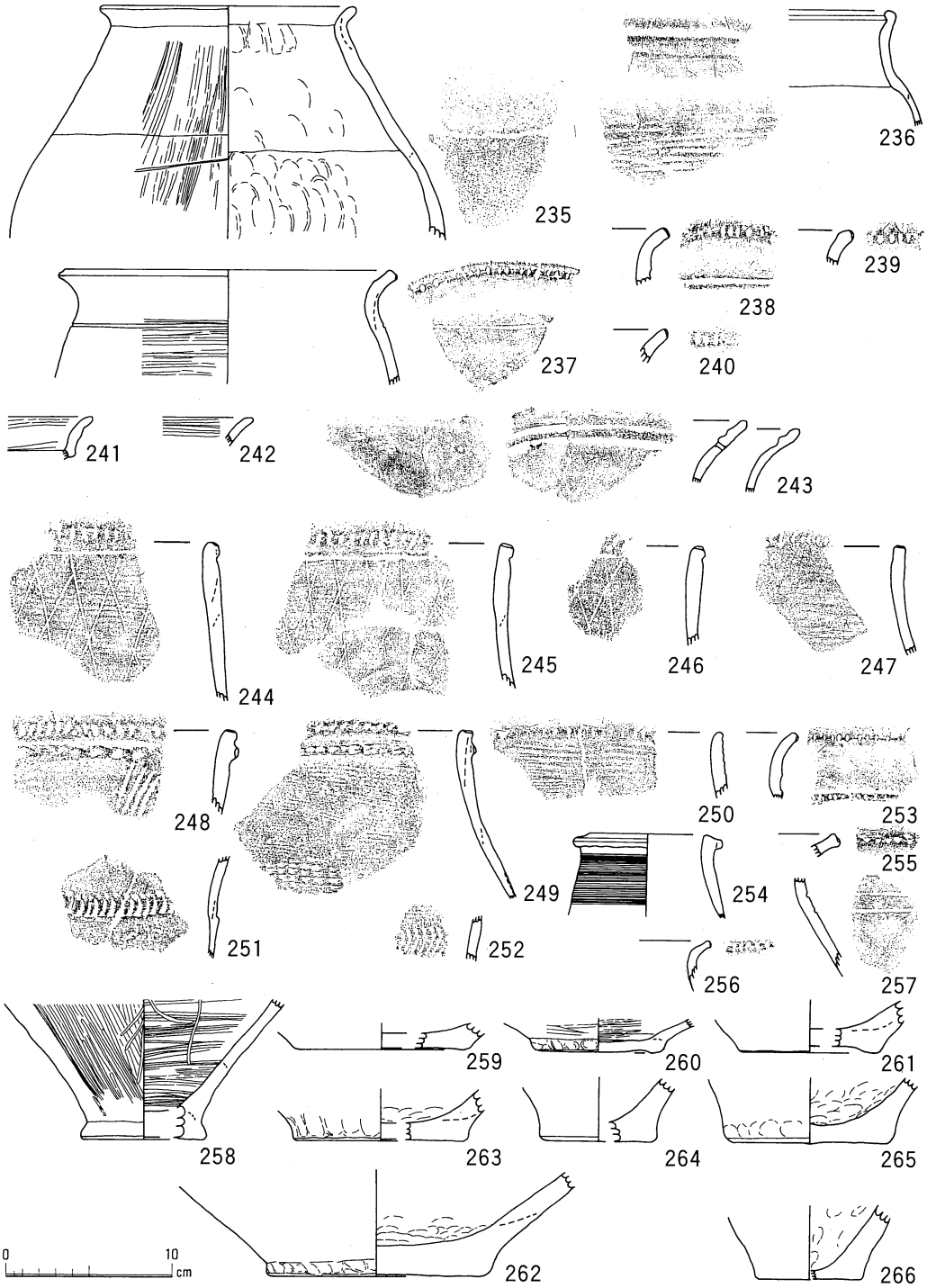


図 37　第 7 層出土遺物実測図（1）

す。焼成はやや軟質である。256の口唇部は刻目を施すが、押圧のため、粘土が下方に飛び出している。外面に炭化物が付着している。257は壺である。２条の沈線を施す。外面に炭化物が付着している。258～262は縄文土器の底部である。258･259は浅鉢である。258は底外面にもへらみがき調整を施す。やや上げ底である。259の焼成はやや軟質である。260･261は鉢である。底面周辺は高台状に突出し、上げ底である。262は深鉢である。外面に煤が、内面に炭化物が付着している。263～266は弥生土器の底部であろう。264の内面には炭化物が付着している。265は成形時の圧痕が残存し、不安定である。内外面に炭化物が付着している。266は内外面に炭化物が付着している。S68･69はサヌカイト製のスクレイパーである。S68の図上で左角はやや磨滅している。S69の下辺には刃の潰れが見られる。S70はサヌカイト製の楔形石器である。

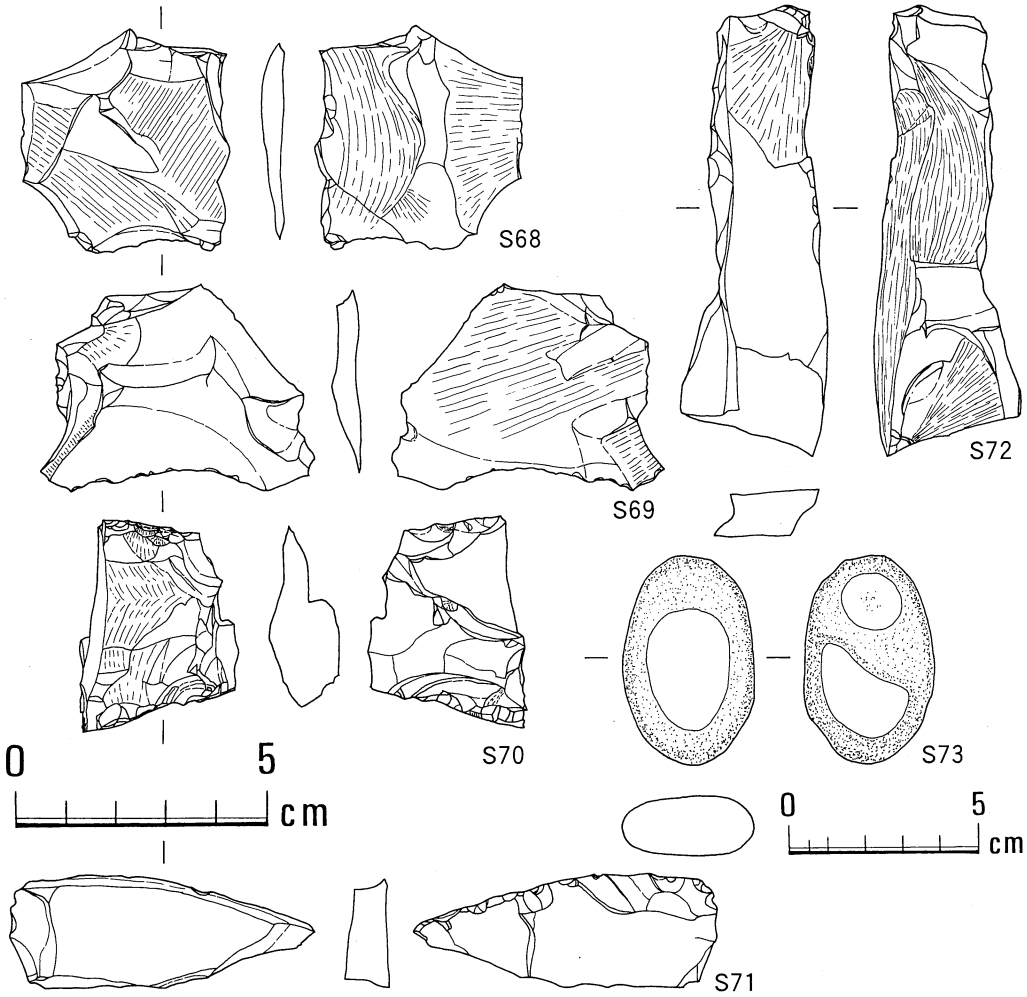


図38　第７層出土遺物実測図（２）

上下辺に刃の潰れが見られる。S71・72はサヌカイトの剝片である。S72は自然面が残存している。S73は偏平な長円形の磨石である。全面に良く磨滅している。砂岩製であろう。

15　第７遺構面

第７遺構面は上面と同様に、第７層を掘削したことで旧河道が深くなった。長さ7.3mのものをはじめ、流木を検出した。河底は船底状を呈する。検出面のレベルは、河道中央で31.0～31.1mである。西へわずかに傾斜している。他の遺構は検出されなかった。

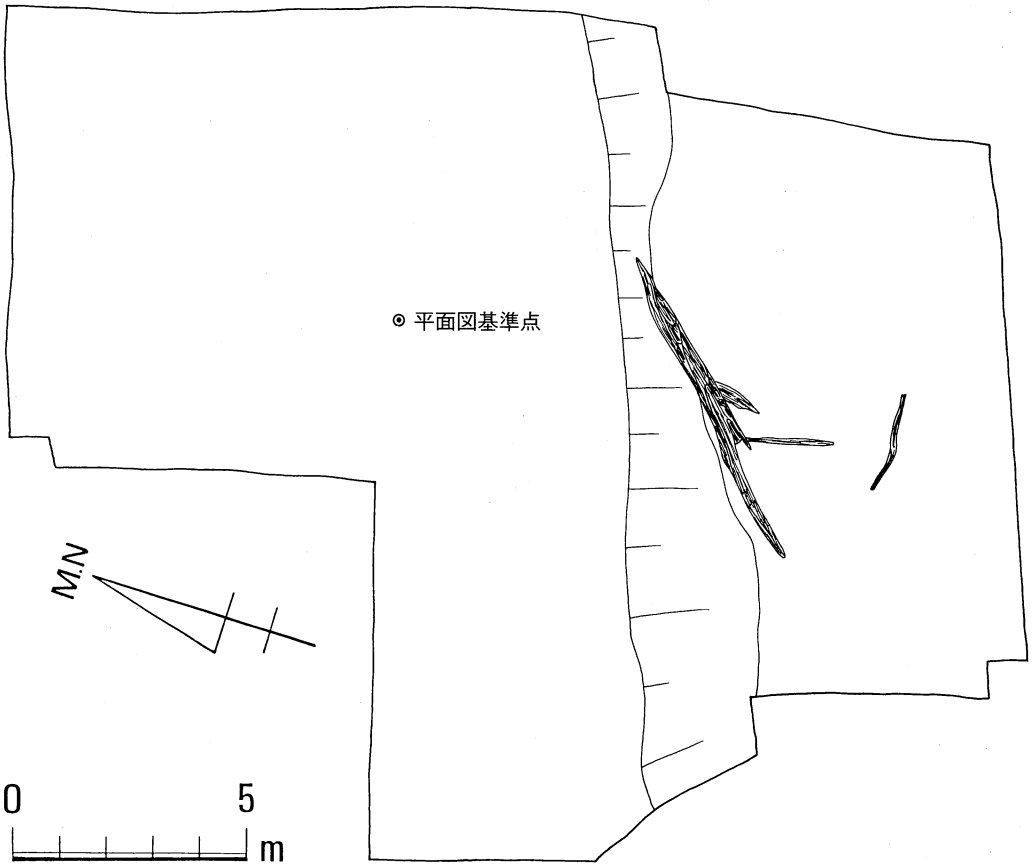


図39　第７遺構面平面図

16　第８層

第８層は旧河道内堆積の５層目である。厚さ0.1m程度の粘質土層である。木片を少量含む。

縄文土器、弥生土器の小片14点、サヌカイト片等が出土したが、図示出来たものはわずかである。

267は底部である。表面磨滅のため詳細は不明である。縄文土器であろうか。S74はサヌカイ

ト製のスクレイパーである。下辺に刃部調整を施す。自然面が残存している。S75はサヌカイトの剥片である。S76はサヌカイト製の打製石鏃である。長台形を呈する。下面はほとんど剥離しているが、残存部は全面が磨滅している。

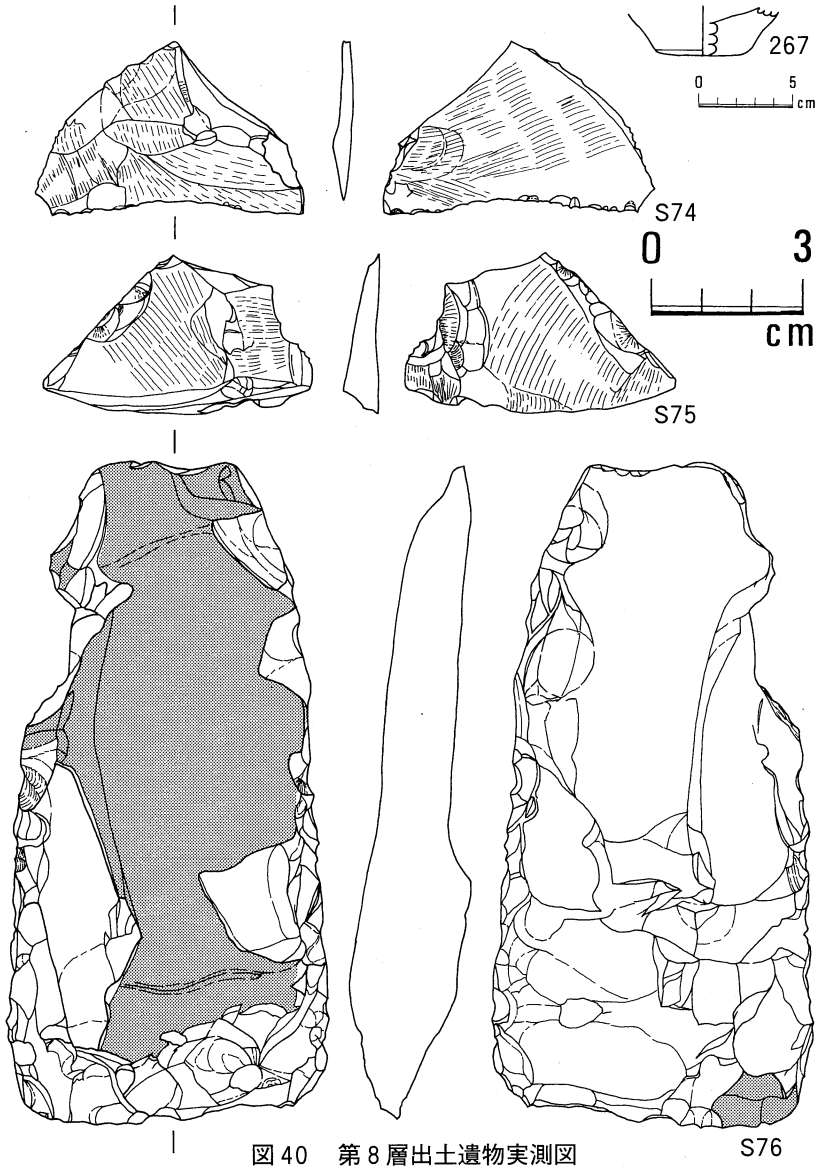


図40　第8層出土遺物実測図

17　第８遺構面

第８遺構面は上面と同様に、第８層を掘削したことで旧河道が深くなった。長さ5.2mのものをはじめ、流木を検出した。河底は船底状を呈する。西へ傾斜している。流木の先端が東を向くことからも、流水方向が西であることが伺える。

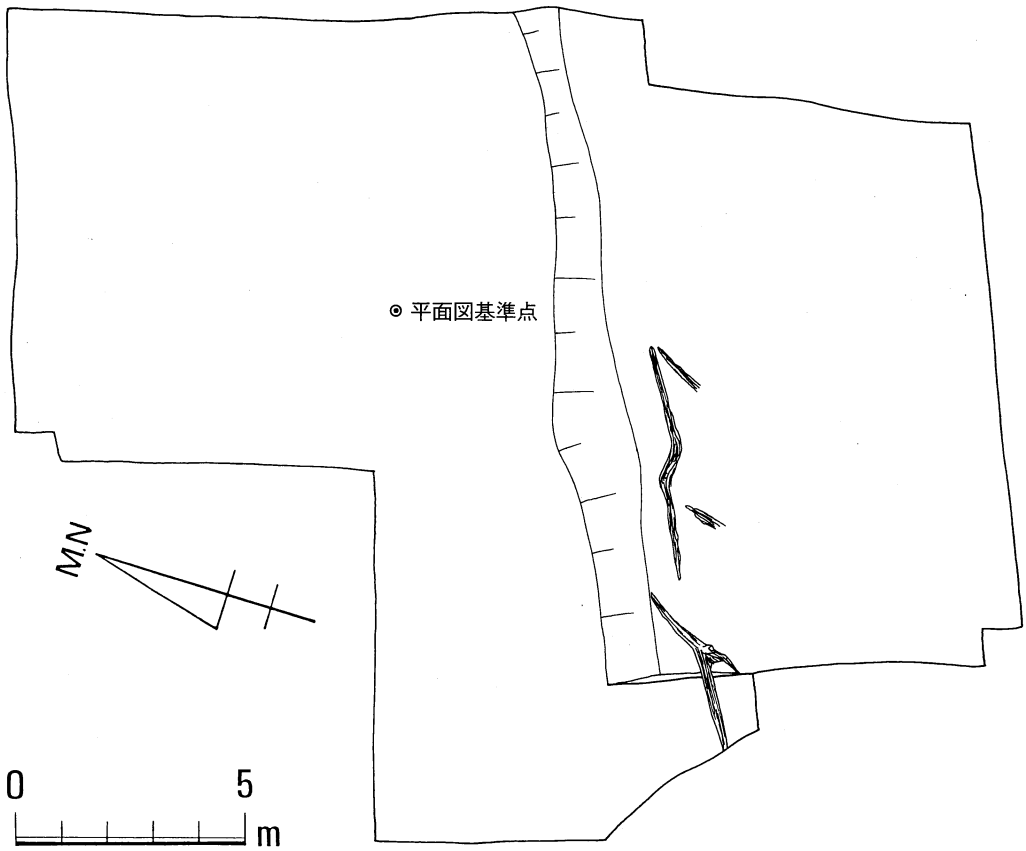


図41　第８遺構面平面図

18　第９層

第９層は旧河道内堆積の６層目の厚さ0.1～0.2mの粘質土層と、その下層の厚さ0.1m程度の腐植土層である。両層とも多数の流木を含み、最大のもので径0.3mにもなる。これらを掘削したところ、旧河道の中央で幅2.5～3m、厚さ0.2m程度の木片を含む砂層を検出した。粘質土層と腐植土層を上層、砂層を下層とした。

上層からは縄文土器、弥生土器、サヌカイト片等が出土した。出土量は少ないが、状態は良いことから、近隣に集落が存在したのであろう。図42･43は同層から出土したものである。下層からは縄文土器等が出土した。図44で図示したものが全てである。

268～281は縄文土器である。268は球状の体部の鉢であろう。外面に２条の凹線を施す。凹線間を突帯状に浮き出させ、縄文を施し、１列の刺突文を施す。さらに、縄文帯から口唇部へ断面方形の突帯を貼付け、刺突文を施す。破片の下辺にも１条の凹線が見られる。口縁は細かい間隔で小さい山形突帯をもつ波状口縁のようである。後期のものであろう。269は中世の擂鉢状の浅鉢であろう。端部は下方に拡張され、面を成す。端面に施文は見られない。外面には条痕を消すように粗くへらみがき調整を施す。後期のものであろうか。270～281は晩期のものである。270はほぼ完形の鉢である。半球状の胴部に大きく開く口縁部をもつ。成形、調整は粗く、口縁部は波打ち、指頭圧痕が残存している。端部はわずかに内側へ玉縁状に肥大している。内外面に炭化物が付着している。口径21.0㎝、器高11.15㎝を測る。271～274は浅鉢である。271はやや内弯する胴部に大きく外反する口縁部をもつ。口縁は５ヶ所の突起をもつ波状口縁である。端部は外側へ肥大している。内外面ともへらみがき調整で仕上げ、口縁部外面に朱彩（網点部）を施す。272の端部は内側へ肥大している。波状口縁である。273の端部は内側へ突帯状に粘土を貼付け、玉縁状を呈する。274の端部は押圧によって内側へ玉縁状に肥大している。275～281は深鉢である。275は緩やかに外反する口縁部をもつ。端部は面を成し、刻目を施す。頸部下辺に篦状工具で押形文を施す。口縁部外面に炭化物が付着している。276の端部は面を成す。端部外面に断面三角形の突帯を貼付ける。口唇部と突帯に刻目を施す。頸部下方に爪形文状の押形文を施す。条痕が明瞭に残存している。277は内弯する口縁部である。端部はわずかに面を成す。端部外面に断面三角形の突帯を貼付ける。口唇部と突帯に細い刻目を施す。突帯下方に炭化物が付着している。焼成はやや軟質である。278の端部はわずかに面を成す。端部から下がった所に断面長三角形の突帯を貼付け、刻目を施す。279の端部は面を成す。端部から下がった所に、押圧によって断面三角形の低い突帯を形成する。口唇部と突帯に刻目を施す。外面に炭化物が付着している。280の端部はわずかに面を成す。端部内面にほぼ等間隔に粘土を摘み出して突起を形成する。刻目を意識しているのであろうか。頸部下方に爪形文と思われる施文を施す。外面に炭化物が付着している。281の器壁は薄く、口唇部に刻目を施す。外面に炭化物が付着している。282･283は弥生土器の底部である。282は壺である。焼成はやや軟質である。283は甕である。内面に炭化物が付着している。S77･78はサヌカイト製の楔形石器である。上下辺に刃の潰れが見られる。S79･80はサヌカイトの剝片である。S79は自然面が残存している。S81は花崗岩製の石皿である。ほとんどの面が磨滅しているが、上面は特に良く磨滅し窪みを成す。この他にサヌカイトの石核が出土した。重さ274gを測る。

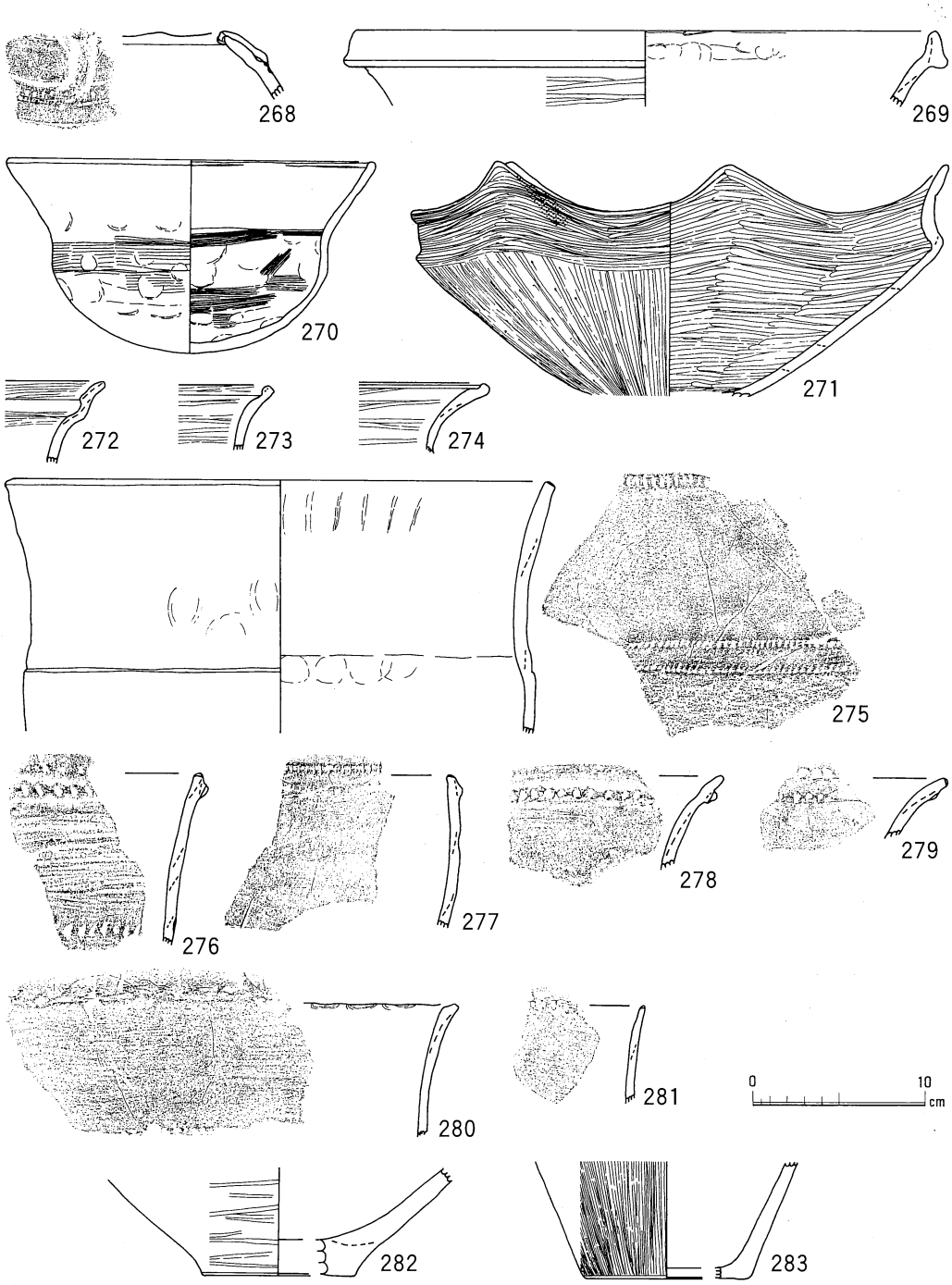


図42　第9層出土遺物実測図（1）

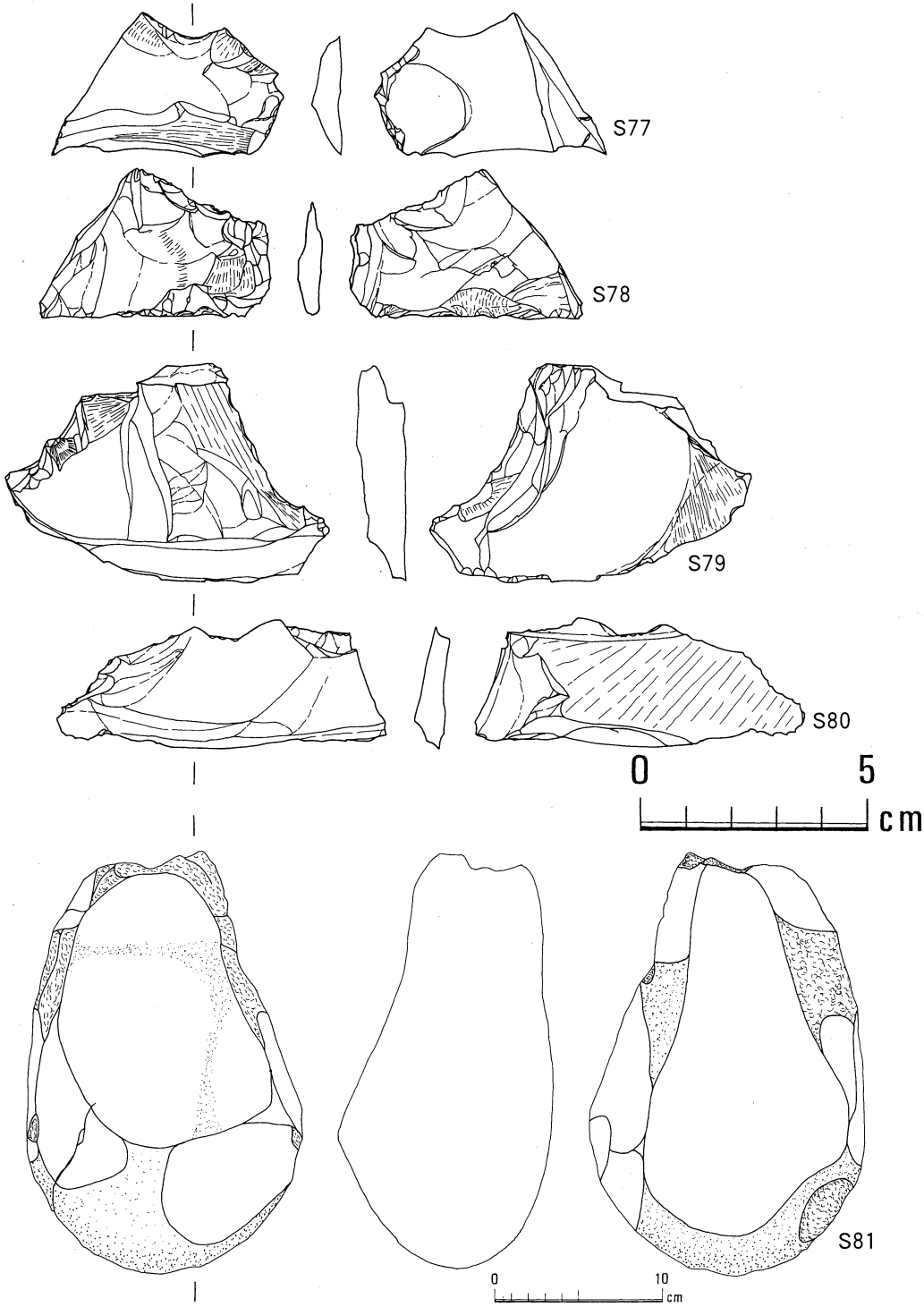


図43　第9層出土遺物実測図（2）

284・285は縄文土器である。284の外面には施文を施す。煤が吸着し、褐色を呈する。285は浅鉢の胴部である。内外面ともへらみがき調整を施す。煤が吸着し、褐色を呈する。S82は花崗岩製の偏平な長円形の磨石である。上下端に打撃痕が見られ、全面が磨滅している。

第９層下層の砂層は、旧河道の中央の細い窪みに、強い流勢で形成されたのであろう。やがて窪みも埋没し、流勢も穏やかになり、落葉や粘土が堆積し上層を形成したのであろう。

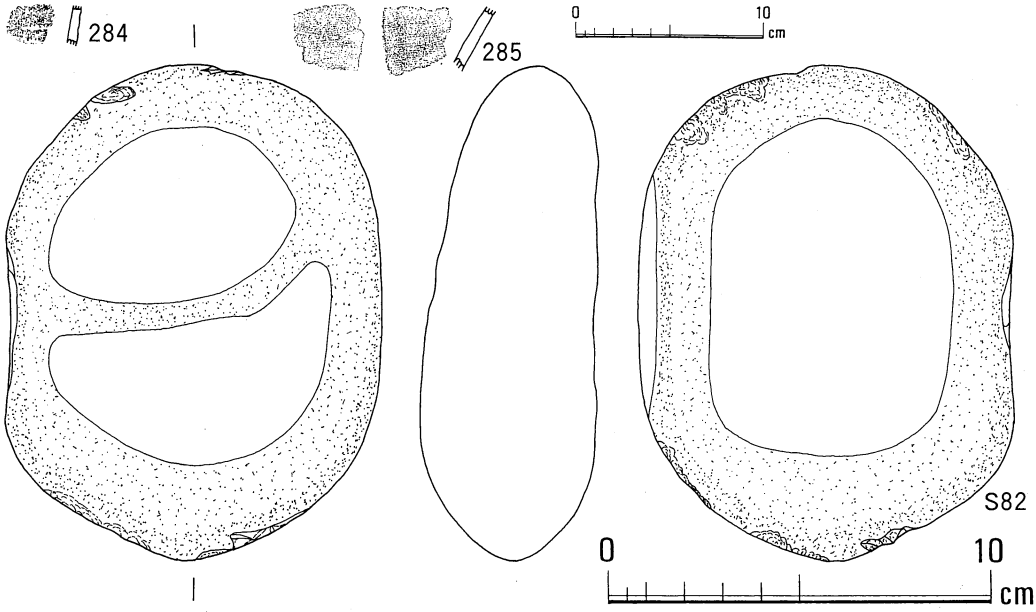


図44　第９層出土遺物実測図（３）

19　第９（最終）遺構面

第９遺構面は旧河道の河底である。河底は船底状を呈し、緩やかに傾斜している。前節で述べた様に、中央で検出した砂層を掘削したため、河底の中央はさらに一段落ち込む。最深部のレベルは30.3～30.4mである。西へ傾斜している。他の遺構は検出されなかった。

河底をさらに約1m下、29.4mまで掘削した。厚さ0.1m程度の砂層と腐植土層の互層が見られた。遺物は出土しなかったため、この第９遺構面を最終面とし調査を終了した。

※　縄文土器について山本悦世氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）からご教示を頂いた。

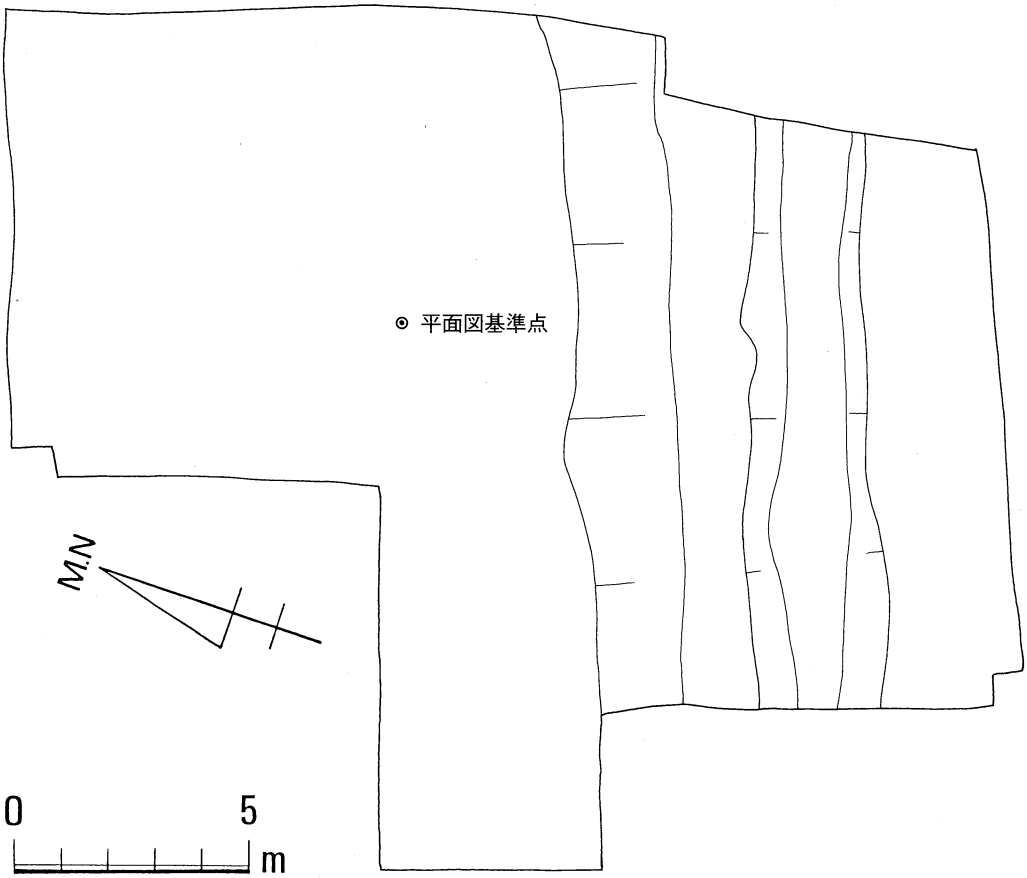


図45　第9（最終）遺構面平面図

Ⅳ まとめ

前章で検出した遺構、遺物について述べた。ここでこれらをまとめてみたい。

まず、層序関係をまとめると図46のようになる。

それでは時代を追って、調査地の変遷を見てみたい。

縄文時代後期以前

縄文時代後期に位置付けられる土器片268・269が第９層から出土した。備前原遺跡の歴史はこの時期まで遡れる。これより以前は遺物が出土しないことから、調査地周辺では人跡は見られなかったのであろう。

縄文時代晩期～弥生時代前期

第９～７遺構面の時代である。第９層上層～第７層は腐植土層、粘質土層であることから、河道は安定していたのであろう。第９層上層、第７層から縄文時代晩期の遺物がまとまって出土した。土器片は比較的大きなものが多く、遺存状態も良いことから、近隣に集落が営まれて

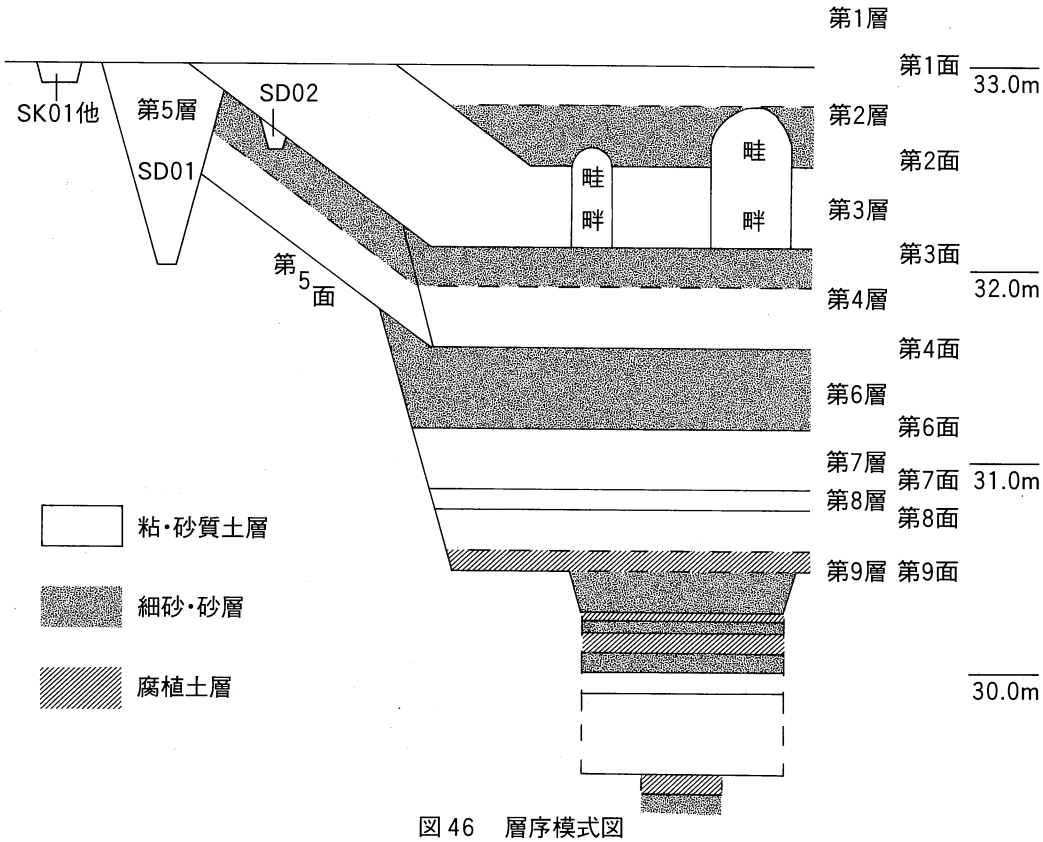


図46　層序模式図

いたのであろう。

弥生時代前期

第６遺構面の時代である。第６層の細砂層を形成する洪水が発生している。

弥生時代中期前葉

第４遺構面の時代である。河道は第４層下層の粘土層を形成するほど穏やかであったのであろうが、その後、第４層上層の細砂層を形成する洪水が発生している。

弥生時代中期中葉～後葉

第３遺構面の時代である。調査地に人為的な手が加わり、SD01・02が掘削される。調査範囲内でだが、この時期のみ溝は東流していたようである。

弥生時代後期

第２遺構面の時代である。河道は埋没し、湿地と化していたのであろう。第３層の粘質土層を耕作土に水田として利用されている。

弥生時代後期終末期

河道は埋没したとは言え、不安定であったようで、第２遺構面の水田は第２層下層の細砂層を形成する洪水に襲われている。

古墳時代以降

第１遺構面の時代である。河道は完全に埋没し、調査地内は同レベルとなるが、積極的に利用された様相は伺えない。現在に至るまで水田として利用されていたのであろう。

縄文時代晩期深鉢について

前述のように第９層上層、第７層からこの時期の土器がまとまって出土した。それらのうち、深鉢について見てみたい。

口縁部に着目すると、突帯の有無で二分される。さらに、突帯をもつものは、その位置が端部より下方のもの（248・249・278・279）と端部直下のもの（276・277）に分けられる。突帯をもたないものは、端部が尖るもの（250・280・281）と方形で面を成すもの（244～247・275）に分けられる。いずれも口唇部に刻目を施す。280は刻目は施されていないが、端部内側の摘み出された突起は刻目を意識していると考えられる。近隣の遺跡の調査結果[1]から、これらは端部が尖るもの→端部が方形のもの→突帯が下方のもの→突帯が端部直下のものと新しくなる。これらのうち244～247は鎌木氏らの報告[2]で一類とされ、『かなり多量に発見された特異』なものに該当しよう。今回の調査で出土した縄文時代晩期の土器は原下層式土器を含む、晩期中葉後半から後葉のものである。

1)　平井泰男　「縄文時代晩期の土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 120　窪木遺跡Ⅰ』(1997)

2)　鎌木義昌・江坂進　「岡山縣御津町原遺跡」『瀬戸内考古学２』(1958)

土器観察表

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
1	甕	16.4	よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫	明灰黄	暗灰茶	
2	甕	14.6	よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫少	白灰肌	白灰茶	凹線２条
3	甕	11.1	よこなで	よこなで へらけずり	3 mm以下細礫	暗肌灰	肌灰	
4	甕		よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫	淡灰橙	暗灰橙	
5	甕		よこなで	よこなで	0.5 mm以下砂粒少	淡橙	灰橙	焼成軟
6	甕	14.9	よこなで	よこなで へらけずり	0.5 mm以下細礫	白灰茶	黄灰	沈線９条 煤付着
7	壺		なで へらみがき	なで へらみがき	0.5~3 mm細礫極少	明赤茶	赤茶	丹塗り
8	甕		よこなで	よこなで	0.5 mm以下砂粒	暗灰肌	肌灰	沈線３条残存
9	甕		よこなで	よこなで	0.5 mm以下砂粒	暗肌灰	灰茶	沈線５条残存
１０	甕		よこなで	よこなで	1 mm以下砂粒	肌灰	暗黄灰	沈線６条
１１	壺		よこなで	よこなで	0.5 mm以下砂粒極少	赤茶	赤茶	丹塗り
１２	甕		よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫少	暗灰茶	灰肌	沈線４条 煤付着
１３	甕		よこなで	よこなで へらけずり	0.5 mm以下砂粒	灰肌	暗茶灰	沈線６条残存
１４	甕		よこなで	よこなで へらけずり	0.5 mm以下砂粒	灰肌	黄灰	沈線７条
１５	甕		よこなで	よこなで へらけずり	0.5 mm以下砂粒	肌灰	淡灰肌	沈線９条
１６	甕		よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫	暗肌灰	黒	沈線５条残存
１７	壺		よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫	暗灰肌	暗肌灰	
１８	壺		よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫	暗茶	淡茶灰	
１９	壺		よこなで	よこなで	1 mm以下細礫極少	明茶	明茶	丹塗り
２０	壺		よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫	明肌灰	淡茶灰	
２１	椀		不明	不明	0.5~1 mm細礫	明赤茶	明赤茶	丹塗り
２２	壺	7.3	よこなで	よこなで へらけずり	0.5~2 mm細礫少	淡灰橙	灰肌	
２３	壺		不明	不明	0.5~1 mm砂粒少	暗灰肌	淡灰茶	
２４	甕	5.0	不明	なで	0.5~5 mm細礫	暗橙	灰	丹塗り
２５	甕	7.5	不明	不明	0.5~2 mm細礫	灰橙	灰褐	
２６	壺	7.4	なで	剝離	0.5~2 mm細礫	灰肌		
２７	壺	8.0	なで	なで	0.5 mm以下砂粒	黄灰	淡灰茶	
２８	高杯		不明	不明	0.5 mm以下砂粒極少	暗肌灰	淡灰褐	
２９	高杯		よこなで はけめ	なで	0.5~1 mm砂粒少	灰肌	白肌灰	
３０	高杯		不明	無調整 不明	0.5~2 mm細礫	灰橙	淡灰橙	
３１	高杯		へらみがき	無調整 なで	0.5 mm以下砂粒極少	灰橙	白肌灰	
３２	高杯		へらみがき よこなで	なで よこなで	2 mm以下細礫	淡褐灰	暗灰茶	
３３	高杯		不明	不明	0.5~2 mm細礫極少	白灰肌	淡茶灰	
３４	高杯		へらみがき なで	はけめ なで	0.5 mm以下砂粒極少	赤茶	赤茶	丹塗り
３５	高杯		なで	無調整 なで	0.5~3 mm細礫	暗灰肌	淡灰茶	
３６	椀	5.7	よこなで なで	なで	0.5~1 mm細礫極少	淡橙	黒(煤)	黒色土器Ａ類
３７	壺	21.6	よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫極少	灰茶	灰茶	丹塗り
３８	甕	12.1	よこなで	よこなで へらけずり	1 mm以下細礫	淡灰褐	灰肌	沈線３条 炭化物付着
３９	甕	15.0	よこなで	よこなで へらけずり	0.5~2 mm細礫	暗茶	肌灰	沈線８条 炭化物付着
４０	甕	16.3	よこなで	よこなで	0.5 mm以下砂粒	暗灰肌	灰肌	沈線６条残存
４１	甕		よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫	淡灰橙	灰肌	
４２	壺		よこなで	よこなで	0.5~3 mm細礫	肌灰	灰肌	
４３	壺	22.0	へらけずり	へらみがき へらけずり	0.5 mm以下砂粒	暗茶灰	暗肌灰	
４４	壺		よこなで	よこなで	0.5 mm以下砂粒	暗黄灰	暗灰	
４５	壺		へらみがき	なで へらけずり	0.5~2 mm細礫少	赤茶	肌灰	丹塗り
４６	壺	26.6	よこなで	よこなで へらけずり	0.5~3 mm細礫	灰肌	淡灰褐	煤付着
４７	壺	9.2	よこなで	よこなで へらけずり	0.5 mm以下砂粒	灰褐	淡灰茶	
４８	椀	13.8	よこなで へらみがき	よこなで	0.5 mm以下砂粒極少	明赤茶	灰黄	丹塗り？
４９	椀		なで	なで	0.5 mm以下砂粒多	灰橙	灰肌	丹塗り？
５０	甕		よこなで たたき	なで	0.5~2 mm細礫	淡灰肌	黄灰	２次焼成

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
51	壺	2.0	なで	なで	0.5㎜以下砂粒極少	灰橙	橙灰	
52	高杯		へらみがき	なで	0.5~3㎜細礫	明灰茶	淡茶灰	丹塗り
53	高杯		へらみがき	なで	0.5~2㎜細礫少	赤茶	灰肌	丹塗り
54	壺		よこなで	よこなで	0.5㎜以下砂粒	灰肌	灰肌	凹線2条
55	壺		不明	不明	0.5~2㎜細礫多	灰橙	灰橙	
56	甕		はけめ	よこなで へらけずり	0.5~1㎜細礫少	淡肌灰	白灰	
57	鉢		よこなで	よこなで	0.5~2㎜細礫	赤茶	赤茶	丹塗り
58	壺		不明	不明	0.5~3㎜細礫	淡肌	白灰黄	凹線2条残存
59	壺		よこなで	よこなで	0.5㎜以下砂粒極少	白橙	白橙	
60	甕	16.4	よこなで	よこなで	0.5~1㎜細礫少	肌灰	淡灰褐	沈線6条
61	甕	16.2	なで はけめ みがき	よこなで けらけずり	0.5~1㎜砂粒	肌灰	茶褐	沈線6条 炭化物付着
62	壺	13.2	はけめ	へらけずり	0.5~8㎜細礫	橙灰	淡橙灰	
63	甕	6.5	はけめ	へらけずり	2㎜以下細礫	暗赤茶	肌灰	丹塗り 黒斑
64	壺		不明	不明	0.5~2㎜細礫	明灰橙	白灰	
65	甕		不明	不明	0.5㎜以下砂粒	淡灰茶	褐	内面炭化物付着
66	壺		不明 はけめ	へらけずり	0.5~1㎜細礫少	淡灰橙	暗灰	底外面黒色
67	壺		へらみがき	へらみがき	1㎜以下細礫少	暗灰黄	肌灰	直口壺？
68	高杯		へらみがき	へらみがき	0.5~2㎜細礫極少	灰肌	暗灰肌	
69	高杯		不明	不明	0.5~1㎜細礫極少	白橙	灰茶	
70	高杯	10.5	はけめ よこなで	よこなで	1㎜以下砂粒極少	赤茶	暗黄灰	丹塗り
71	高杯	16.9	へらみがき よこなで	よこなで	1~2㎜細礫極少	明茶	明茶	丹塗り
72	椀	4.6	なで	なで	0.5~5㎜細礫	暗赤茶	暗黄灰	丹塗り
73	甕		よこなで	よこなで	0.5㎜以下砂粒極少	淡灰橙	白灰肌	
74	壺		よこなで へらみがき	よこなで	0.5㎜以下砂粒極少	灰肌	灰肌	
75	深鉢		よこなで	なで	0.5㎜以下砂粒極少	白肌	白灰肌	刻目突帯 縄文土器？
76	壺		よこなで	よこなで へらけずり	0.5㎜以下砂粒	白肌灰	白灰茶	凹線1条残存
77	高杯	15.7	へらみがき	へらみがき	0.5㎜以下砂粒極少	赤茶	赤茶	丹塗り
78	甕		よこなで	よこなで	0.5㎜以下砂粒少	茶灰	灰橙	
79	壺		不明	不明	0.5~3㎜細礫	茶灰	茶灰	
80	深鉢		よこなで	なで	2㎜以下細礫少	淡灰肌	淡灰褐	刻目突帯 縄文土器？
81	鉢？		不明	不明	0.5㎜以下砂粒極少	淡灰肌	淡灰肌	内面凹線1条残存
82	甕		よこなで	よこなで	0.5~2㎜細礫少	灰橙	灰黄	刻目？ 沈線2条
83	壺		不明	不明	0.5~2㎜細礫少	暗灰肌	灰白	沈線4条残存
84	口縁		不明	不明	1㎜以下砂粒多	暗灰茶	暗灰橙	
85	鉢		へらみがき	へらみがき	0.5~2㎜細礫	暗褐	黒灰	縄文土器
86	蓋	5.4	不明	不明	2㎜以下細礫	白灰肌	白灰肌	
87	甕	18.9	よこなで 不明	よこなで 不明	2㎜以下細礫少	灰橙	灰橙	
88	甕	18.4	よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~2㎜細礫少	灰橙	淡灰橙	沈線？ 2条残存
89	底部		不明	剝離	2㎜以下細礫	白灰肌	白灰肌	
90	深鉢		なで	なで	0.5㎜以下砂粒	淡茶灰	淡灰橙	口唇刻目 刻目突帯
91	浅鉢		なで	なで	1㎜以下砂粒	淡灰褐	褐灰	
92	壺		へらみがき	へらみがき	0.5~2㎜細礫多	暗灰茶	褐	
93	壺		なで	なで	0.5~2㎜細礫少	灰肌	白茶灰	沈線2条 炭化物付着
94	甕		なで	なで	0.5~2㎜細礫	淡灰茶	淡灰橙	沈線3条 丹塗り？
95	壺	9.1	へらみがき なで	なで	0.5~2㎜細礫少	淡灰肌	灰茶	
96	甕	6.8	なで	なで	0.5~1㎜細礫少	黄灰	灰肌	
97	底部		不明	へらみがき？	0.5~3㎜細礫	暗赤茶	灰橙	
98	壺		不明	不明	0.5~2㎜細礫多	灰橙	淡灰橙	
99	甕		よこなで へらみがき	よこなで	0.5~1㎜細礫少	茶灰	白灰茶	口唇刻目 煤付着
100	壺		へらみがき	不明	0.5~1㎜細礫	灰茶	肌灰	沈線2条残存

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
101	深鉢		よこなで	よこなで	0.5~2 ㎜細礫多	灰橙	淡灰褐	口唇刻目 刻目突帯
102	深鉢		よこなで	よこなで	0.5~1 ㎜細礫	淡灰橙	灰肌	刻目突帯
103	甕		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	暗茶	灰橙	口唇刻目
104	甕		よこなで へらみがき	なで	0.5~2 ㎜細礫	明灰茶	灰橙	口唇刻目 沈線３条
105	壺		不明	不明 なで	0.5~2 ㎜細礫少	白肌灰	肌灰	
106	甕		よこなで へらみがき	なで	0.5~2 ㎜細礫	淡灰橙	白灰茶	口唇刻目 沈線２条
107	甕		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫	白灰肌	白灰肌	
108	甕		よこなで	不明	0.5 ㎜以下砂粒極少	淡灰黄	淡灰黄	
109	口縁		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫	灰褐	白灰肌	
110	壺		よこなで	よこなで	0.5 ㎜以下砂粒極少	灰褐	黒褐	
111	壺		よこなで	不明	0.5~2 ㎜細礫多	白灰橙	白灰橙	
112	口縁		不明	へらみがき	0.5~2 ㎜細礫	暗褐	灰茶	口唇刻目
113	壺	10.9	よこなで へらみがき	よこなで なで	0.5 ㎜以下砂粒極少	淡灰茶	淡灰茶	
114	壺		へらみがき	なで	0.5~3 ㎜細礫	暗茶灰	茶灰	沈線４条残存
115	壺		不明	不明	0.5~1 ㎜細礫少	灰肌	淡灰橙	沈線７条
116	壺		へらみがき	なで	1 ㎜以下細礫少	灰橙	白灰肌	沈線２条残存
117	壺		へらみがき	なで	0.5~2 ㎜細礫	灰肌	暗肌灰	刻目突帯
118	甕		へらみがき	よこなで なで	3 ㎜以下砂粒	灰肌	黄灰	沈線３条 刺突文２列
119	甕		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫	明灰肌	淡灰茶	沈線５条残存
120			不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	暗灰茶	黄灰	縦方向沈線７条残存
121			不明	不明	0.5~2 ㎜細礫	明灰橙	暗橙灰	突帯 焼成軟
122	浅鉢	8.7	へらみがき 無調整	へらみがき	0.5~2 ㎜細礫	灰肌	黒灰	
123	鉢	7.5	へらみがき 無調整	なで	0.5~3 ㎜細礫多	肌灰	茶灰	
124	底部		けずり？	なで	0.5~3 ㎜細礫多	淡灰褐	白灰茶	
125	壺	5.7	へらみがき 無調整	なで	0.5 ㎜以下砂粒	灰茶	淡灰褐	
126	壺		不明	なで	0.5~2 ㎜細礫多	淡灰褐	白茶	
127	底部		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	淡灰橙	白黄灰	
128	底部		へらみがき 無調整	剝離	0.5~2 ㎜細礫	茶灰		
129	甕		へらみがき なで	なで	0.5 ㎜以下砂粒	淡灰橙	灰肌	
130	高杯		へらみがき よこなで	へらけずり よこなで	1 ㎜以下砂粒	肌灰	肌灰	矢羽状透かし
131	甕		不明	不明	0.5~1 ㎜細礫多	淡灰茶	白灰茶	口唇刻目 沈線２条
132	甕		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫	淡茶灰	白灰肌	口唇刻目
133	甕		なで	不明	1 ㎜細礫少	灰褐	灰茶	口唇刻目
134	甕		よこなで	よこなで	0.5~2 ㎜細礫少	灰茶	白灰茶	煤付着
135	口縁		不明	不明	1 ㎜以下細礫	灰肌	灰肌	
136	甕		へらみがき	なで	0.5~3 ㎜細礫	茶灰	白灰茶	沈線１条残存
137	甕		へらみがき	なで	0.5~1 ㎜細礫少	灰肌	暗灰	沈線２条残存
138	甕		へらみがき	なで	0.5~2 ㎜細礫少	灰橙	黒灰	沈線２条
139			不明	へらけずり	0.5~2 ㎜細礫	淡灰茶	灰黄	縦方向沈線９条残存
140	壺		へらみがき	はけめ	0.5 ㎜砂粒	白灰茶	暗褐	黒斑 内面炭化物付着
141	壺		へらみがき	へらけずり	0.5 ㎜砂粒	淡灰橙	淡茶灰	沈線８条残存
142	底部	7.4	なで	なで	0.5~3 ㎜細礫	暗灰肌	白灰黄	
143	底部	6.5	不明	不明	0.5~3 ㎜白色細礫	茶灰	灰茶	
144	底部		不明	不明	0.5~1 ㎜細礫少	白灰黄	黒	
145	甕		へらみがき	へらけずり	0.5~4 ㎜細礫	灰橙	暗黄灰	
146	鉢		へらみがき	へらみがき	0.5~1 ㎜細礫	暗褐	暗褐	
147	深鉢		不明	不明	0.5~4 ㎜細礫多	淡灰茶	淡灰茶	刻目突帯 沈線
148	深鉢		よこなで	不明	0.5~2 ㎜細礫多	淡灰茶	淡灰茶	刻目突帯
149	深鉢		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	淡灰茶	淡灰茶	刻目突帯
150	深鉢		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫少	白黄灰	白黄灰	口唇刻目 刻目突帯

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
151	深鉢		よこなで 不明	不明	0.5~5 ㎜細礫多	白灰肌	茶灰	刻目突帯
152	深鉢		へらみがき 不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	淡灰茶	淡灰茶	縦方向沈線147同一個体
153	甕		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	灰褐	白灰肌	口唇刻目 焼成軟
154	甕		はけめ	なで	0.5~5 ㎜細礫	褐	灰肌	刻目 沈線1条 炭化物
155	甕		よこなで はけめ	よこなで 不明	0.5~2 ㎜細礫	茶灰	淡茶灰	刻目 沈線3条 煤付着
156	甕		よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~2 ㎜細礫	白橙灰	白灰茶	沈線2条
157	甕	23.1	不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	暗橙灰	淡灰橙	口唇刻目
158	甕		よこなで	よこなで	0.5~2 ㎜細礫	淡灰肌	白灰肌	
159	甕		不明	不明	0.5~1 ㎜細礫多	淡灰橙	白灰肌	
160	甕		不明	不明	0.5~1 ㎜細礫	灰肌	白灰肌	
161	壺		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	灰橙	灰肌	
162	壺		へらみがき	へらみがき	0.5~8 ㎜細礫少	暗茶	淡灰茶	
163	壺		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	暗灰橙	暗茶灰	
164	壺		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫	淡灰褐	淡灰褐	
165	壺	21.2	へらみがき	へらみがき	0.5~1 ㎜細礫	褐	灰橙	沈線3条残存
166			なで はけめ	なで	0.5~2 ㎜細礫	暗褐	暗灰	刻目 沈線2条
167			へらみがき	不明	0.5 ㎜以下砂粒少	灰橙	白灰黄	沈線2条残存
168	蓋	6.4	不明	不明	0.5~3 ㎜細礫	灰橙	白灰茶	
169	鉢	5.7	へらみがき	へらみがき なで	0.5~2 ㎜細礫少	淡灰褐	黒	
170	壺	8.6	へらみがき	なで	0.5~8 ㎜細礫	灰橙	暗灰	
171	壺	4.4	不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	白肌	淡白肌	底外面黒斑
172	壺	6.6	不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	淡肌灰	淡灰茶	
173	壺	9.7	不明	剝離	0.5~3 ㎜細礫多	淡灰茶		
174	壺	8.4	粗いはけめ なで	なで	0.5~1 ㎜細礫	淡灰褐	暗灰黄	
175	壺	8.0	不明 なで	不明	0.5~2 ㎜細礫	黄橙	灰褐	焼成軟
176	壺	6.8	へらみがき なで	なで	0.5~3 ㎜細礫多	暗茶	白黄灰	
177	甕	9.7	不明	なで	1 ㎜以下砂粒	淡灰肌	褐	内面炭化物付着
178	甕	5.6	へらみがき なで	なで	0.5~2 ㎜細礫	淡灰橙	灰茶	
179	底部	6.5	なで	不明	1 ㎜細礫少	淡茶灰	淡黄灰	
180	壺		へらみがき なで	なで	0.5~2 ㎜細礫	白灰茶	淡灰茶	
181	壺		不明	不明	0.5~1 ㎜細礫少	淡灰肌	灰茶	
182	底部		不明	なで	0.5~3 ㎜細礫	白灰茶	白灰黄	
183	底部		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫	灰橙	淡褐	
184	底部		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	淡橙	白灰茶	
185	底部		不明	不明	0.5~4 ㎜細礫	淡黄橙	灰茶	焼成軟
186	浅鉢		よこなで へらけずり	よこなで	0.5~1 ㎜細礫多	暗茶	灰茶	内面沈線1条
187	浅鉢		よこなで へらみがき	よこなで	1 ㎜以下砂粒	褐	茶褐	
188	深鉢		よこなで	よこなで なで	0.5~2 ㎜細礫	白灰茶	白灰茶	口唇刻目 斜格子状沈線
189	深鉢		よこなで	不明	0.5~2 ㎜細礫多	白肌	暗灰	口唇刻目 刻目突帯
190	深鉢		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫	暗灰	灰肌	刻目突帯 縦方向沈線
191	深鉢		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	褐	暗灰	刻目突帯
192	深鉢		なで	なで	0.5~1 ㎜細礫	白灰肌	暗灰	刻目突帯
193	深鉢		なで へらけずり	なで	0.5~2 ㎜細礫	灰茶	白灰茶	刻目突帯
194	深鉢		なで へらけずり	なで	0.5~2 ㎜細礫少	暗褐	灰肌	刻目突帯
195	深鉢		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	灰褐	淡灰茶	刻目突帯2条
196	深鉢		へらみがき	不明	0.5~2 ㎜細礫多	灰茶	灰茶	縦方向沈線4条残存
197	深鉢		なで 条痕	なで	0.5~2 ㎜細礫	暗褐	暗灰褐	爪形文1段
198	深鉢		なで 条痕	なで	0.5~2 ㎜細礫多	淡灰茶	淡灰褐	爪形文1段
199	深鉢		条痕	なで	0.5~2 ㎜細礫	暗褐	暗褐	爪形文1段残存
200	深鉢		よこなで へらみがき	よこなで へらけずり	0.5~2 ㎜細礫	暗茶	灰茶	沈線1条 炭化物付着

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
201	壺	5.0	なで みがき なで	なで	0.5~2 ㎜細礫	淡肌灰	白茶灰	底径 4.2 器高 10.75
202	甕		よこなで	よこなで なで	0.5 ㎜細礫少	暗茶	灰黄	刻目 凹線 煤付着
203	口縁		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫少	暗橙	肌灰	炭化物付着
204	口縁		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	灰肌	白灰黄	
205	鉢	21.8	よこなで 不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	明灰肌	灰肌	炭化物・煤付着 軟質
206	壺		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	白灰黄	淡灰橙	焼成軟
207	口縁		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫少	淡灰肌	白灰茶	焼成軟
208	甕		よこなで なで	よこなで なで	0.5~3 ㎜細礫	橙灰	淡灰黄	口唇刻目 沈線２条
209	甕		へらみがき	なで	0.5~4 ㎜細礫少	暗褐	灰褐	沈線２条 炭化物付着
210	甕		不明	なで	1 ㎜前後細礫少	淡灰肌	淡灰黄	沈線３条
211	壺		へらみがき	なで	0.5~2 ㎜細礫	暗茶	白灰茶	沈線１条
212	蓋	4.4	へらみがき	不明	0.5~3 ㎜細礫	白灰橙	白茶	頂面黒色 焼成軟
213	蓋	11.6	へらみがき なで	なで	0.5~3 ㎜細礫少	淡灰褐	白灰茶	煤付着
214	浅鉢	9.0	へらみがき なで	不明	0.5~4 ㎜細礫多	白黄灰	淡褐	
215	鉢	6.8	へらけずり なで	なで	0.5~1 ㎜砂粒	灰褐	暗茶	
216	鉢	7.8	なで	不明	0.5~3 ㎜細礫	黄灰	暗黄灰	
217	壺	7.0	なで	へらけずり	0.5~2 ㎜細礫	灰茶	淡灰褐	内面煤付着
218	甕	6.9	不明	不明	0.5~2 ㎜細礫多	灰橙	白灰黄	
219	壺	6.0	不明	不明	1~3 ㎜細礫	灰橙	褐	
220	壺	8.5	不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	白灰橙	灰橙	焼成軟
221	壺	11.5	不明	不明	0.5~1 ㎜細礫多	明灰橙	淡灰褐	
222	壺	10.6	なで	不明	0.5~2 ㎜細礫	灰橙	暗灰茶	
223	甕	7.7	不明	なで	0.5~2 ㎜細礫多	黄灰	淡褐	内面炭化物 ２次焼成
224	甕	6.2	不明	不明	0.5~5 ㎜細礫	白灰黄	白茶灰	
225	甕	8.4	不明	なで	0.5~3 ㎜細礫多	白灰橙	白灰茶	内面炭化物付着
226	底部	8.1	不明	なで	0.5~2 ㎜細礫少	灰茶	白灰茶	底外面煤付着？
227	底部	9.8	なで	なで	0.5~3 ㎜細礫少	淡灰橙	灰茶	
228	壺		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	淡灰橙	灰橙	焼成軟
229	底部		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫	白灰肌	白灰肌	焼成軟
230	底部		へらみがき	不明	0.5~1 ㎜細礫多	白黄灰	淡灰褐	
231	浅鉢		よこなで へらみがき	よこなで へらみがき	0.5 ㎜以下砂粒	暗褐	暗褐	
232	浅鉢		不明	へらみがき	0.5 ㎜以下砂粒	淡灰褐	淡灰褐	
233	口縁		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫少	灰橙	灰橙	焼成軟
234	深鉢		不明	不明	0.5~2 ㎜細礫	淡灰橙	淡灰橙	口唇刻目 刻目突帯
235	壺	14.7	よこなで へらみがき	よこなで なで	1~3 ㎜細礫多	淡灰茶	白灰茶	沈線１条
236	壺		よこなで 条痕	よこなで なで	0.5~2 ㎜細礫	暗褐	暗茶	煤・炭化物付着
237	甕	17.4	よこなで へらみがき	よこなで なで	0.5~1 ㎜細礫	暗茶	灰茶	刻目 凹線１条 炭化物
238	甕		よこなで	不明	0.5~2 ㎜細礫	淡灰褐	白灰茶	刻目 凹線 炭化物 軟質
239	甕		よこなで	不明	0.5 ㎜砂粒	白茶	白灰茶	口唇刻目
240	甕		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫	暗茶	淡褐	口唇刻目
241	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.5~3 ㎜細礫少	暗茶	暗茶	
242	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.5 ㎜砂粒	黒	褐	
243	浅鉢		へらみがき	へらみがき なで	0.1~2 ㎜細礫多	暗灰	暗褐	内面凹線２条 穿孔
244	深鉢		よこなで へらみがき	よこなで なで	0.1~2 ㎜細礫多	灰茶	灰茶	口唇刻目 斜格子状沈線
245	深鉢		よこなで へらみがき	よこなで なで	0.5~2 ㎜細礫多	白茶灰	灰白	口唇刻目 斜格子状沈線
246	深鉢		不明	不明	0.5~3 ㎜細礫多	灰白	灰白	口唇刻目 斜格子状沈線
247	深鉢		条痕	なで へらけずり	0.1~0.5 ㎜砂粒少	褐	淡茶灰	口唇刻目 炭化物付着
248	深鉢		不明 へらみがき	不明	0.1~1 ㎜細礫多	白黄灰	淡灰茶	刻目 沈線 焼成軟
249	深鉢		よこなで 条痕	よこなで なで	0.1~2 ㎜細礫多	淡灰茶	灰茶	口唇刻目 刻目突帯 押形文
250	深鉢		条痕 よこなで	よこなで	0.1 ㎜砂粒	灰褐	暗灰茶	口唇刻目 炭化物付着

番号	器種	口径 底径	外面調整	内面調整	胎土	色調		備考
						外面	内面	
251	深鉢		なで へらけずり	なで	0.5㎜砂粒少	暗褐	暗灰褐	押形文 炭化物付着
252	深鉢		なで	なで	0.5~1㎜砂粒	暗灰茶	淡灰茶	押形文
253	甕		よこなで 不明	不明	0.5~2㎜細礫	淡灰橙	白灰黄	刻目 炭化物 焼成軟
254	壺	6.9	不明	不明	1~2㎜細礫多	淡橙	白灰茶	多条沈線 焼成軟
255	甕		よこなで	よこなで	0.5~2㎜細礫	淡灰橙	灰橙	口唇押形文 焼成軟
256	甕		よこなで	よこなで なで	0.5~1㎜細礫	淡灰茶	茶灰	口唇刻目 炭化物付着
257	壺		なで	不明	1~3㎜細礫多	黒	白橙	沈線２条 炭化物付着
258	浅鉢	7.0	へらみがき なで みがき	へらみがき	0.5~2㎜細礫	黒	黒	
259	浅鉢	9.6	不明	不明	0.5~3㎜細礫	灰黄	淡灰肌	焼成軟
260	鉢	6.3	へらみがき なで	へらみがき	0.5~2㎜細礫多	淡灰褐	暗灰茶	
261	鉢	7.7	不明	なで	0.5~3㎜細礫多	淡灰褐	灰茶	
262	深鉢	12.4	へらけずり なで	なで	0.5~2㎜細礫多	淡灰褐	灰褐	外面煤 内面炭化物付着
263	底部	9.8	なで	なで	0.5~3㎜細礫	白灰茶	淡灰	
264	底部	6.2	不明 なで	なで	0.5~2㎜細礫	淡灰橙	灰茶	内面炭化物付着
265	底部	8.9	なで	なで	0.5~3㎜細礫	淡灰茶	灰茶	内外面炭化物付着
266	底部	6.0	なで	なで	0.5~1㎜細礫	暗灰黄	暗褐	内外面炭化物付着
267	底部	3.8	不明	不明	0.5~1㎜細礫多	淡褐	白灰茶	
268	鉢		なで	なで	0.1~2㎜細礫多	灰褐	白灰茶	突帯 刺突文 沈線
269	浅鉢	33.4	よこなで へらみがき	よこなで なで	0.1~1㎜細礫	淡褐	淡灰茶	
270	鉢	21.0	よこなで みがき なで	よこなで はけめ	0.5~2㎜細礫	淡灰	灰肌	内外面炭化物付着
271	浅鉢	31.0	へらみがき	へらみがき	2㎜以下細礫	暗褐	灰褐	波状口縁 朱塗り
272	浅鉢		へらみがき	へらみがき なで	0.1~1㎜細礫多	淡褐	淡灰褐	波状口縁
273	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.1~2㎜細礫	黒	淡灰褐	炭化物付着
274	浅鉢		へらみがき	へらみがき なで	0.1~1㎜細礫	淡灰茶	淡灰茶	凹線１条残存
275	深鉢	30.9	なで へらけずり	なで へらけずり	0.1~2㎜細礫多	淡灰茶	茶灰	刻目 押形文 炭化物
276	深鉢		なで 条痕	なで	0.1~3㎜細礫多	暗褐	白茶	口唇刻目 刻目突帯 押形文
277	深鉢		なで 条痕	なで へらけずり	0.1~2㎜細礫	淡褐	暗褐	口唇刻目 刻目突帯 炭化物
278	深鉢		よこなで 条痕	よこなで なで	0.1~1㎜細礫多	淡灰茶	褐	刻目突帯
279	深鉢		よこなで	よこなで なで	0.1~1㎜細礫多	暗褐	灰褐	口唇刻目 刻目突帯 炭化物
280	深鉢		なで 条痕	なで	0.1~2㎜細礫多	暗茶	淡灰茶	頸部爪形文 炭化物
281	深鉢		なで 条痕	なで	0.1~1㎜細礫多	暗茶	暗茶	口唇刻目 炭化物付着
282	壺	8.6	へらみがき なで	なで	0.1~5㎜細礫	淡灰茶	白灰	焼成軟
283	甕	9.1	へらみがき なで	不明	0.1~2㎜細礫	淡茶灰	黒	内面炭化物付着
284			縄文？	なで	0.5~1㎜細礫少	茶褐	灰褐	
285	浅鉢		へらみがき	へらみがき	0.5㎜以下砂粒	灰褐	暗褐	

石 器 観 察 表

	器　種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石　材	備　考
S1	打製石鏃	2.8	1.9	0.35	1.8	サヌカイト	未製品 自然面残存
S2	剝片	3.0	2.2	0.4	2.3	サヌカイト	
S3	剝片	3.2	1.6	0.25	2.2	サヌカイト	風化著しい 乳白色
S4	剝片	3.0	2.0	0.3	2.0	サヌカイト	風化
S5	敲石	12.3	6.8	3.1	382	花崗岩	自然石？
S6	敲石	13.7	11.3	11.0	2479	花崗岩	
S7	楔形石器	2.3	2.65	0.3	1.3	サヌカイト	
S8	剝片	4.15	2.5	0.5	5.7	サヌカイト	
S9	磨製石包丁		5.2	0.9	26.3	砂岩	2/3 欠損
S10	打製石鏃	1.55	1.6	0.2	0.5	サヌカイト	
S11	剝片	5.5	1.75	0.8	5.4	サヌカイト	
S12	打製石包丁	7.7	5.2	0.95	36.3	サヌカイト	
S13		4.3	1.8	0.55	4.1	サヌカイト	ほぼ全面磨滅
S14	剝片	5.5	2.1	0.8	12.1	サヌカイト	自然面残存
S15	打製石錐	4.3	2.6	0.45	2.3	サヌカイト	風化
S16	剝片	2.8	3.1	0.5	4.5	サヌカイト	自然面残存
S17	打製石鏃	2.8	1.7	0.4	1.9	サヌカイト	未製品
S18	剝片	3.2	1.3	0.8	2.8	サヌカイト	
S19	剝片	2.7	2.5	0.4	1.8	サヌカイト	
S20	打製石鏃	2.1	1.4	0.4	0.8	サヌカイト	
S21	打製石鏃		1.7	0.3	0.8	サヌカイト	先端欠損　自然面残存
S22	打製石鏃	1.9	1.4	0.25	0.5	サヌカイト	
S23	楔形石器	2.6	1.9	0.45	2.1	サヌカイト	下辺刃潰れ
S24		3.75	1.45	0.4	2.9	サヌカイト	打製石槍？
S25	剝片	5.8	2.5	0.55	9.9	サヌカイト	
S26	剝片	1.45	4.6	0.75	5.7	サヌカイト	
S27	剝片	4.6	3.2	1.05	15.7	サヌカイト	
S28	剝片	4.45	3.3	1.15	13.7	サヌカイト	
S29	剝片	3.5	1.8	0.6	3.1	サヌカイト	
S30	剝片	3.2	1.5	0.5	2.1	サヌカイト	

	器　種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石　材	備　考
S31	敲石	13.2	5.9	3.95	401	花崗岩	下端打撃痕　自然石？
S32	砥石？	14.8	7.0	2.65	478	砂岩	上下面摩滅
S33	打製石鍬	10.0	7.4	2.0	199	サヌカイト	先端磨滅
S34	剝片	4.0	1.75	0.6	4.7	サヌカイト	
S35	剝片	3.9	2.05	0.75	6.1	サヌカイト	自然面残存
S36	剝片	3.8	2.35	0.45	3.6	サヌカイト	
S37	剝片	4.0	2.15	0.5	3.0	サヌカイト	自然面残存
S38	剝片	4.4	3.65	0.75	11.0	サヌカイト	自然面残存
S39	剝片	3.45	2.55	0.9	8.7	サヌカイト	
S40	磨石	8.95	7.2	6.5	542	花崗岩	周辺打撃痕　上下面磨滅
S41	敲石		7.8	6.0	499	花崗岩	先端打撃痕　一部欠損
S42	敲石	12.1	4.1	3.0	200	花崗岩	全面磨滅
S43	石錘	5.2	4.6	1.2	44.2	砂岩	
S44	磨石	6.0	3.9	2.05	69.4	流紋岩	上面摩滅
S45	磨石	11.9	9.3	2.9	443	砂岩	上下端打撃痕　下面摩滅
S46	砥石？	15.3	14.3	3.8	1238	砂岩	上面に溝状窪み
S47	楔形石器	6.3	4.5	1.05	37.9	サヌカイト	
S48	剝片	4.4	3.1	1.4	22.5	サヌカイト	
S49	磨石	7.9	8.5	6.1	736	凝灰岩	周辺打撃痕　上下面磨滅
S50	磨石	14.6	8.2	3.6	558	花崗岩	先端打撃痕　全面磨滅
S51	石錘	6.9	4.1	1.2	46.1	砂岩	
S52	石錘	12.35	6.6	1.2	169	砂岩・泥岩	ほぼ全面磨滅
S53		13.1	8.0	4.3	460	砂岩	上下面摩滅
S54	打製石鏃	1.95	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	
S55	スクレイパー	4.9	4.0	0.9	21.6	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S56	楔形石器	2.8	2.4	0.5	4.9	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S57	楔形石器	4.2	2.5	0.8	8.8	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S58	剝片	2.2	3.5	0.8	7.4	サヌカイト	自然面残存
S59	剝片	4.1	2.7	0.7	7.3	サヌカイト	自然面残存
S60	磨製石斧	14.2	5.2	3.5	362	砂岩	先端欠損

	器　種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石　材	備　考
S61	磨石	7.85	5.4	1.95	115	花崗岩	全面磨滅
S62	磨石	14.8	11.4	8.0	1970	花崗岩	端部打撃痕　平面磨滅
S63	敲石		8.6	6.5	450	花崗岩	先端打撃痕　平面磨滅
S64	敲石		10.4	5.5	572	花崗岩	先端打撃痕　上下面磨滅
S65	磨石	13.2	10.1	6.4	1138	花崗岩	側辺打撃痕　上下面磨滅
S66	剝片	2.7	2.1	0.45	2.2	サヌカイト	自然面残存
S67	剝片	4.9	1.3	0.7	3.1	サヌカイト	
S68	スクレイパー	4.2	4.5	0.5	12.3	サヌカイト	
S69	スクレイパー	5.5	4.1	0.6	12.2	サヌカイト	下辺刃潰れ
S70	楔形石器	3.2	4.3	1.4	21.6	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S71	剝片	6.1	2.25	0.9	13.8	サヌカイト	
S72	剝片	9.05	3.0	1.0	39.3	サヌカイト	自然面残存
S73	磨石	5.6	3.5	1.6	40.6	砂岩？	全面磨滅
S74	スクレイパー	5.4	3.5	0.4	8.1	サヌカイト	自然面残存
S75	剝片	5.4	3.2	0.7	11.4	サヌカイト	
S76	打製石鍬	13.3	6.5	2.2	226	サヌカイト	上面磨滅
S77	楔形石器	5.2	3.2	0.7	10.3	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S78	楔形石器	5.2	3.3	0.6	10.6	サヌカイト	上下辺刃潰れ
S79	剝片	6.25	4.85	1.1	29.4	サヌカイト	自然面残存
S80	剝片	7.3	3.9	0.7	21.2	サヌカイト	
S81	石皿	25.0	16.3	12.7	6100	花崗岩	全面磨滅
S82	磨石	13.1	10.0	4.7	929	花崗岩	上下端打撃痕　全面磨滅

写真１　調査地周辺航空写真（1992年7月27日撮影　1:12,500　上が北）

写真２　調査地遠景（西から）

写真３　第１遺構面（東から）

写真４　第２遺構面（東から）

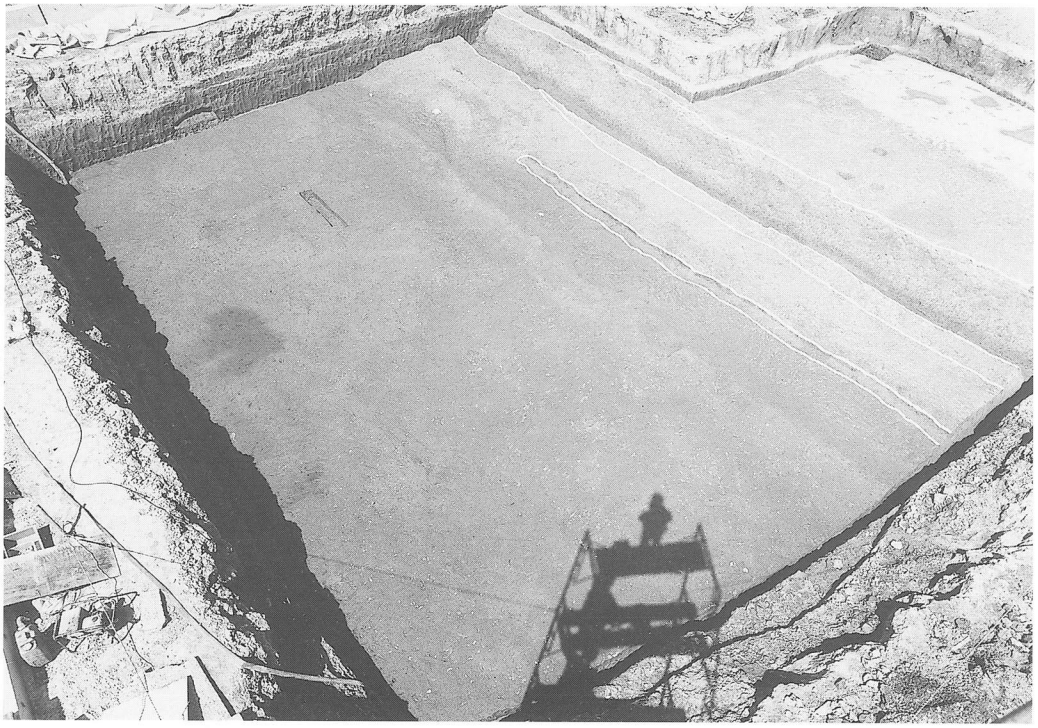


写真５　第３遺構面（東から）

写真６　第４遺構面（東から）

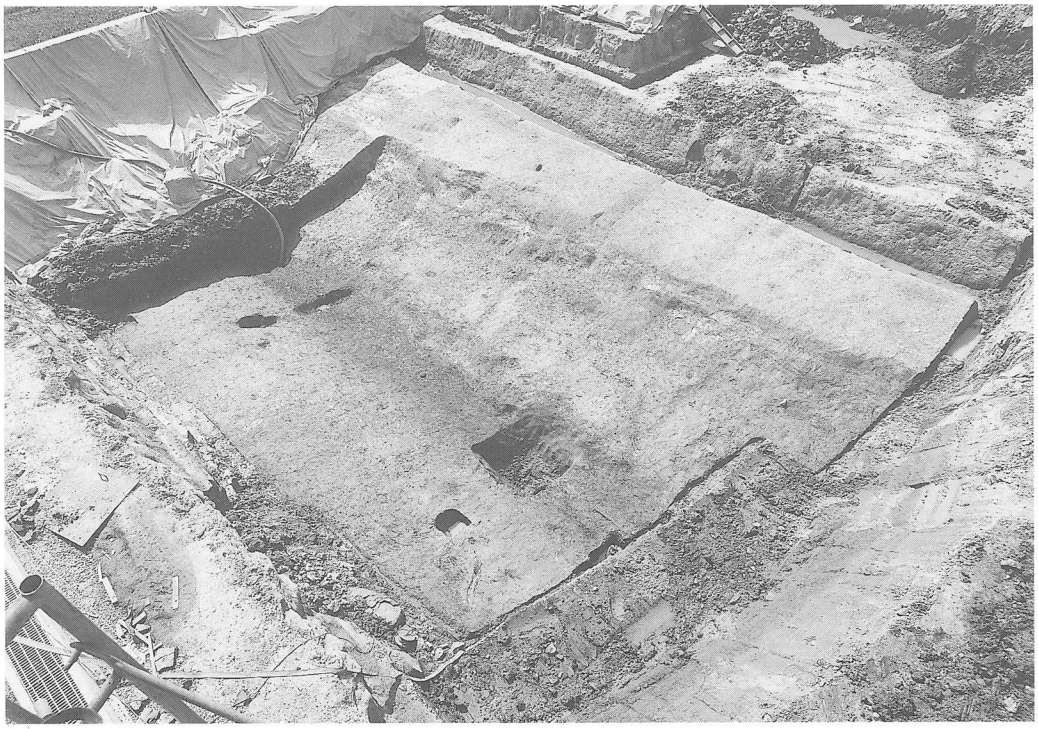


写真７　第９（最終）遺構面（東から）

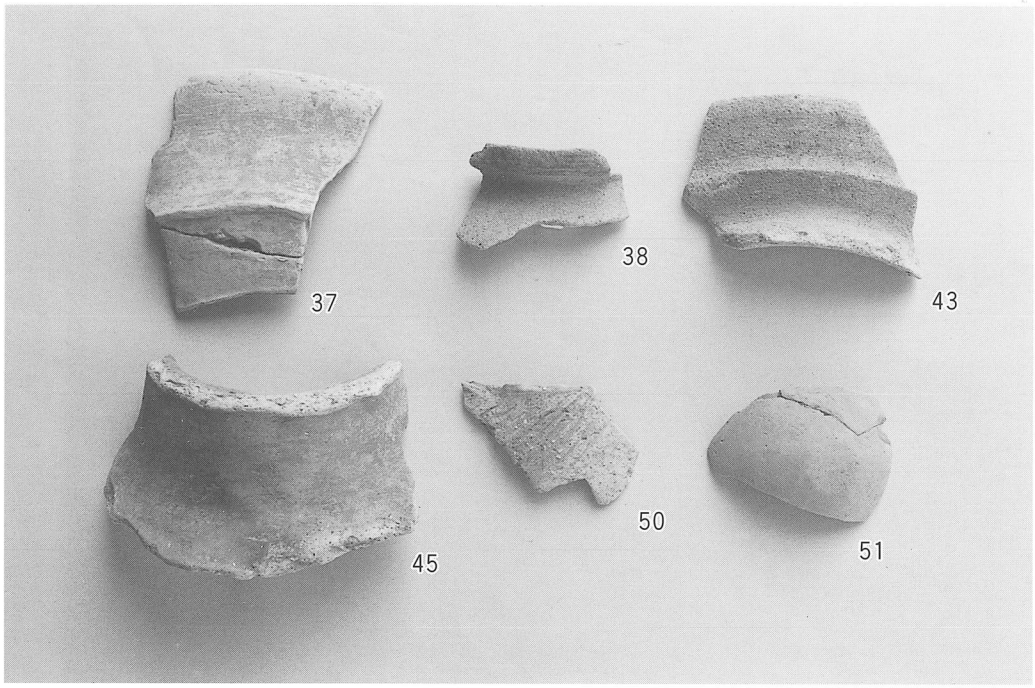


写真８　第２層上層出土土器

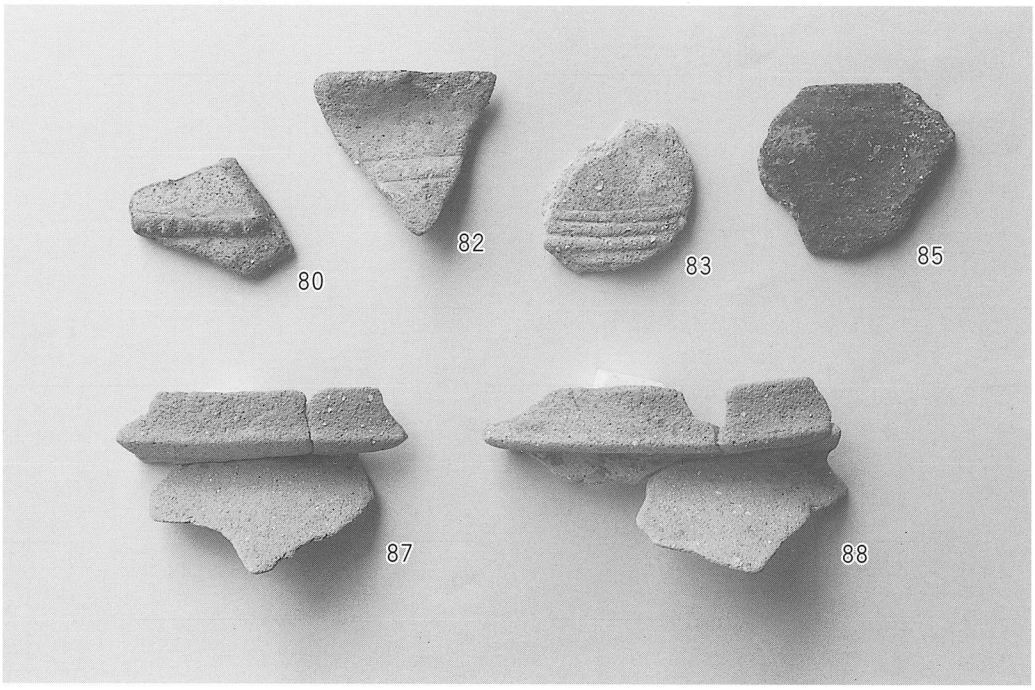


写真９　第３層出土土器

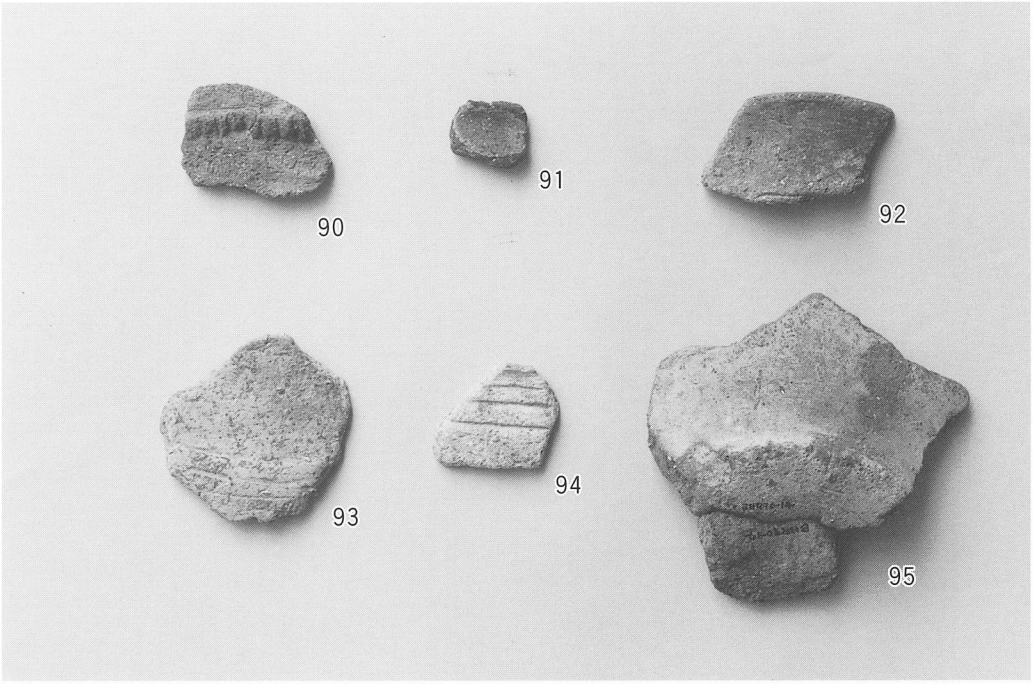


写真10　SD01出土土器

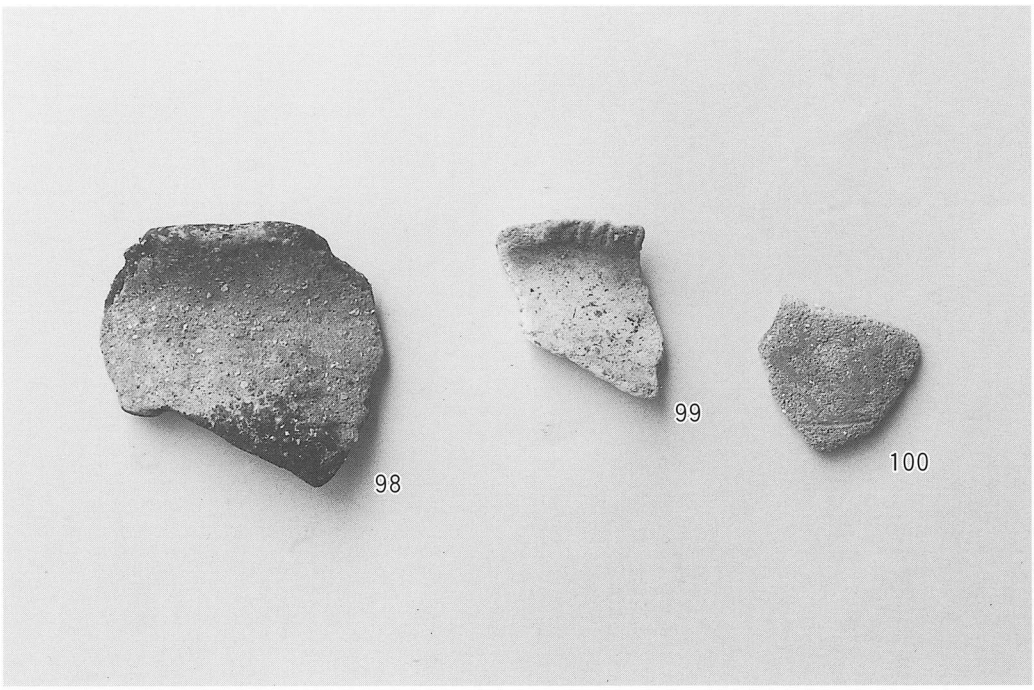


写真11　SD02出土土器

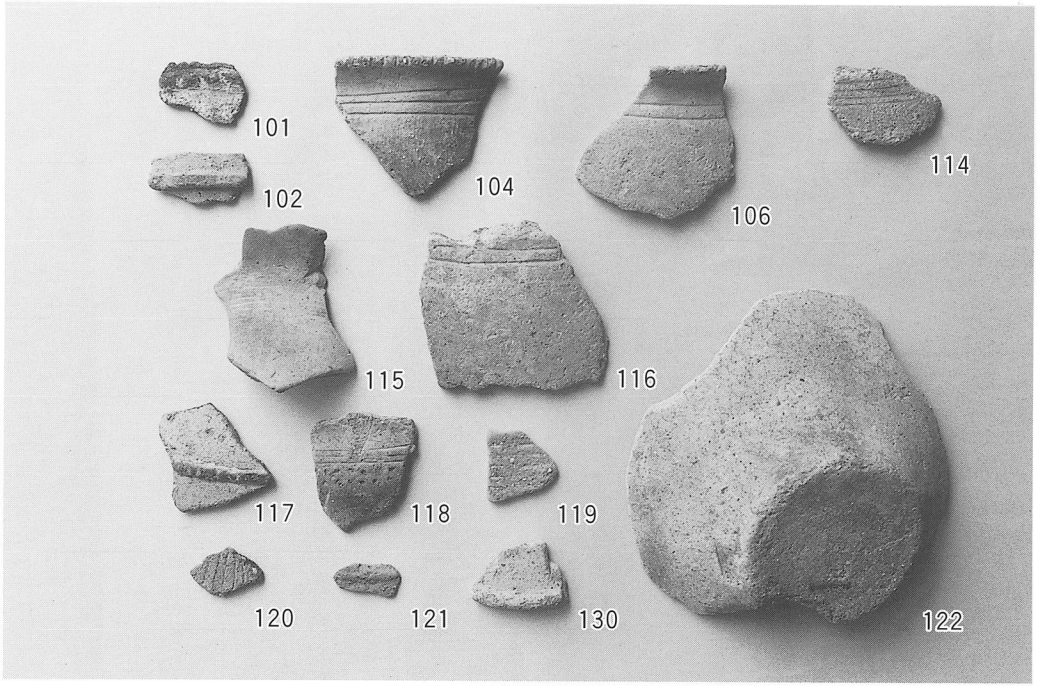


写真 12　第 4 層上層出土土器

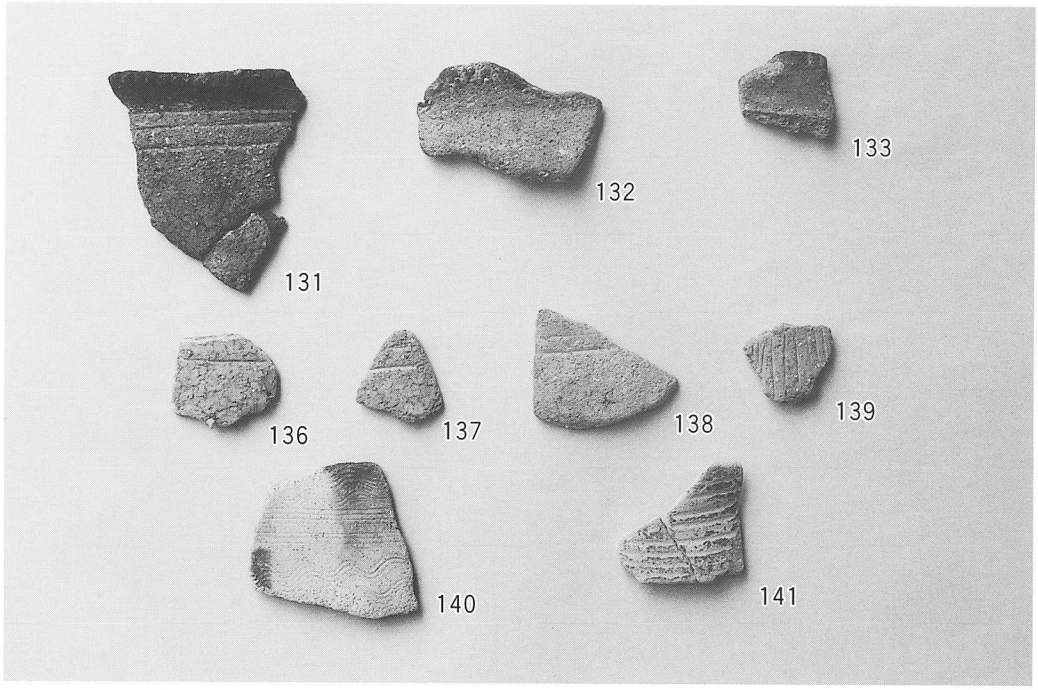


写真 13　第 4 層下層出土土器

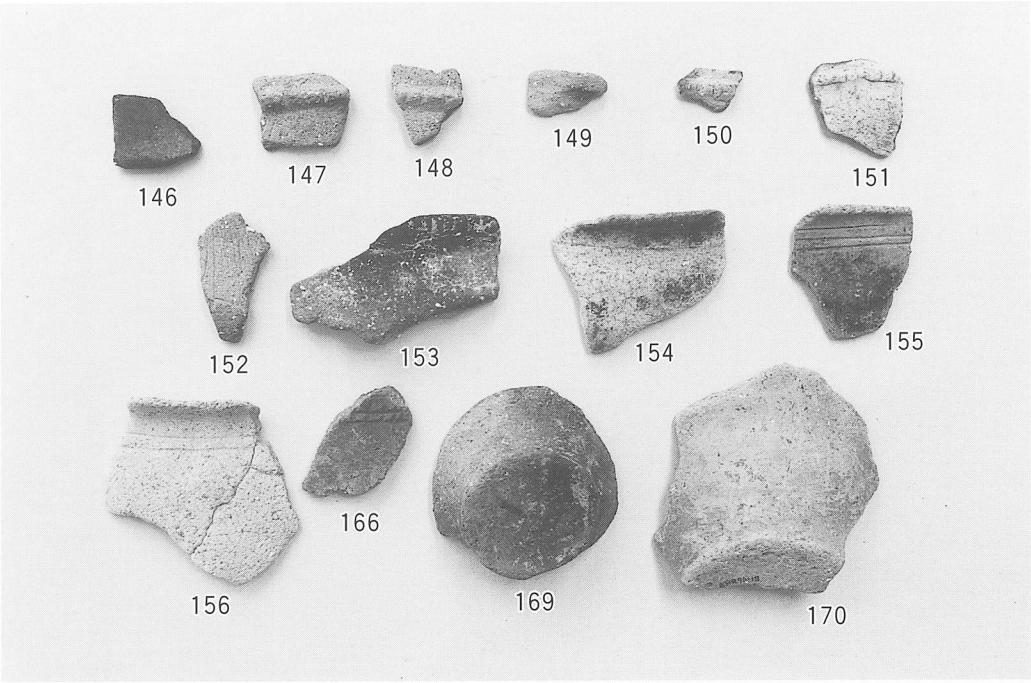


写真 14　第 5 層上層出土土器

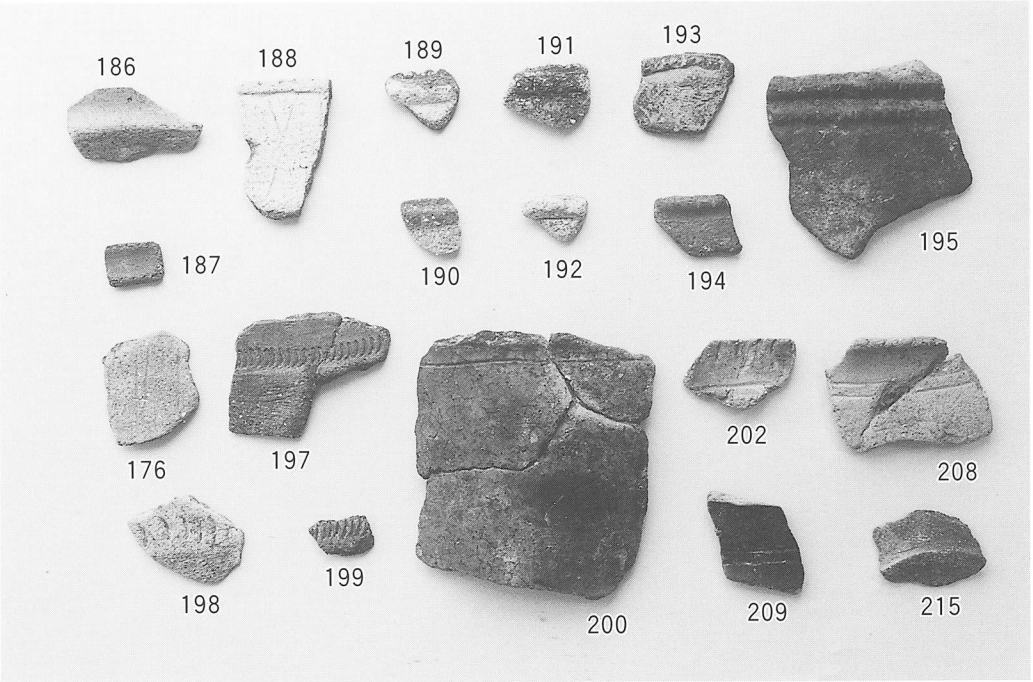


写真 15　第 5 層下層出土土器

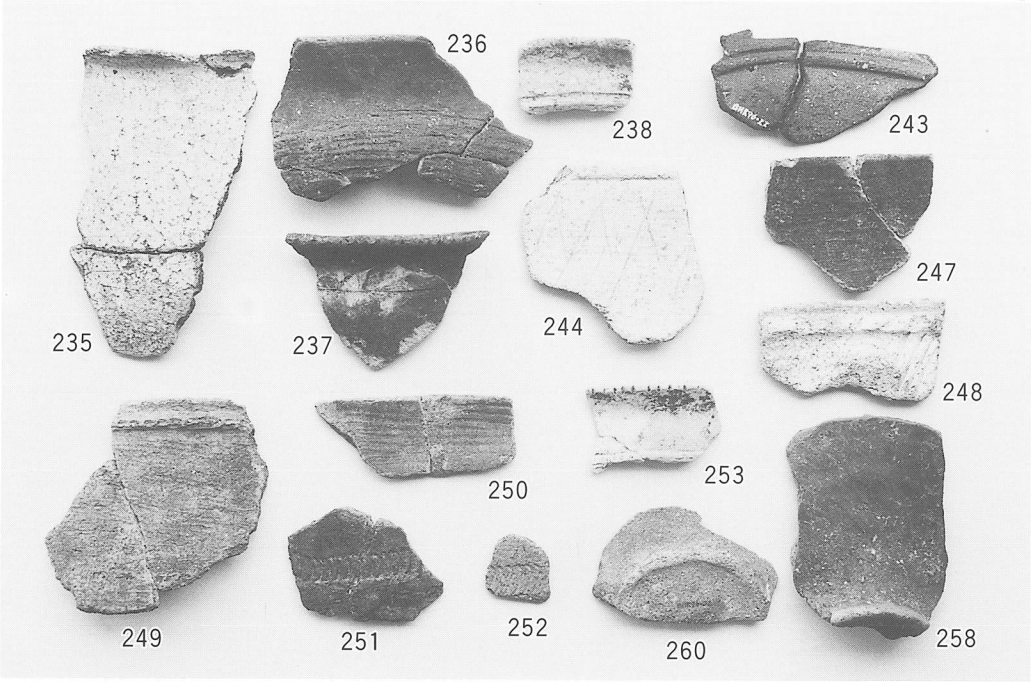


写真 16　第 7 層出土土器

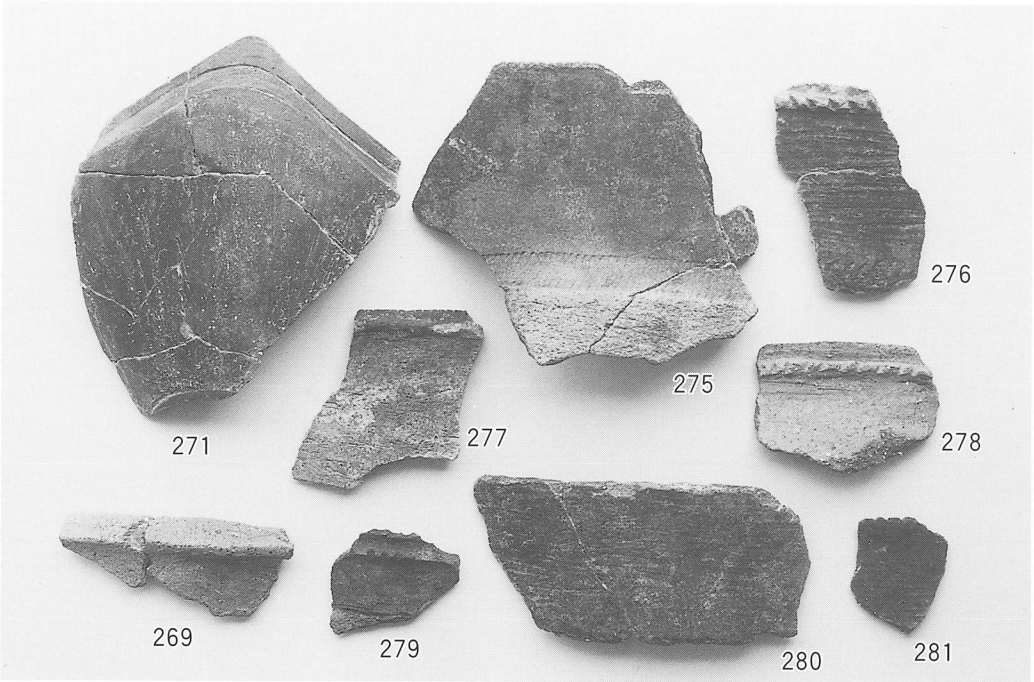


写真 17　第 9 層上層出土土器

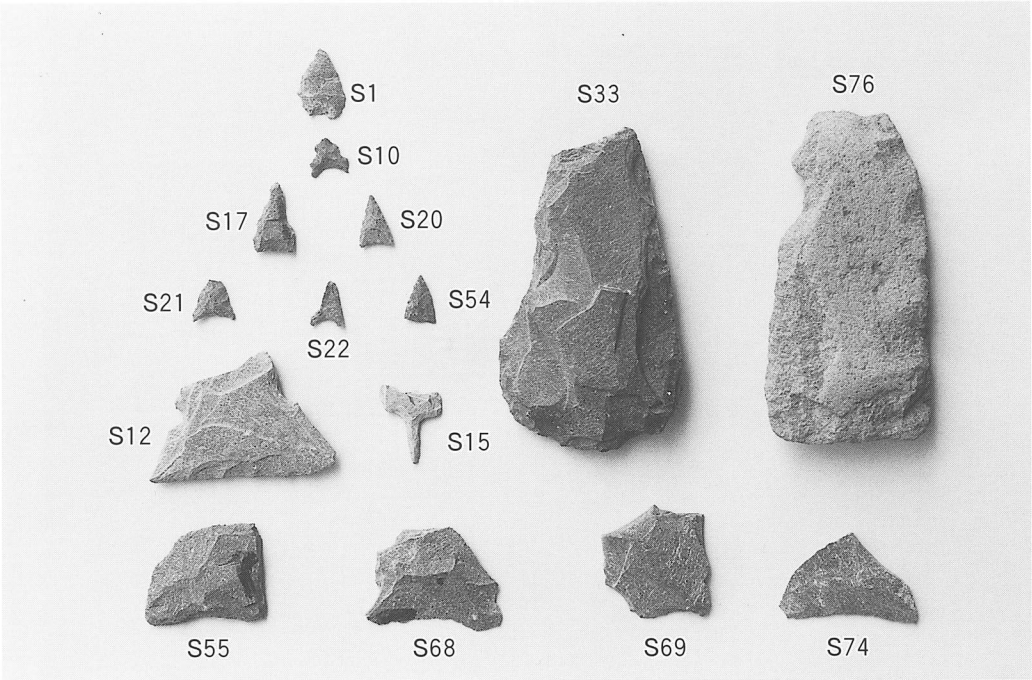


写真 18　出土打製石器

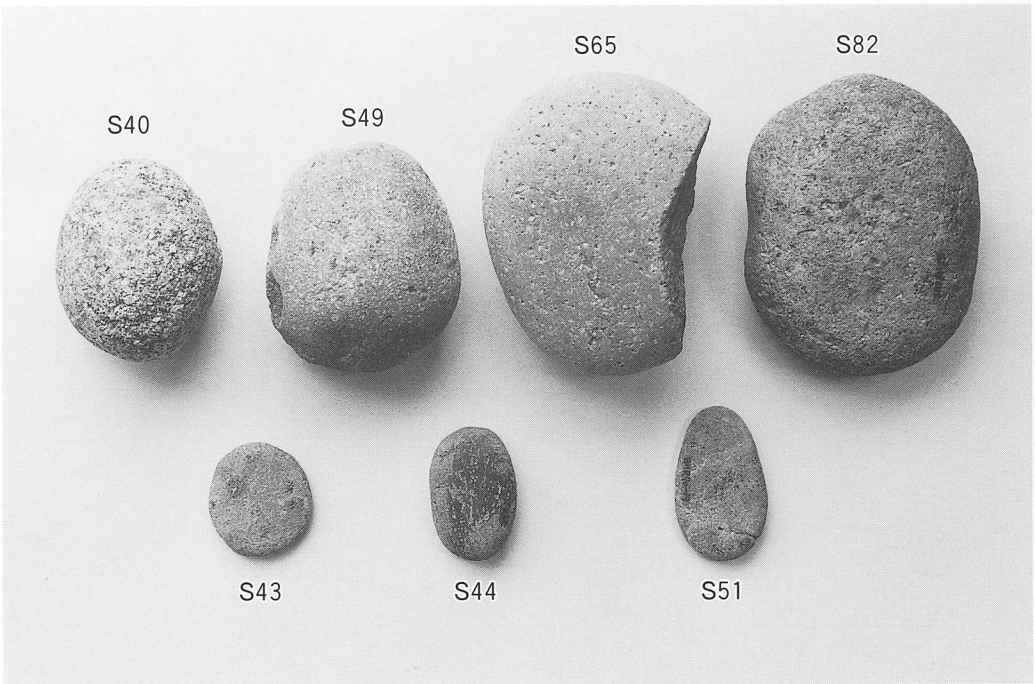


写真 19　出土磨製石器

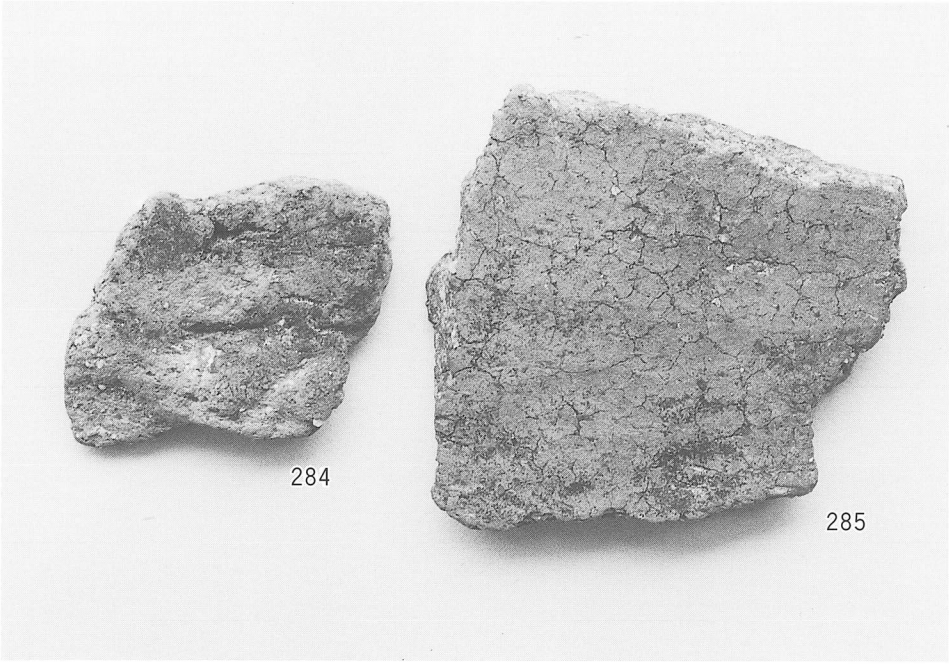
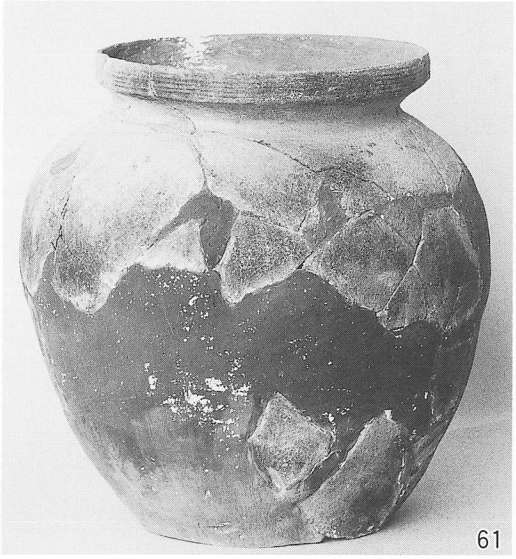
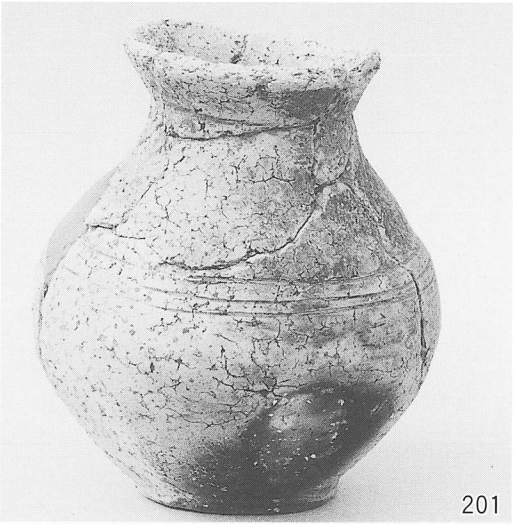


写真 20　第 9 層下層出土土器





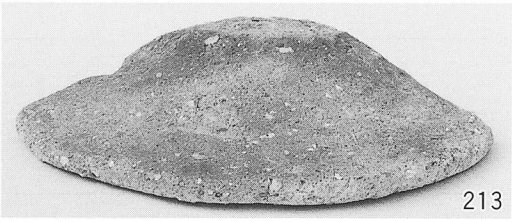
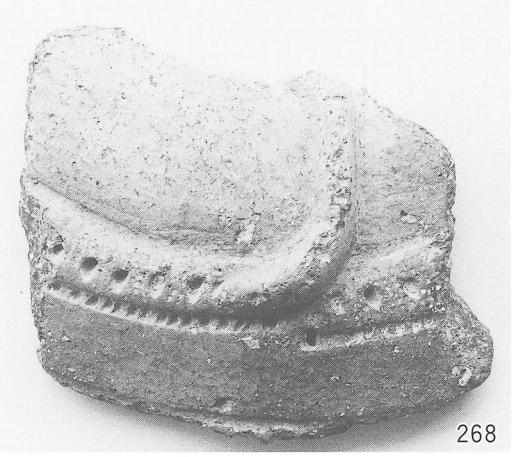


写真 21　出土遺物（1）



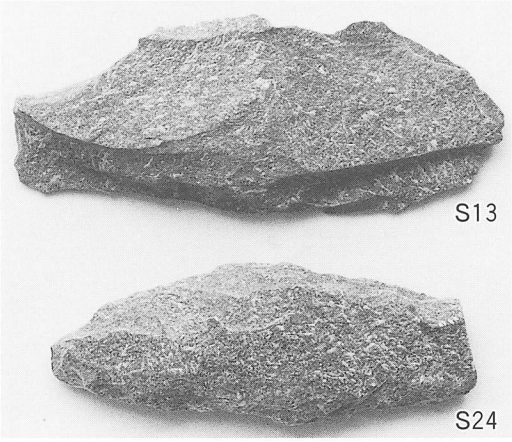


写真 22　出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	びぜんはらいせき
書名	備前原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	御津町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	10
編著者名	長谷川一英
編集機関	御津町教育委員会
所在地	〒７０９－２１２１　岡山県御津郡御津町宇垣 1629　TEL0867-24-1711
発行年月日	西暦　２００２年　３月　３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
備前原遺跡（びぜんはらいせき）	岡山県御津郡（おかやまけんみつぐん） 御津町（みつちょう）大字（おおあざ）宇垣（うがき） 字山條（あざやまじょう）	33301	―	34 度 46 分 58 秒	133 度 55 分 42 秒	19900318 ～ 19900531	300	消防署建設に伴う事前調査

収集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
備前原遺跡	集落	縄文	水田 溝　２条 河道	縄文土器、弥生土器、石器	縄文から中世までの複合遺跡 水田面を検出 河道より縄文晩期の土器

御津町埋蔵文化財発掘調査報告 10

備　前　原　遺　跡

２００２年３月３１日発行

発　　行　岡山県御津町教育委員会
〒７０９－２１２１
岡山県御津郡御津町宇垣１６２９

印　　刷　株式会社みつ印刷
〒701-1145
岡山県岡山市横井上７８６－１
TEL 086-294-2302